

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第185集

枇杷坂遺跡群 ENNSHOUBOU

円正坊遺跡VIII

長野県佐久市岩村田 円正坊遺跡 第8次調査

-ト骨・銅釧が出土した弥生後期集落の調査-

2011.3

学校法人聖啓学園
佐久市教育委員会

枇杷坂遺跡群 ENNSHOUBOU

円正坊遺跡VIII

長野県佐久市岩村田 円正坊遺跡 第8次調査

- ト骨・銅釧が出土した弥生後期集落の調査 -

2011.3

学校法人聖啓学園
佐久市教育委員会



H28号住居址出土「ト骨」



弥生時代後期の装身具（上列右から3点勾玉、他は銅鏡）

口絵 2



調査区全景（西半）



H36号住居址東南隅遺物出土状況（北から）

例　　言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する枇杷坂遺跡群円正坊遺跡の第8次発掘調査報告書である。
- 2 調査は学校法人聖啓学園の学生寮建設に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地　円正坊遺跡Ⅶ(IEWⅦ)　佐久市岩村田
- 4 調査期間及び面積　発掘調査：平成21年5月26日～7月31日
整　理：平成21年8月1日～平成23年3月25日
開発面積 2,582.37 m²　調査面積 1,133 m²
- 5 当遺跡の発掘調査概要は、佐久市教育委員会文化財課「年報19」でも報告しているが、本書が最終報告である。
- 6 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1:2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1:5,000）である。
- 7 本書で扱っている座標は世界溝地系である。
- 8 本書の作成は小林が行った。
- 9 本書に掲載した遺構図は、簡易遠方測量で手取りしたものを、図面修正し、Adobe Illustrator でデジタルトレースし作成した。
- 10 遺物実測は手取りで行い、Adobe Illustrator によりデジタルトレースを行った。
- 11 写真は、デジタル1眼レフカメラで撮影したものを Adobe Photoshop で補正等を行い Adobe Illustrator により、版組を行った。
- 12 出土金属器の保存処理は、（株）東都文化財保存研究所が行った。
- 13 出土動物遺体は室内での自然乾燥後、竹ブラシ、筆によりクリーニングを行った。
- 16 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。



H25 出土巻貝



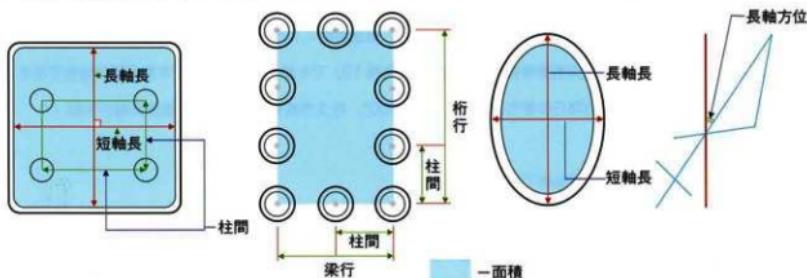
H28 出土猪牙



カクラン出土鹿角

凡　例

- 1 遺構の略記号は竪穴住居址-H、竪穴建物址-Ta、土坑-D、溝址-M、ピット-P、周溝墓-OTである。
- 2 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。これ以外のものは、挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺構の海拔標高は遺構毎に統一し、水糸標高をスケール上に「標高」として記してある。
- 4 土層の色調は 1988 年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 5 遺物挿図番号、遺物写真番号、遺物観察表番号は一致する。
- 6 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたがい、間隔は 4×4 m に設定した。
- 7 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。遺構の面積は床面積である。壁残高（深度）は最大値である。



住居・竪穴建物址

掘立柱建物址

土坑

長軸方位

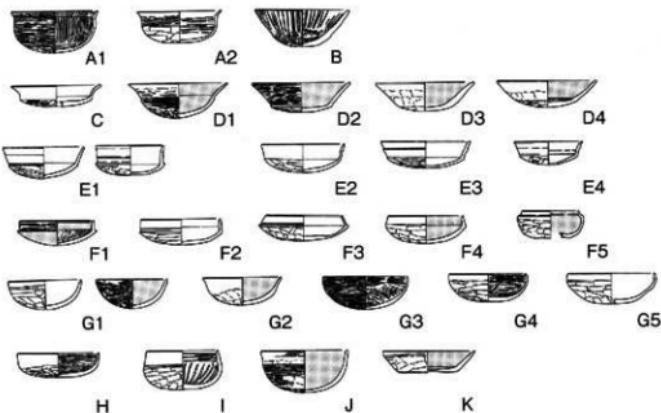
- 8 挿図中における網掛は以下の表現である。



- 9 土師器坏の分類は 1999 年佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 73 集 「西一本柳Ⅲ・IV」の分類を用いた。

- A1 丸底の底部から体部が内湾しながら立ち上がり、短い口縁部が強く外反する。
- A2 A1 の口縁部がやや長く、緩やかに外反する。
- B A1 に共伴する高坏の脚部が省略された形態。
- C A2 の口縁部が更に長くなり、口縁部と体部の境に稜を形成して外反するもの。
- D1 C の底部が半球状に丸く、深くなったもの。口縁部と体部の境の棱は調整による段や、凹に変化する。
- D2 D1 の体部下が浅いもの。
- D3 D2 の口縁部と体部の境の、段や凹が省略されたもの。D1-D2 に施されていたヘラミガキ調整も省略化される。
- D4 D3において僅かに名残を止めていた、口縁部と体部の屈曲がなくなり、浅い半球状を呈するもの。内面の底部と体部の境に段を有する。
- E1 須恵器坏蓋の模倣、あるいは模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有するもの。
- E2 須恵器坏蓋の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境の段を有さず、稜を有するもの。
- E3 所謂有段口縁坏。

- E3 所謂有段口縁坏。
- E4 所謂北武藏型坏。
- F1 須恵器坏身の模倣、あるいは坏身の模倣を原形とするもので、口縁部と体部の境に段を有し、口縁部が直立するもの。
- F2 須恵器坏身の模倣を原形とするものの内、体部と口縁部の境に段を有さず、稜を有するもので、口縁部が直立するもの。
- F3 F1 の口縁部が内傾するもの。
- F4 F2 の口縁部が内傾するもの。
- F5 F1 の体部が平底から内湾する形態のもの。
- G1 半球状で、口縁部が素直に開くもの。
- G2 半球状で、口縁部が外反するもの。
- G3 半球状で、口縁部が直立するもの。
- G4 半球状で、口縁部が内湾するもの。
- G5 半球状で、口縁部が弱く内傾するもので、口縁部と体部の境が明瞭なもの。E4 と同質な焼成・胎土などを含む。
- H 丸みを帯びた平底から口縁部が直立するもの。
- I 平底から体部が内湾して立ち上がり、口縁部に至るもの。
- J 深い丸底の底部から、内湾気味に立ち上がった体部から、口縁部が緩やかに外反するもの。体部と口縁部の境に稜を有する。
- K 平底から口縁部が外傾して開くもの。



目 次

口絵 1・2

例言

凡例

目次



出土骨角器

第Ⅰ章 発掘調査の経緯 1

第1節 調査の経緯	1
1 発掘調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	2
第2節 遺跡周辺の環境	2
1 遺跡の地理的環境	2
2 遺跡の歴史的環境	3
第3節 調査の方法	4
第4節 試掘調査	6
第5節 基本層序	7
第6節 検出遺構・遺物の概要	7

第Ⅱ章 遺構と遺物 7

第1節 住居址	7
第2節 掘立柱建物址	88
第3節 土坑	89
第4節 溝址	94
第5節 その他の遺構・遺物	97

第Ⅲ章 まとめ 106

図版



出土骨角器

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 調査の経緯

1 発掘調査に至る経緯

円正坊遺跡は枇杷坂遺跡群の東南端部分に位置し、標高 700m を僅かに越える。調査地点は西・南方向に低湿地が広がる台地の頂端部にあたり、地山は浅間第一砾石流の堆積層である。過去において当遺跡内では7次に及ぶ面調査が実施され、何れの調査においても弥生～中世に係わる遺構・遺物が数多く検出されてきた。

今回、学校法人聖啓学園により佐久長嶺高校学生寮の建設が計画されたため、平成 21 年 4 月 28 日～5 月 8 日にかけて試掘調査を実施した結果、堅穴住居址を主体とする極めて遺構密度の高い遺跡であることが確認されたため、同年 5 月 11 日に保護協議を行い、設計変更による遺跡保存の検討と、概算の調査予算費を次回協議において提示することを確認した。5 月 15 日再度保護協議を行ったが、設計変更による遺跡保存は不可能であることがあることが聖啓学園から伝えられ、遺構が破壊される建物部分について、記録保存を目的とする発掘調査を 7 月末日を期限として実施することとなった。また、表土除去、測量基準杭の打設、現場仮設プレハブ・トイレ等の賃貸借は聖啓学園が直接行うこととなった。

2 調査体制

平成 21 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長 土屋 盛夫			
事務局	社会教育部長	工藤 秀康			
	文化財課長	森角 吉晴			
	文化財調査係長	三石 宗一			
	文化財調査係	林 幸彦 羽毛田卓也 上原 学	並木 節子 富沢 一明 井出 泰草	須藤 隆司 神津 格 (4月～10月) (10月～)	小林 真寿 出澤 力

平成 22 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教育長 土屋 盛夫			
事務局	社会教育部長	工藤 秀康			
	文化財課長	森角 吉晴			
	文化財調査係長	三石 宗一			
	文化財調査係	林 幸彦 羽毛田卓也 出澤 力	並木 節子 富沢 一明 上原 学	須藤 隆司 神津 格 井出 泰草	小林 真寿 小山 功 井出 泰草
調査体制	調査担当者	林 幸彦	佐々木宗昭	小林 真寿	甘利 隆雄
	調査員	赤羽根 駿 飯塚 一男 岡村千代美 木内 修一 澤井 知春 中澤 登 細萱ミスズ 百瀬 秋男 山村 容子 横尾 敏雄	赤羽根充江 磯貝 律子 柏木 義雄 小林喜久子 清水 澄生 中山 清美 堀籠 滋子 山口ひとみ 柳澤 孝子 柳沢千賀子 依田 三男	浅沼 勝男 市川 光吉 加藤 健一 小林 敏雄 人工原達江 花岡美津子 堀籠 保子 山田 敏正 柳沢千賀子 渡辺久美子	岩崎 重子 川原田三男 高橋 章 細井里江子 宮川真紀子 山田 英輝 油井 満芳 中嶋フクジ

3 調査の経緯

平成 21 年度

平成 21 年

- 4月 7日 学校法人聖啓学園より文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘の届出（第 93 条）
長野県教育委員会教育長に東信教育事務所経由で副申
4月 24日 長野県教育委員会教育長より通知（発掘調査を行う）
4月 28日 試掘調査開始
5月 8日 長野県教育委員会教育長に通知
5月 11日 第 1 回保護協議 文化財課 - (株) 第一設計
5月 15日 第 2 回保護協議 文化財課 - 聖啓学園
5月 26日 重機による表土除去等開始。
長野県教育委員会教育長に通知（試掘調査終了報告書）
6月 1日 調査員による発掘調査開始。
遺構の検出・掘り下げ・記録に着手。
長聖中学先生方現場見学。
6月 3日 測量基準杭の設定。
6月 24日 岩村田小学校生徒 1 名、社会科の学習のため現場見学（母親同伴）。
7月 3日 銅鏡出土する。
7月 14日 梅雨明け。
7月 22日 日射。
7月 31日 現場調査終了。機材を撤収する。
出土遺物・記録の整理を開始。
8月 3日
8月 6日 長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出する。
佐久警察署長に埋蔵物発見届を提出する。
10月 出土した銅鏡 4 点及び弥生時代の鉄器 5 点の保存処理を、指名競争入札により東都文化財研究所に委託する。（平成 22 年 3 月 19 日完了）

平成 22 年

- 3月 19日 本年度の調査を終了する。

平成 22 年度

平成 22 年

- 4月 26日～ 出土遺物、記録の整理、報告書の作成。

平成 23 年

- ～ 3 月 25 日 すべての調査・作業終了。報告書刊行。



第 1 図 長野県における佐久市の位置



調査風景

第 2 節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境

新生「佐久市」は平成 17 年 4 月 1 日、旧佐久市、白田町、浅科村、望月町が合併し誕生した。位置的には長野県の東部にあり、群馬県境を有する。日本で最も海から遠い地点が市内に存在する内陸の市であり、高燃冷涼で寒暖の差が大きい気候であり、年間降水量は 1,000 mm 前後と少なく、年間日照時間 2,000 時間前後の晴天率の高い地域である。

円正坊遺跡は枇杷坂遺跡群の東南端部分に位置し、標高 700m を僅かに越える。調査地点は西・南方向に低湿地が広がる浅間山の火碎流台地の頂端部にあたり、地質的には浅間火山の「軽石流二次堆積物」により形成されており、土壤的には、厚層腐植質黒ボク土壤である。また、植生は代償植生であり、市街地と緑の多い住宅地に分かれれる。

2 遺跡の歴史的環境

現在、円正坊遺跡で確認されている人間の活動の痕跡は、縄文時代早期に遡る。遺構は確認されていないが、押型文土器の破片が断片的に出土している。早期は約1万年～6千年前と考えられており、日本列島全体の気候も温暖化の時期を迎える、人々が本格的に定住生活を開始する時期と考えられている。佐久地方でも北部の浅間火山軽石流により堆積した台地が安定し、人々が狩猟や採集のため当遺跡を往来していたのであろうか？

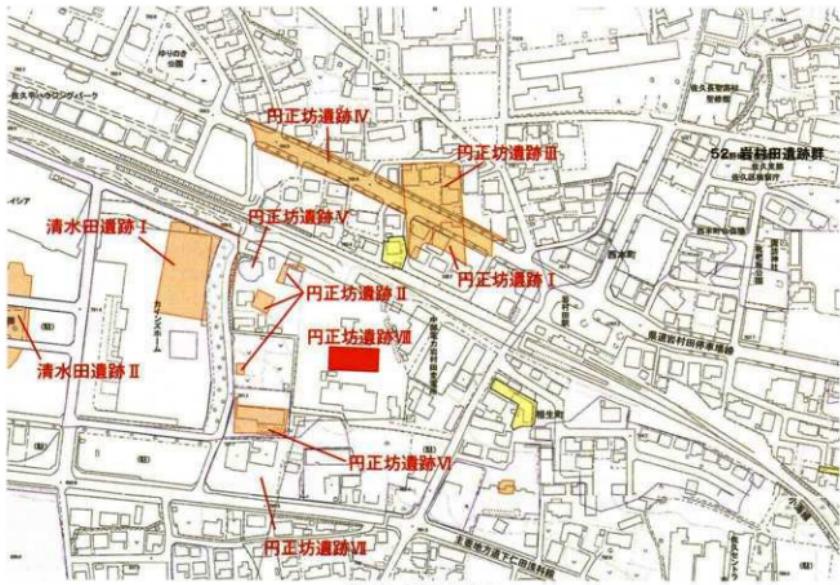
次に人間の活動の痕跡が認められるのは弥生時代中期後半で、集落が出現する最初の時期である。円正坊遺跡Ⅱ・Vにおいて竪穴住居址が検出されている。この後、後期に向かい集落規模は次第に大きくなり、後期後半にピークをむかえる。

古墳時代前期に一旦集落は姿を消すが、中期になると再び営まれるようになり、平安時代まで連続と続くようである。この地域は古代の大井郷の一部に該当するが、近年当遺跡西方に位置する小諸境の近津遺跡で複数発見されている「大井」の墨書きや刻書きが記された土器の存在から、古代「大井郷」の核地域は近津であろうと推測されるが、円正坊遺跡も遜色のない規模であり、古墳時代中期から後期にはむしろ凌いでいる。

平安時代（1178年）にはこの地域が八条院領「大井荘」であったことが知られている。その後鎌倉時代になると、甲斐源氏の加々美遠光が信濃守となり、その子小笠原長清の七男朝光が大井荘に土着し、大井氏を名乗るようになる。大井氏によりこの地域は発展し、四隣譚藪によれば戦国時代には「その厭わい国府にまさり」と例えられる隆盛を誇った。また、西園譚藪の廃大井郷之図の中に「園勝寺」と言う寺が画かれており、これが遺跡名の円正坊の由来とされている。実際、当遺跡の7次調査において、12世紀末～15世紀の陶磁器を伴う中世遺構群が検出されており、これらの遺構群が「園勝寺」あるいは「円正坊」である可能性が高い。



遺跡周辺の地形（昭和47年当時の航空写真（株）東洋航空事業撮影）



第2図 周辺遺跡分布図

第3節 調査の方法

遺跡名・調査区

佐久市詳細分布図の遺跡に照らし合わせ、円正坊遺跡とした。Ⅷは調査次数である。

調査区を網羅するように、 $4 \times 4\text{m}$ のグリッドを最小単位とし、国家座標に沿って $40 \times 40\text{m}$ の区画を設定した。この 40m の区画は北東隅を起点に西方向にア、イ、ウ、エ……南方向に1、2、3、4……とグリッド単位に記号をふり、各グリッドの北東隅をグリッド名とした。

遺跡略記号・遺構略記号

遺跡略記号はIEOⅧである。これは以下の決まりに従い付けられている。

- アルファベット3文字の先頭は旧大字のローマ字表記の頭文字である。 I = 岩村田
- アルファベット3文字の2番目は遺跡名のローマ字表記の頭文字である。 E = EN
- アルファベット3文字の3番目は遺跡名のローマ字表記の任意の文字である。 O = BO
- 末尾のローマ数字は発掘調査回数を表す。

遺構略記号は以下のとおりであり、佐久市共通である。

H = 住居址（堅穴住居である。現在のところ佐久市内では明確な平地住居は確認されていない。）

F = 挖立柱建物址

D = 土坑（陥穴、貯蔵穴等）

P = ピット（柱状のものを建てたと思われる、多くは小径の掘り込み）

M = 溝址（環濠、水路、道路、堀等）

O T = 周溝墓

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・炉・カマド等を適宜分剖し、上層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は4分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。

土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により上層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は半裁された区を東西南北の英語頭文字を区として取り上げた。

ピットも土坑と同様であるが、遺物はピットの遺構Noで一括した。

清掃・周辺は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。

遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

遺構測量

グリッド杭を用いた簡易造方測量でおこなった。

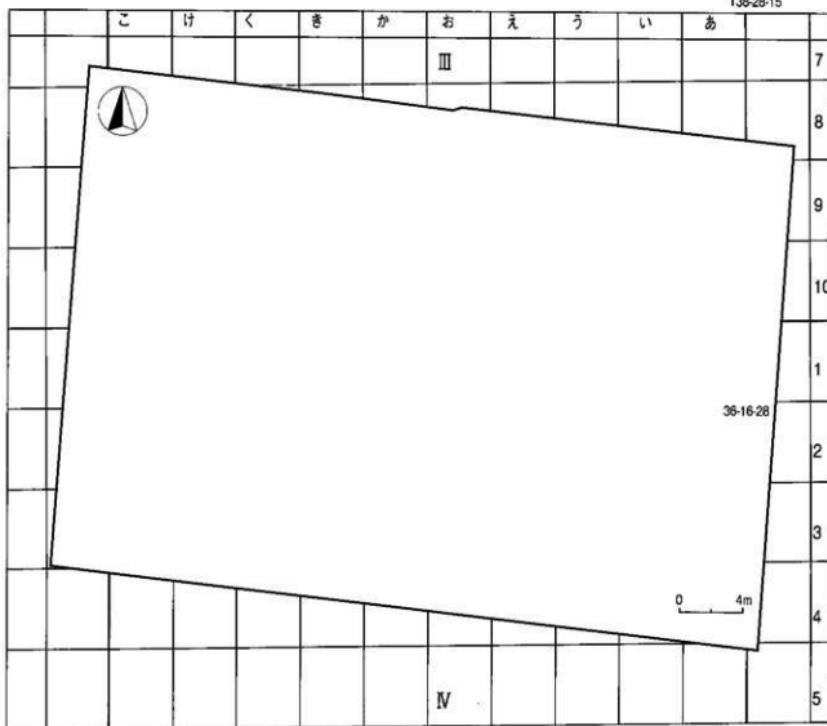
写真

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。

遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手で行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスター・カラーにより行い、薄めたラッ

138-28-15



第3図 グリッド配置図

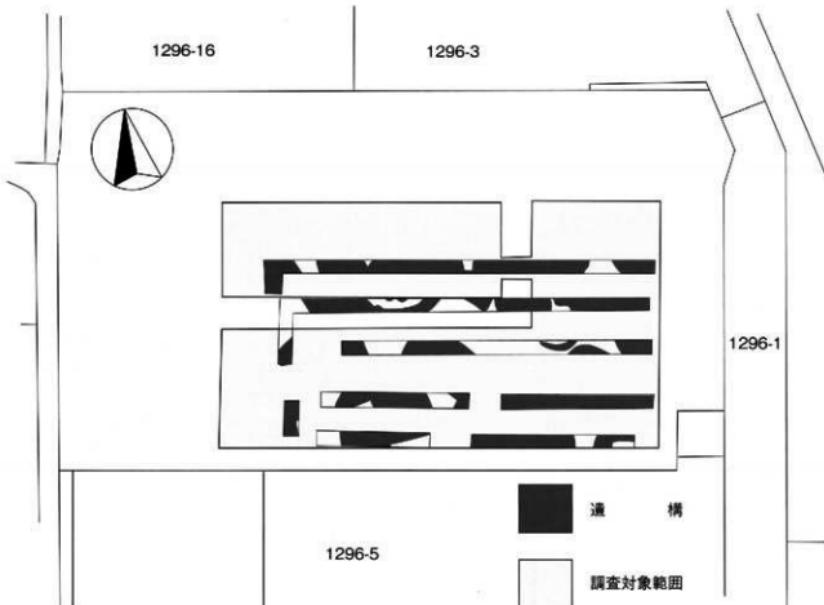
カーブの上から塗布した。遺物の接合にはセメダインCを用いた。遺物復元の際の充填材にはエポキシ系樹脂を用いた。出土金属のうち、弥生時代のものは指名競争入札により、(株)東都文化財保存研究所に委託し保存処理を行った。その他についてはパキュームシーラーにより、(株)三菱ガス化学社製エスカルフィルムに真空パックし、現状保存した。遺物実測、拓本は手取りで行った。最終的な遺物の保管に際しては、報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

報告書

表・文書はアドビ社製「イラストレーター」で作成した。また、遺構・遺物と共に図も「イラストレーター」により、デジタルトレスを行った。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正・加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により、ページ単位で縮集し、印刷原稿を作成し、イラストレーターのファイル形式で入稿した。日本語FEPはジャストシステム社製「ATOK」を用いた。

第4節 試掘調査

試掘調査は学校法人聖啓学園の依頼を受け、平成21年4月28日～5月8日にかけて実施した。調査対象面積2,582.37m²に対し、232m²をトレーナー調査した。そのトレーナー位置を第4図に示した。昭和鉄合金株式会社岩村田工場時代の擾乱が全面に認められるが、弥生時代後期と古墳時代後期の堅穴住居址が全体に展開しており、地形は南向きの斜面を呈していることが判明した。遺構検出はP1上面で行われ、検出面までの深度は70cm～160cmであったが、これは旧地表上に盛土を行い、南斜面地形を現在の平坦な地形に造成した結果である。なお、昭和鉄合金株式会社の操業時に排出された、溶鉱炉のガラス質のスラグは緑色を帯びるものと黒曜石に近似している。人頭大に及ぶ大きさのものもかっては散乱していたようである。これを長年にわたり多くの子供達が採取しており、佐久地方の遺跡に投棄されたものも皆無とは言えない。本物の黒曜石と間違わないように注意が必要である。



第4回試掘調査状況図

第5節 基本層序

基本層序は第5図のとおりである。遺構検出は第V層上面で行ったが、断面では第IV層上面で可能である。しかし、第IV層は黒褐色を呈しており、遺構覆土の色調と近似しているため、平面では識別が困難である。第III層は旧地表を構成していた畑の耕作土であり、これにより、第IV層が削平されている可能性も高い。第II層は工場時代の盛土、第I層は現状駐車場化に際しての碎石による盛土である。

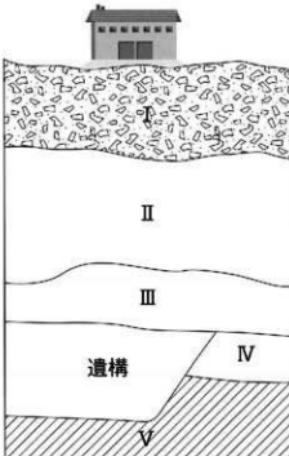
I - 碎石

II - 盛土

III - 灰黄褐色土層（旧畑耕作土）(10YR5/2)

IV - 黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR7/4 ローム少含。

V - にぶい黄橙色土層 (10YR7/4)。浅間火山第1軽石流の堆積



第5図 基本層序模式図

第6節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。

- 遺構 穴立柱居址 - 41棟、掘立柱建物址 - 2棟、土坑 - 11基、溝址 - 3条、円形周溝墓 - 1、ビット - 66基
- 遺物 繩文土器（早期押型文）、弥生土器（中・後期）、土師器（古中～平安）、須恵器（古～平）、灰釉陶器、石器、石製品、土製品、金属器、金属製品（銅・鉄）、玉類、獸骨、貝殻

第II章 遺構と遺物

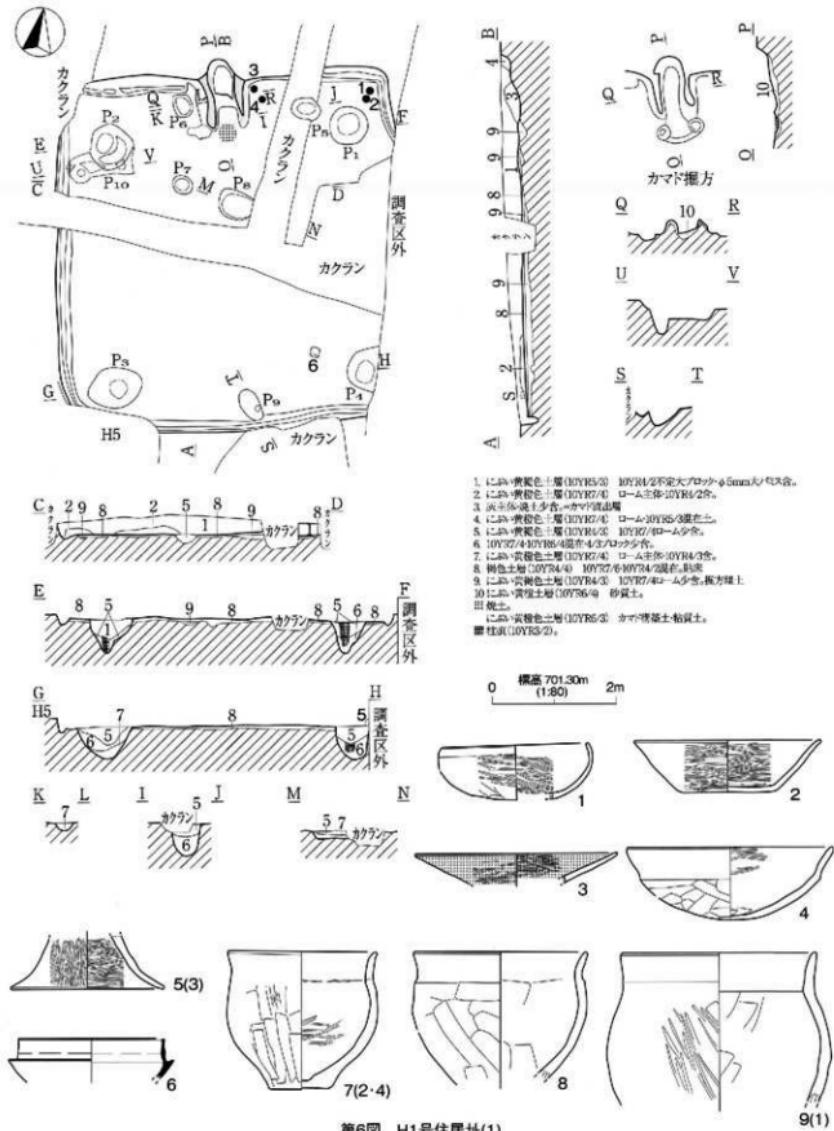
第1節 住居址

○H1号住居址

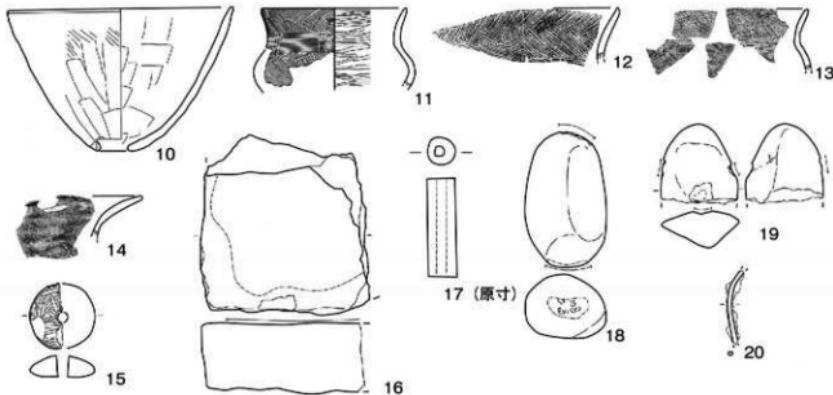
Ⅲあ 10 グリッドで検出された。H 5・H15・D 8を切り、擾乱による破壊を受けている。調査区外に延びるため、東南隅部分が未調査である。N-11°Wに長軸方位をとる。長軸長 - 8.76m × 単軸長 - 5.52m、深度 0.3m の規模である。P1 ~ P4 の4基が主柱穴であり、柱間 - 4.4m で均等に配置される。柱はφ16 cm の規模である。壁下には周溝が巡り、カマドは北壁の中央部分に構築されている。袖部分は池山削り出しであり、先端部分に石を立て、天井石を架けた跡、粘土で被覆している。カマドと対応する南壁下には出入口施設の基礎と思われるP9が存在する。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、土製品、石器、鐵器が出土している。須恵器は壺が1点認められるだけであり、破片があるが、中村編年の陶器Ⅱ形式2～3段階に比定できそうな資料である。土師器は壺、鉢、高壺、甕、瓶の器種が認められる。壺は「西一本柳Ⅲ・Ⅳ」の分類にしたがえば、D2やF4形態であり、鉢はE2形態である。高壺は壺の口縁部の可能性も強い。甕はいずれも器壁が厚く、頸部のくびれは弱い。胎土は砂粒が多量に含まれている。瓶は単孔である。弥生土器は甕と壺の破片が出土している。甕は横位の櫛搔斜走文と簾状文が施され、壺は赤彩されている。全て混入である。土製品は紡錘車が出土している。ほぼ1/2が残存しており、全面にヘラミガキが施されている。弥生時代の物であろうか？石器には砥石、磨・敲石、敲石が認められる。石製品として、黒色を呈する管玉が1点出土している。鉄器は紡錘車の軸と思われる物が1点出土している。

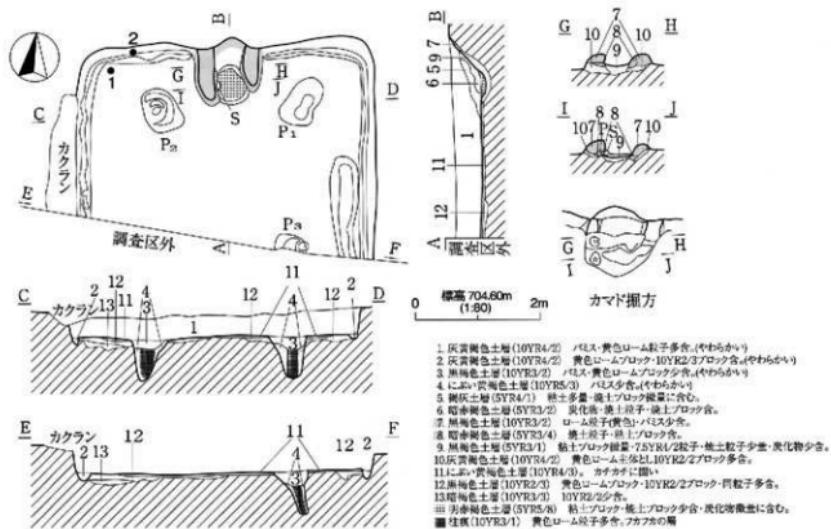
以上の出土遺物の特徴から、本址の年代は聖原遺跡の時期区分 - 古墳時代Ⅱ期に該当し、6世紀中葉と考えられる。



第6図 H1号住居址(1)



第7図 H1号住居址(2)

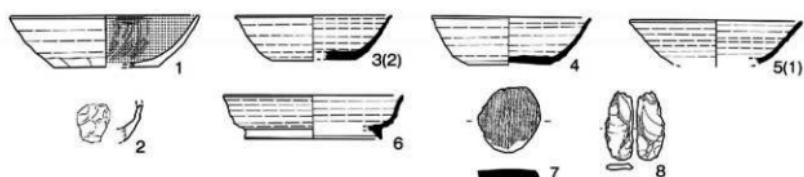


第8図 H2号住居址(1)

○H2号住居址

IV < 4グリットで検出された。III8号住居址を切る。南方向に調査区外に延びるため、東南・西南両隅を含む30%ほどが未調査である。N-11°-Wに長軸方位をとる。長軸長は不明、単軸長-4.94m、深度-0.45m、柱間は南北が

2.3m、東西が2.4mにはほぼ均等配置されるようである。柱はφ20cm前後の規模であった。壁下には周溝が巡り、北壁のほぼ中央部分に粘土でカマドが構築されていた。



第9図 H2号住居址(2)

遺物は、土器器、須恵器、土製品、石材が出土している。土器器は壺と手捏が認められる。壺は内面にヘラミガキ後黒色処理が施される。外底処理はヘラケグリである。手捏は体部片であり、全容は不明である。須恵器は壺と有台壺が出土している。壺の外底には回転糸切痕が残る。壺も有台壺も火棒が顕著である。土製品は須恵器の甕片を再利用した土器片円盤である。石材は石製模造品の素材である。

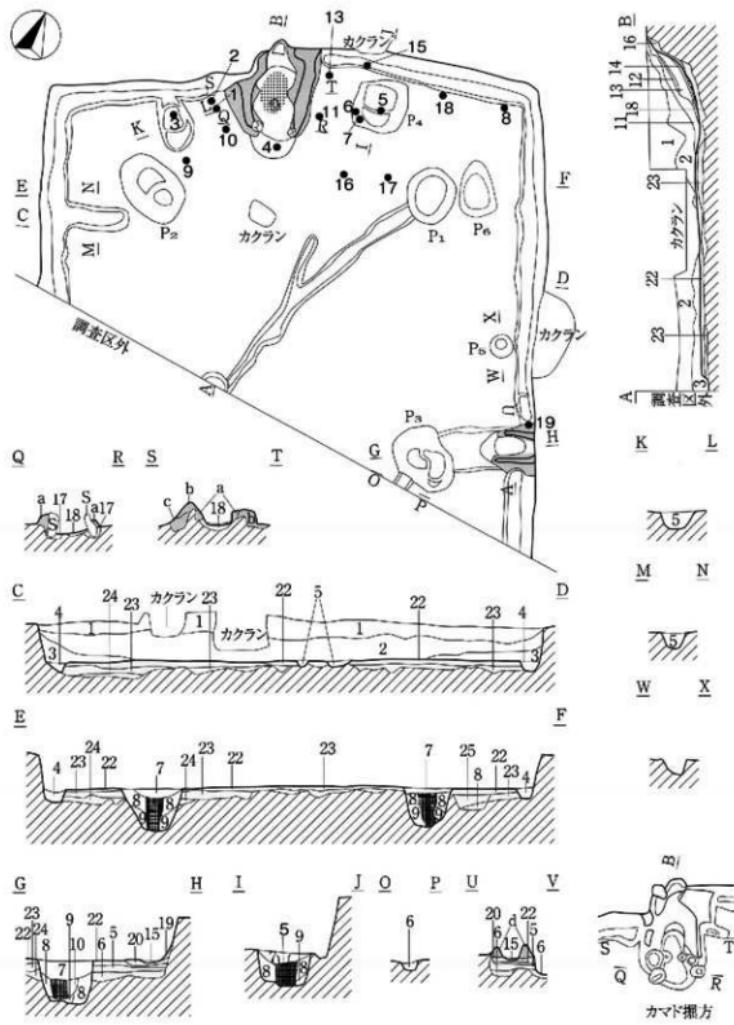
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分奈良・平安時代Ⅳ期に該当し、8世紀後半～9世紀初頭の実年代が想定される。

○H3号住居址

Ⅳお4グリットで検出された。H20・H26・H28号住居址を切る。N-22°-Wに長軸方位をとる。南方向に調査区外に延びるため、長軸長は不明であるが、短軸長-8.3m、壁残高-0.75mの大規模と言つてよい住居址である。3基が確認されただけであるが、主柱は4基が均等に位置されていたものと思われ、P2・P3には壁下を巡る周溝から延びた所謂「間仕切溝」が認められた。北壁中央に構築された石組粘土カマドの両脇にも柱穴が構築されており、外見は壁が立ち上がっていた可能性もある。主柱の規模はφ28～30cmであった。尚、前述した北壁中央のカマドの他に、東壁にもカマドが1基構築されていた。このカマドが廢絶時に使用されていたか否かは判然としない。まだ、床面を西南隅から東北隅に対角線上に延びる溝の性格も不明であるが、調査時においては遺構の一部であると解釈した。

遺物は土器器、須恵器、弥生土器、繩文土器、土製品、石器・石製品が出土している。土器器は壺、高壺、手捏土器、鉢、甕が認められる。壺は西一本柳Ⅲ・Ⅳの分類に準拠すればG1・2・3・D2・E3（所謂「有段口縁壺」）の形態が認められる。G形態である1、2は片口であり、1は赤彩の可能性が高い。2の内面の断面については、正直なところ断定はできないが、複数人から暗文のように見えるという見解を得たので図示した。また、E3形態に認められる黒色処理はD2形態のものとは異なり、ヘラミガキ調整を施さずに行っているため、光沢を持たないし、均一ではない。高壺は口縁部を欠損するが、壺部はD2形態と思われる。手捏土器は大振りで、現代の箆麦猪口やぐい呑みのような形態である。13は底部に木葉痕が認められる。鉢はF4形態の壺を大型にした19のようなものと、無頸の18が認められる。甕は大半が長胴であるが、20のような胴張のものも存在する。調整は外側ヘラケグリ、内面ヘラナデが基本であるが、刷毛目が混在するものも認められる。23・29は底部に木葉痕が認められる。甕は単孔のものと、多孔のものが認められるが、形態は何れも無頸で、取っ手は有さないものであり、37は壺G1を39は壺G2を大型化したものであり、法量的には中型である。須恵器は壺、壺蓋、高壺、甕が認められる。壺と高壺の外面底部には「ヘラ記号」と思われる刻線が認められる。甕は口縁部及び頭部・体部中央に横描波状文が施される。孔は、単孔で、注口は持たない。弥生土器は鉢、蓋、甕、瓶が認められる。鉢は赤彩で口縁部に小孔が2ヶ穿たれている。蓋も天井部中央に小孔が1ヶ穿たれている。甕は口縁部に横描の斜位の条線が施されるもので、片口になるらしい。甕は単孔である。土製品は弥生土器の甕片を再利用した土器片円盤である。繩文土器は早期の楕円押型文が施される深鉢片が4点出土している。51については遺物であるのか否かの断定ができなかった。石器・石製品は砾石、磨石、敲石、編物石等が出土した。57は単孔が認められるが、自然なのか人为的なものかの判断が難しい。全体に磨痕が認められる。

以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期に該当し、6世紀中葉～7世紀初頭の実年代が想定される。

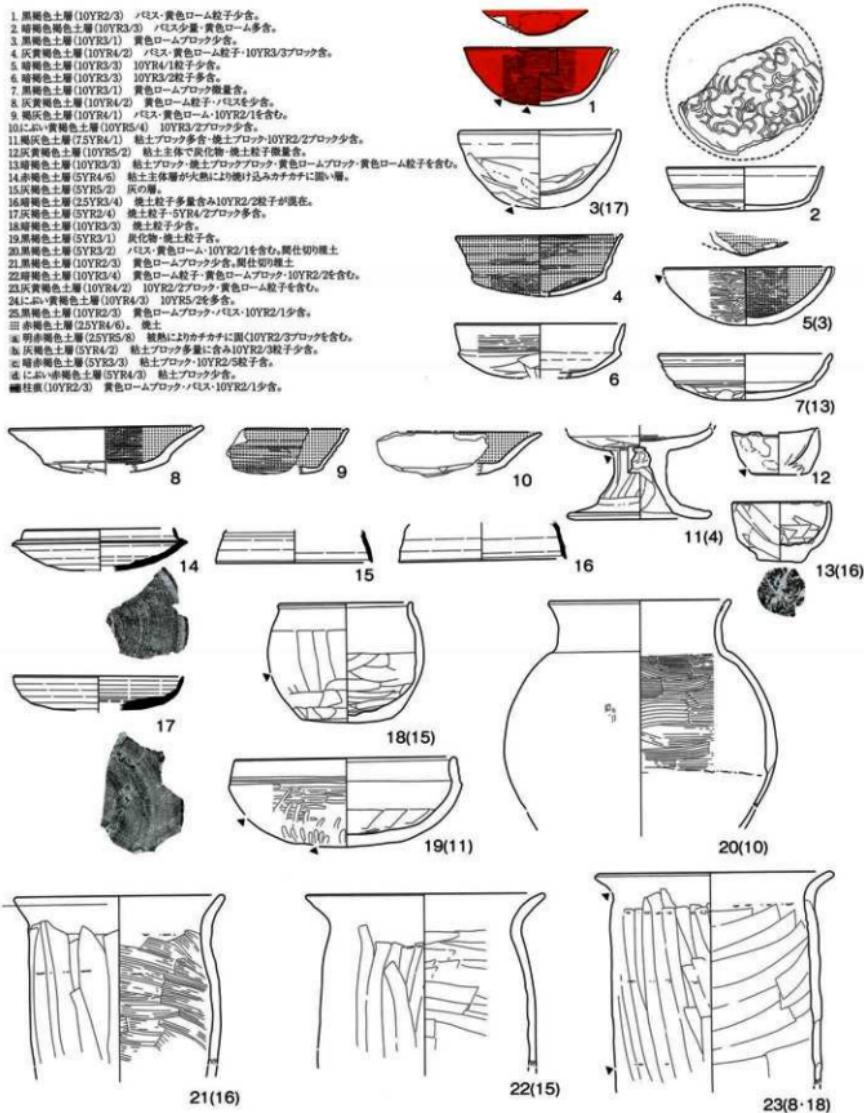


H3号住居址(1)

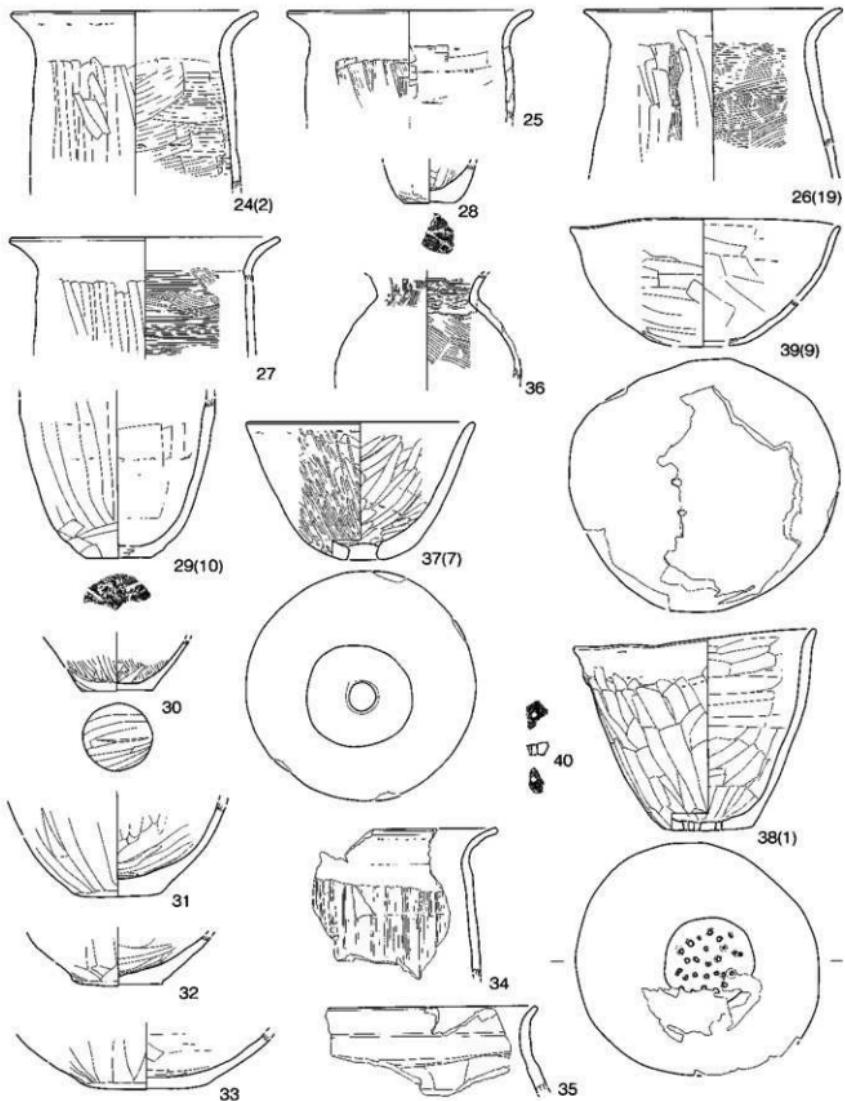
標高 704.70m
(1:80)
2m

第10図 H3号住居址(1)

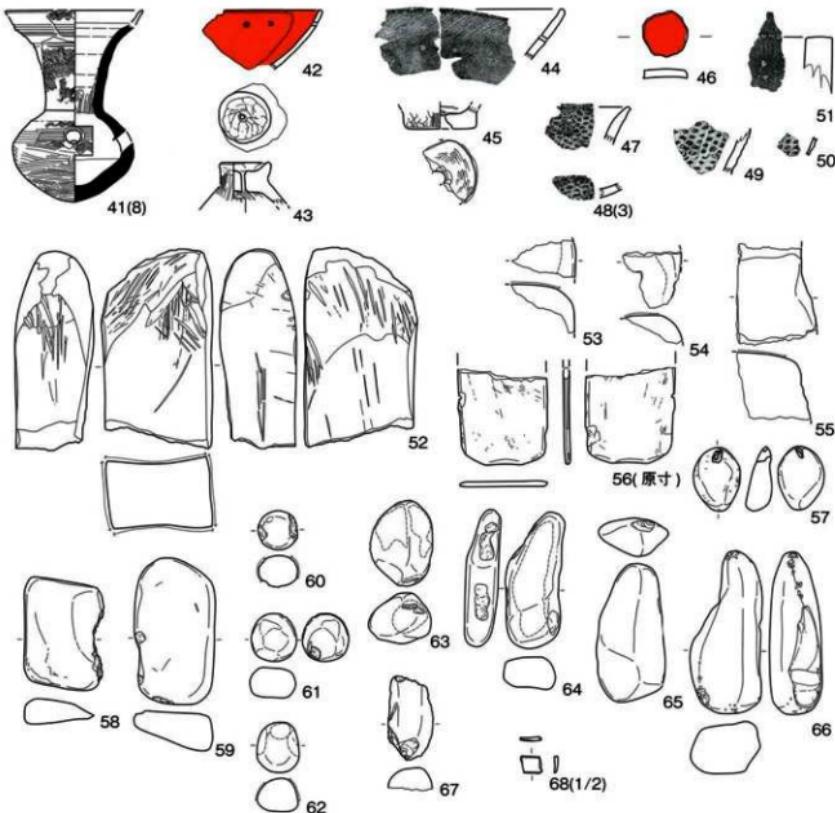
1. 黒褐色土層 (10YR2/3) ノズス・黃色ローム粒子少含。
 2. 黄褐色土層 (10YR2/3) ノズス・黒色ローム多含。
 3. 黑褐色土層 (10YR3/1) 黄色ロームブロック少含。
 4. 黄褐色土層 (10YR4/2) ノズス・黄色ローム粒子-10YR3/3ブロック含。
 5. 黄褐色土層 (10YR3/2) 10YR4/1粒子少含。
 6. 黄褐色土層 (10YR3/3) 10YR3/2粒子多含。
 7. 黑褐色土層 (10YR3/1) 黄色ロームブロック微含。
 8. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム粒子-10YR2/1少含。
 9. 黄褐色土層 (10YR4/2) ノズス・黒色ローム-10YR2/1を含む。
 10. 黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/1少含。
 11. 黄褐色土層 (25YR4/1) 粘土塊多含・焼土ブロック-10YR2/2ブロック少含。
 12. 黄褐色土層 (10YR5/2) 粘土塊多含・焼土・粘土粒子微含。
 13. 黄褐色土層 (10YR3/3) 粘土ブロック・焼土ブロック・黄色ロームブロック・黄色ローム粒子を含む。
 14. 赤褐色土層 (5YR4/5) 粘土主体層が火熱により赤み込みカナナheimに變る。
 15. 黄褐色土層 (5YR5/2) 灰の土体層。
 16. 黄褐色土層 (25YR3/4) 粘土粒子多量含み10YR2/2粒子が混在。
 17. 黄褐色土層 (5YR2/4) 粘土塊多含・5YR4/2ブロック多含。
 18. 黄褐色土層 (10YR3/3) 粘土粒子少含。
 19. 黄褐色土層 (10YR3/3) 粘土粒子少含。
 20. 黄褐色土層 (5YR2/2) ノズス・黄色ローム・10YR2/1を含む・開土切刃端土。
 21. 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄色ロームブロック少含・開土切刃端土。
 22. 黄褐色土層 (10YR3/4) 黄色ローム粒子-黄色ロームブロック・10YR2/2を含む。
 23. 黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/2ブロック・黄色ローム粒子を含む。
 24. 黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/2多含。
 25. 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄色ロームブロック・ノズス・10YR2/1少含。
 三. 赤褐色土層 (25YR4/6) 灰土。
 四. 明赤褐色土層 (25YR5/8) 破片に赤みを含む10YR2/3ブロックを含む。
 五. 黄褐色土層 (5YR4/5) 粘土ブロック多量・含み10YR2/3粒子少含。
 六. 黄褐色土層 (5YR2/3) 粘土ブロック・10YR2/2粒子含。
 七. 黄褐色土層 (5YR4/3) 粘土ブロック少含。
 八. 柱根 (10YR2/3) 黄色ロームブロック・ノズス・10YR2/1少含。



第11図 H3号住居址(2)



第12図 H3号住居址 (3)

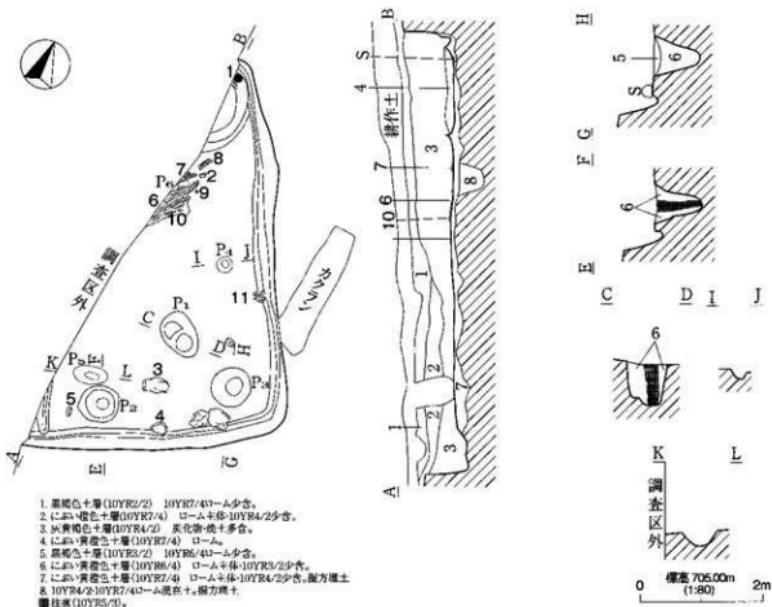


第13図 H3号住居址(4)

○H4号住居址

IVあ1グリットで検出された。H36号住居址を切る。長軸方位、長軸長、短軸長は不明である。壁残高は0.70mを測る。東北隅に検出された落ち込みは、貯蔵穴の縁辺と思われる。また、床面で3基、堀方から2基検出されたピット内の、P1は主柱と考えられ、約20cm大の柱痕が確認された。西方向へ調査区外に延びるため全容は不明であるが、調査部分の壁下には周溝が巡り、所謂「間仕切溝」も確認された。カマド・炉等は調査範囲には存在しない。覆土の3層中には炭化物や焼土が多含まれており、床面上に及んでいたことから、本址は焼失住居と捉えられ、3層は人為埋土である。

遺物は土師器、石器・石製品が出土している。土師器には壺(1~10)、高壺(11)、鉢(12)、甕(13~15)、壺(16~17)の器種が認められる。壺はG4(1~6)、G3(10)、A1(7~8)、D2(9)の形態が認められる。内面の放射暗文状のヘラミガキが顕著である。高壺は脚部が1点出土している。鉢は丸底で、口縁部が短く、直立気味に弱く開くもので、外面にはヘラミガキ調整が施される。甕は最大径を脚部下半に有するもので、「く」字状に口縁部が開く。壺はヘラミガキ調整が顕著で、胴張の器形のものである。石器・石製品は砥石(18)、砥石・敲石(19)、台石(20~21)、白玉(22~23)、



第14図 H4号住居址(1)

織物石(24)、唐・敲石(25)、磨石(26)、敲石(27~29)が認められる。

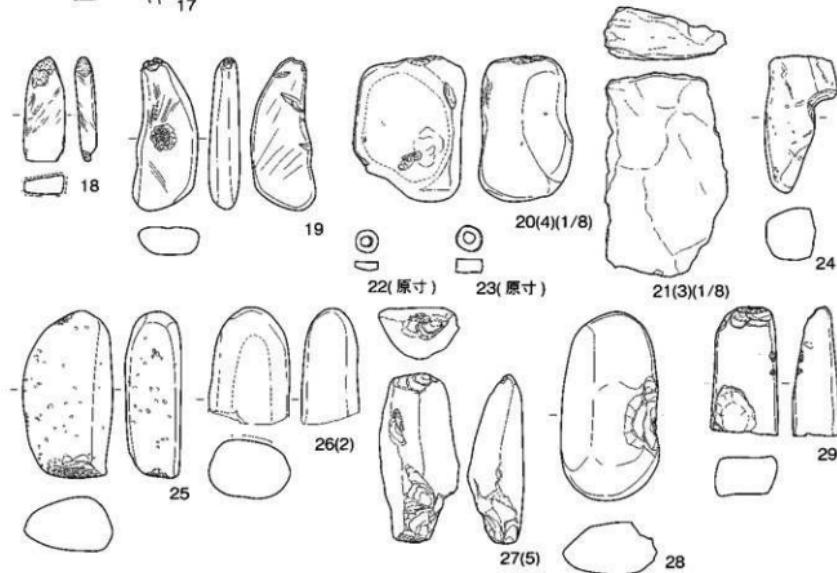
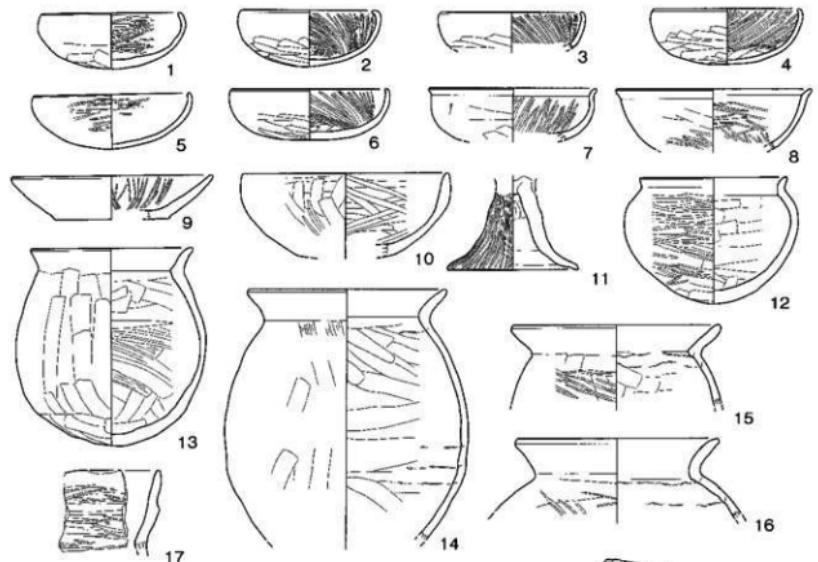
以上の出土遺物から本址の年代は聖原遺跡の時期区分の占墳時代I期~5世紀後半~6世紀初頭が想定される。

○H5号住居址

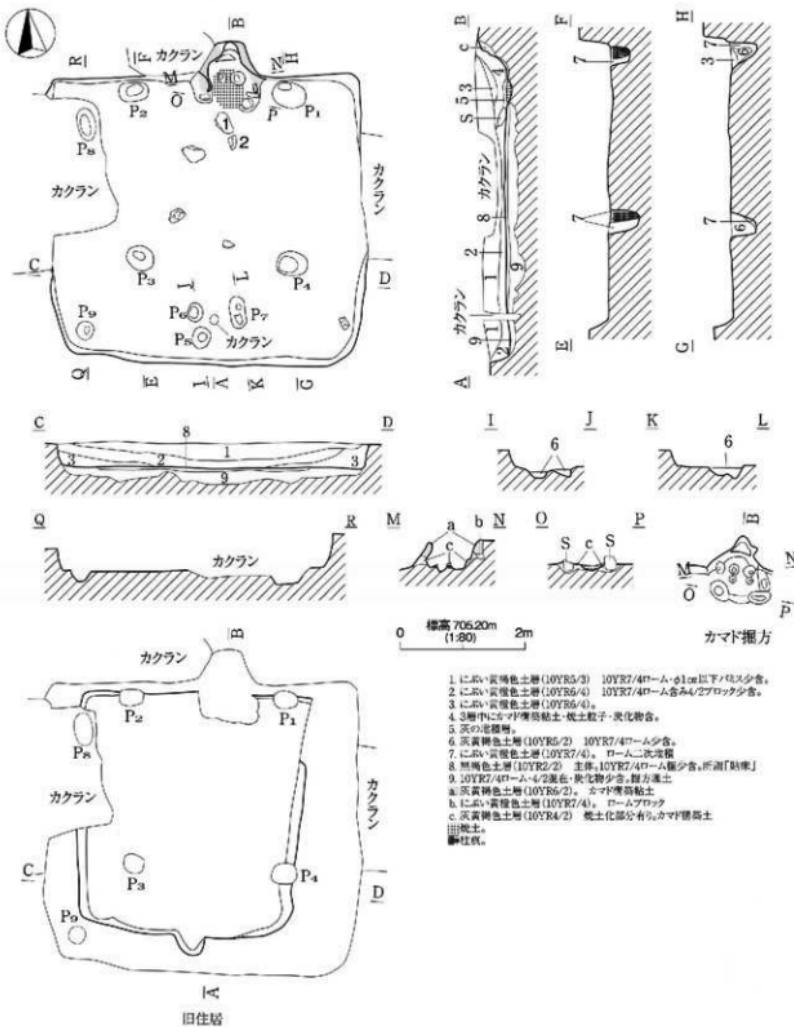
III-1グリッドで検出された。H1に切られ、H16・H17・D8・M3を切る。N-104°-Wに長軸方位をとる。長軸長-5.10m、短軸長-4.70m、壁残高-0.45m、面積-16.7 m²の規模である。主柱穴は北壁寄りに4基が均等配置され、柱の規模は柱痕から約16 cmであることが確認された。主柱穴以外に南壁下中央に検出された3基のピットは、出入口施設と思われる。その他に堀方から、2基のピットが検出されたが、性格は不明である。尚、本址堀方からは本址の旧住居が検出された、これにより、本址はカマドと半柱位置はそのままに、東西南の3方向に拡張されたことが明らかとなった。カマドは所謂「石組粘土カマド」であった。

遺物は須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器、石器が出土している。須恵器には壺、壺蓋、甕、壺が認められる。壺のロク口からの切り離し方法は5がヘラの他は回転系切りである。内外面共に火薙が顕著である。壺蓋はつまみを欠損しており形状は不明であるが、立ち上がり切は比較的短く、断面は三角である。19は長頭壺の把手と思われる。20、21は広口短頸の甕と思われる。いずれも外面に叩目、内面には当具痕が認められる。土師器には甕が認められる。全て武藏甕であり、口縁部は「コ」字あるいは「コ」字気味である。弥生土器には高壺、鉢、甕、壺が認められる。全てが混入品であり、本址に伴う物ではない。23の特徴的な高壺の脚は北西ノ久保遺跡Y-59号住居址に類似がある。搬入品であろうか?壺は頭部に横位矢羽根状の飾模、あるいはヘラ描の斜位沈線を施しておらず、外側は赤彩される。縄文土器は早期の山形押型文土器片が1点出土している。石器は砥石(31・32)や磨石(33・34)、敲石(35・36)が出土している。

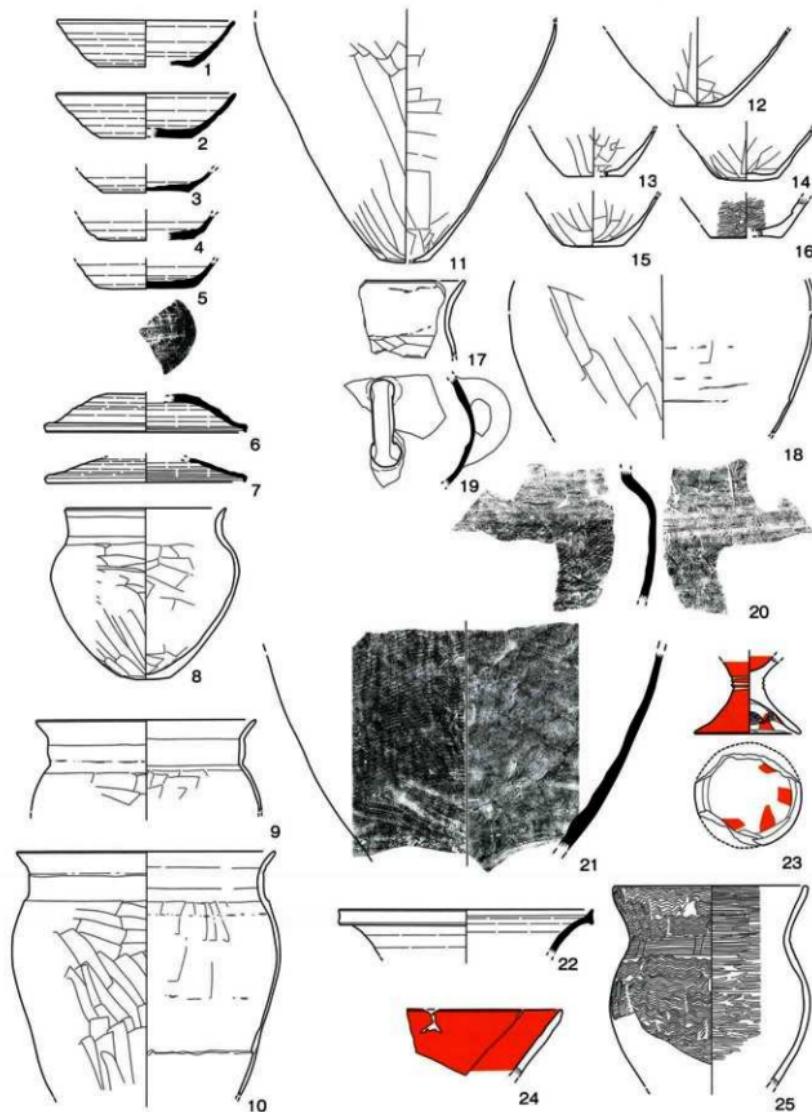
以上の出土遺物から本址の時期は聖原遺跡の時期区分の奈良・平安時代Ⅳ期~8世紀第4四半期が想定される。



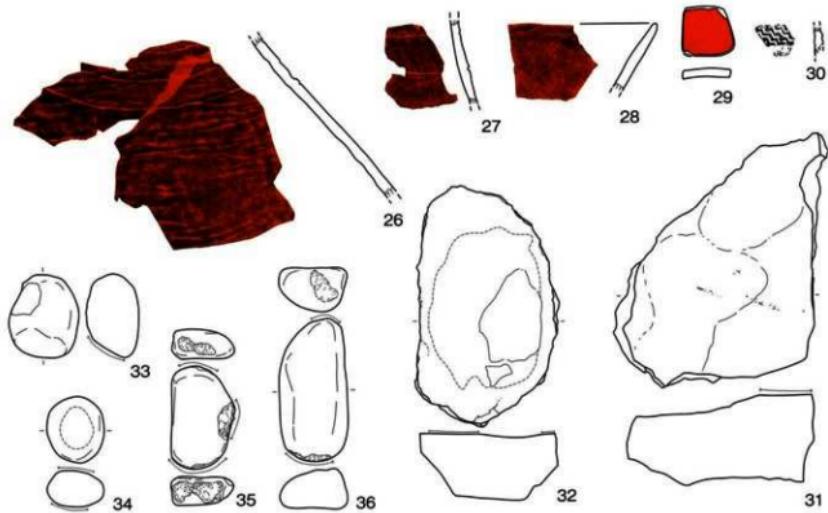
第15図 H4号住居址(2)



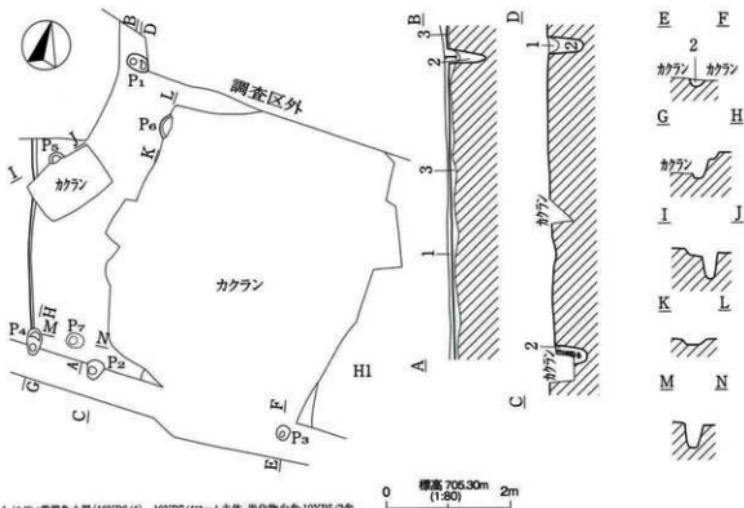
第16図 H5号住居址(1)



第 17 図 H5 号住居址 (2)

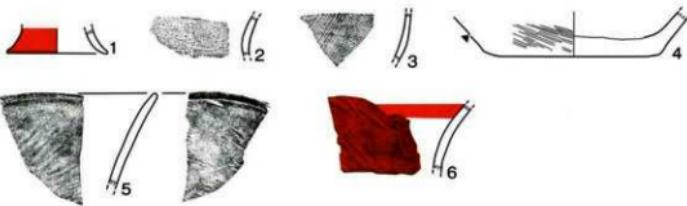


第18図 H5号住居址(3)



1. にじいろ黄褐色土層 (10YR6/4) 10YR7/413-ム主体。炭化物少含10YR5/3含。
 2. にじいろ黄褐色土層 (10YR6/3) 10YR7/413-ム主体。10YR4/2含。
 3. にじいろ黄褐色土層 (10YR7/4) 10YR4/2φ1cm大ブロック少含。幅方無土
 ム 柱痕 (10YR4/2)。

第19図 H6号住居址(1)



第20図 H6号住居址(2)

○H6号住居址

Ⅲい9グリットで検出された。H14を切り、擾乱に切られる。擾乱による破壊が著しく、西壁の一部と床面がかろうじて残存していた。そのため、規模は壁残高が0.05mである他は不明である。ピットは床面で6基、堀方から1基の計7基が検出されたが主柱穴は判然としない。P2で確認された柱痕はφ12cm大であった。

遺物は弥生土器が出土している。高坏(1)、甕(2・3)、壺(4～6)の器種が認められる。高坏は外面が赤彩される脚部、甕は2が頭部・櫛描縦状文、口縁部・櫛描波状文が施されるもの、3は体部に櫛描斜走文を縱羽状に展開している。壺は4が底部片、5の口縁部片は無紋で、内面に赤彩が施される。6は頭部片で外面と内面の上部に赤彩が施される。外縁頭部に櫛描横位条線が巡っている。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期後半箱清水期の住居址と考えられる。

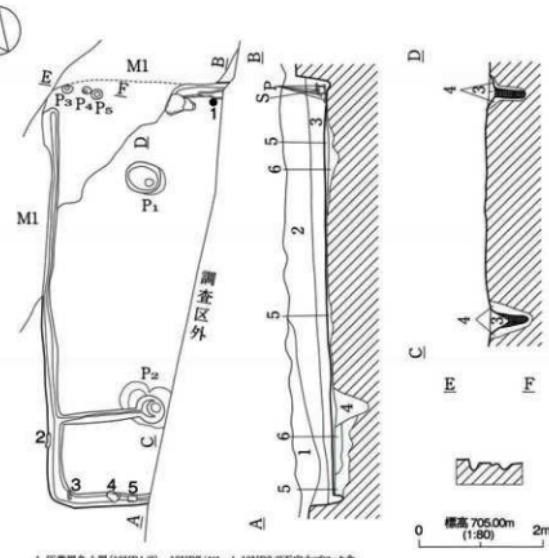
○H7号住居址

Ⅲあ3グリットで検出された。

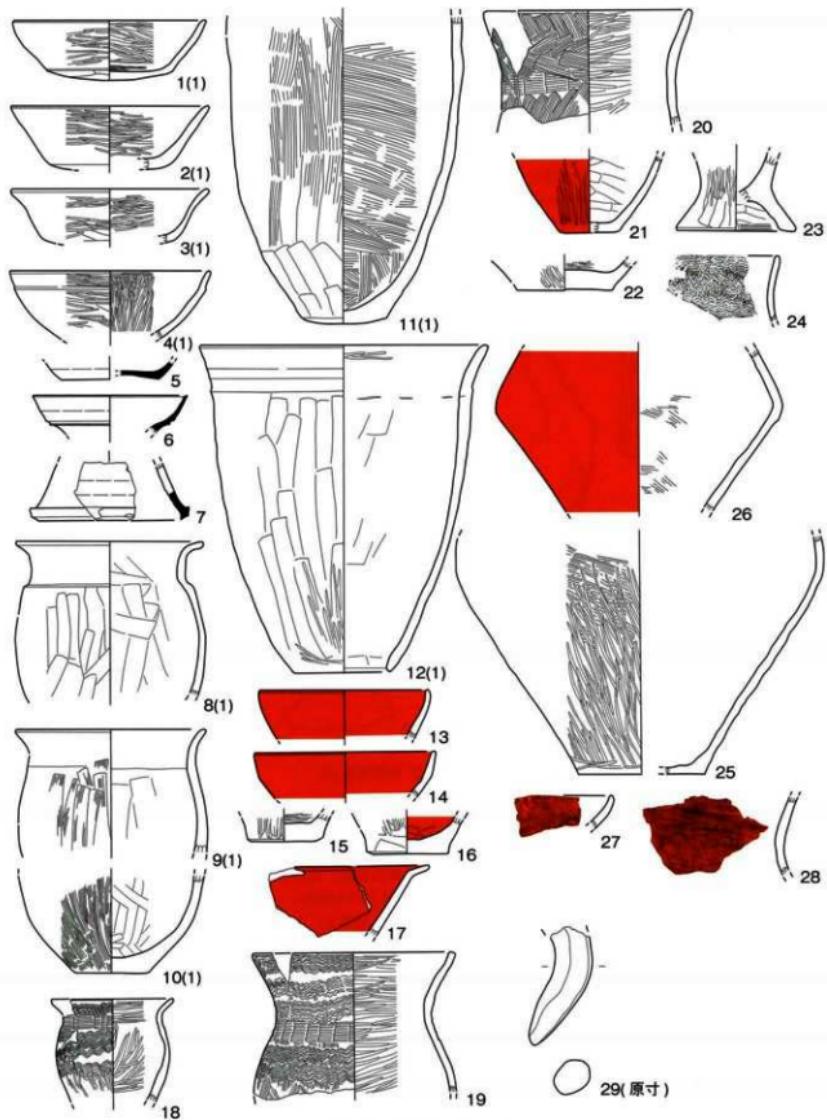
M1に切られ、H10を切る。N-5°-Wに長軸方位をとり、長軸長-6.88m、壁残高-0.50mの規模を有する。短軸長は東方向に調査区外に延びるため不明である。北壁の調査区外との境にはカマド構築材と思われる石や粘土が認められたため、本址は北壁中央に石組粘土カマドを有するものと推測される。壁下には周溝が巡り、主柱穴が2基検出された。この内P2には周溝から延びる所謂「間仕切溝」が連結されていた。主柱の規模はφ12～14cmである。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器が出土している。土師器には坏、甕、壺が認められる。坏はすべて非クロコ成形であり、内面にヘラミガキが施され、外底のみヘラケズリが施される。

3・4は内面に黒色処理が施される。甕は外面にナデ気味のヘラケズリが施されるものと、ハケ目が施されるもののが存在するが、同一



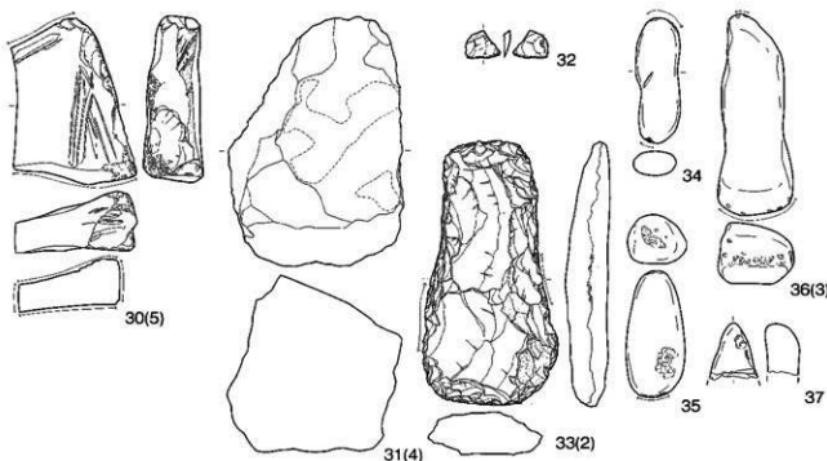
第21図 H7号住居址(1)



第22図 H7号住居址(2)

工具の端部の使い分けや、器面に対する角度の差違により生じた違いの可能性も強い。胎土は砂粒を多含したザラついた雰囲気のもので、肉眼による観察では違はない。瓶は大型のもので、底部全体が開放したものである。外面はヘラケズリ後部分的にヘラミガキ調整が施され、内面はナデ調整である。須恵器には壺、高壺、甕が存在する。壺のロク口からの切り離し方法はヘラである。混入品の可能性が高い。甕は口縁部片である。高壺は脚片で透かしが施されるが、形状は不明である。弥生土器には鉢、高壺、甕、合付甕、壺が認められる。すべて混入品であり、本来は重複する H10 号住居址に帰属するものであろう。鉢、高壺、甕は赤彩が施される。高壺の口縁部は水平近く外反する。甕は腰で屈折するが、底部からの外反は認められない。また、屈折位置も比較的高めである。壺の口縁部には横状工具による斜位条線(27)が、頸部には同じく横状工具による格子状条線(28)が認められる。甕は頸部に纏状文が施され、口縁部と体部に波状文が施されるものと、波状文の代わりに斜走文が施されるものが認められる。土製品は勾玉片が 1 点出土している。石器は砥石、スクレイパー、打製石斧、織物石、敲石が出土している。

以上の出土遺物から本址は、翌原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期～6世紀中葉～7世紀初頭の時期が比定される。



第23図 H7号住居址(3)

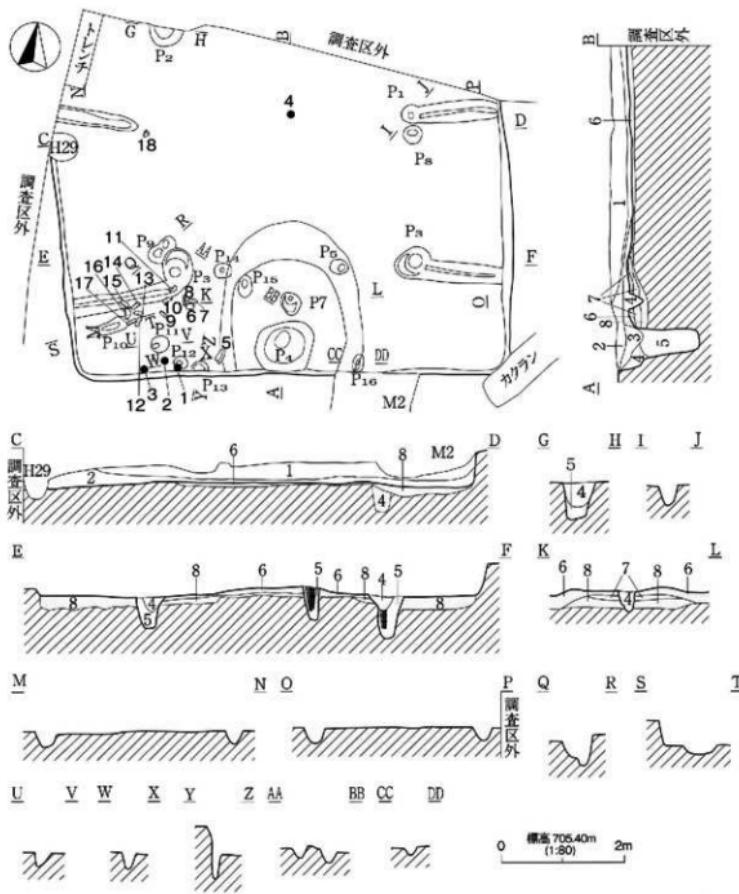
○H8号住居址

Ⅲc 8グリットで検出された。M2 に切られ、H40・H41 を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。縦軸長 - 7.40m、壁残高 - 0.55m である。P1 ~ P3 の 3 基のビットは主柱穴であり、本来は 4 本の主柱が均等位置に配置されているものと推測される。周溝は有さないが、所謂「間仕切溝」は認められた。南壁中央下に認められたビットは周囲が床面よりも高い「堤」状の土盛りに埋まれている。床面上では判然としなかったが、小径の 4 基のビットが「堤」の外縁に均等配置されていることが、場方により明らかとなった。当地方によく認められる張出部に構築される「貯蔵穴」が内部に取り込まれた形態と思われる。調査範囲にはカマド・炉等は存在しなかった。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器には壺(1~11)、高壺(12~13)、甕(16~17)、甕(15)の器種が認められる。壺は G4-A1 形態であり、暗文状のヘラミガキが顯著である。高壺は脚部片である。甕は口縁部で、「く」字に強く外反する。甕は 2 点出土しているが、いずれも単孔である。須恵器は底部に回転糸切痕を残す壺が 1 点出土している。弥生土器には鉢(18)、甕(19~21)、壺(22~23)の器種が認められる。鉢は無頭甕としても良いかもしれない。甕は頸部の横描巻状文は 3 点に共通するが、口縁部と体部の文様は 19~21 が横描波状文であるのに対して、20 は横位羽状の「櫛描」斜走文である。甕は 22 が折り返した口唇部に横描斜走文が施され、23 は頸部に横位羽状の横描斜走文が多段に施されている。土製品は 24 の弥生土器の壺頸部片を再利用した土器片円盤

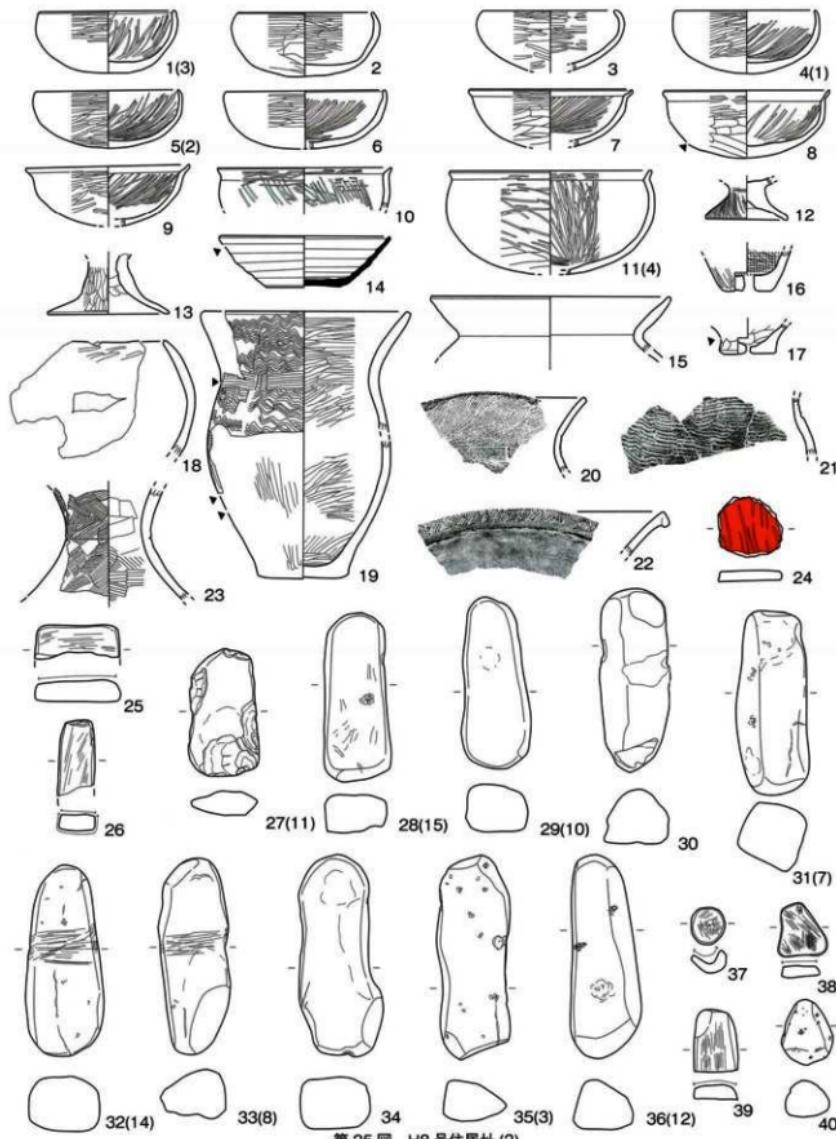
が1点出土している。石器・石製品は縞物石(27~36)、砥石(25・26)、磨石(37~45)、磨・敲石(46~48)、敲石(49)が出土している。

以上の出土遺物から本址は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅰ期~5世紀後半~6世紀初頭の時期が比定される。

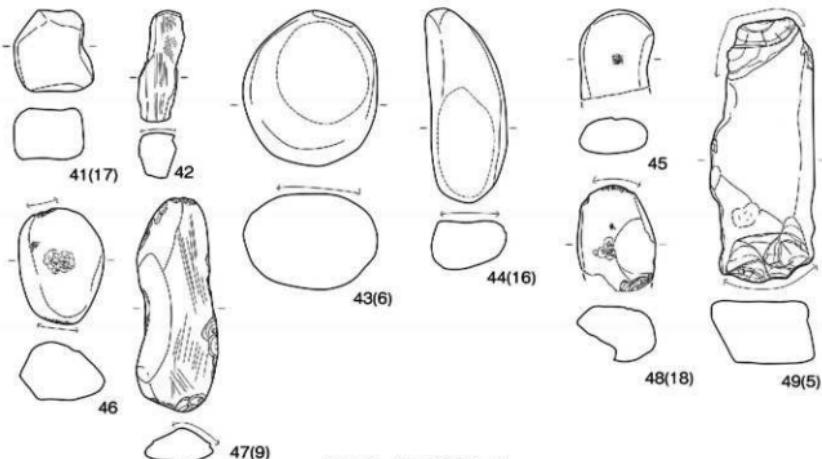


1. 10YR5/2-7/42-1-ム T/60-ム-2/20在土層-人為堆土。
 2. にひい黄褐色土層(10YR5/2) 10YR7/40-ム多含。下層は灰の重積層-人為堆土。
 3. 黄褐色土層(10YR2/2) 灰化跡多含。
 4. にひい黄褐色土層(10YR6/4) 10YR7/40-ム多含。
 5. 黄褐色土層(10YR4/2) 10YR7/40-ム少含。
 6. にひい黄褐色土層(10YR4/3) 10YR7/40-ム極少含。所謂「疊床」。
 7. にひい黄褐色土層(10YR6/4) 基本的に4層と同一。野崎大崩闇の巣上のハシチク。
 8. にひい黄褐色土層(10YR7/4) ム土体-4/2少含。
- 柱状。

第24図 H8号住居址(1)



第25図 H8号住居址(2)



第26図 H8号住居址(3)

○H9号住居址

Ⅲえ9グリットで検出された。H14・H21・H25を切る。北方向に調査区外に延びるため全容は不明である。短軸長-6.15m、壁残高-0.20mの規模である。床面上で4基、堀方から3基の計7基のピットが検出されたが、主柱穴は判然としなかった。調査部分には壁下に周溝が巡っているが、カマド・炉は存在しなかった。

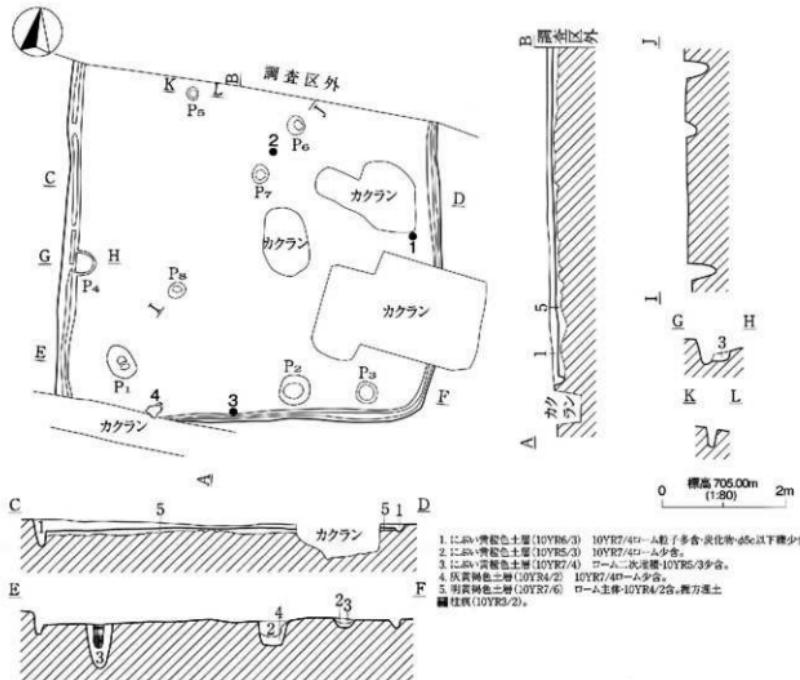
遺物は弥生土器・土製品・石器が出土している。弥生土器には鉢(1)、高杯(2・3)、甕(4~6)、壺(7~9)の器種が認められる。鉢は外外面に赤彩が施される。高杯は2点共に脚部の破片であり、脚内面を除き赤彩が施される。甕は頭部に櫛描縦状文が施されることと共通するが、口縁部と体部上半の文様は、4が口縁部が櫛描波状文、体部が横位羽状構成の櫛描斜走文。5は口縁部、体部共に櫛描波状文が施されるが、口縁部は折り返し口縁である。6は口縁部は不明であるが、体部は櫛描波状文であり、円形貼付文が付加される。貼付文は無紋である。壺は7が受口口縁で、外外面に赤彩が施される。8・9は底部片であり、2点共に体部下半の稜が明瞭である。9は外表面の縦より上は赤彩が施されるが、8は施されない。土製品は10の土製勾玉が1点、石器は11の台石が1点出土している。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期IV期~V期に比定されようか。

○H10号住居址

IVあ4グリットで検出された。M1・H7に切られる。南・東方に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高-0.60mの規模である。P1・P7・P2・P4の4基が主柱と思われる。またP3・P6の2基は棟持柱の可能性が高い。柱はφ16~20cmの規模であった。炉はP1とP7の中間に構築されており、長軸を南北にとする梢円形の掘り込みの中に、「U」字状の石組が認められた。周溝は有さない。

出土遺物は弥生土器・石器・土製品が出土している。弥生土器には鉢(1~3)、高杯(4~6)、甕(7~14)、壺(15~21)が認められる。鉢には赤彩される2・3とされない1が存在する。高杯は口縁部が水平に屈曲し、4カ所突起が付加される。脚の内面以外には赤彩が施される。甕は受口状の口縁部に特徴が認められる。施文は受口口縁に独立した文様帯を有する7・8・11とそうでない12に大別される。7・11はこの文様帯に櫛描波状文が1条巡らされる他は、頭部まで無紋であるが、8は櫛描波状文が施される。12は口縁部全面に櫛描波状文が施されるが、頭部には櫛描丁字文が施される。13・14は口縁部を欠損する。頭部には13が櫛描波状文、14は櫛描縦状文が施され、13は体部には横位羽状に櫛描斜走文が、14は横位に櫛描波状文を数条巡らし、その下に横位羽状の櫛描斜走文が施される。壺は口縁部が受口気味の16・17の様なものと、15の様に外反するものが認められる。赤彩も施すものと、施さないものがある。



第27図 H9号住居址(1)

体部の最大径は比較的上部にあり、明瞭な稜は認められない。文様は16が口縁部と頸部にを持つ他は、頸部にのみ施される。15は頸部に櫛捲横位条線と波状文、18は櫛捲T字文、16は口縁部に櫛捲波状文、頸部に櫛捲巻状文が施される。石器・石製品はスクレイバー(22-23)、磨製石鏃(24)、磨・敲石(25)、敲石(26-27)、磨製石鏃の素材(28)などが認められる。尚、29は本址の炉石であるが、図示したようにすべてが接合した。

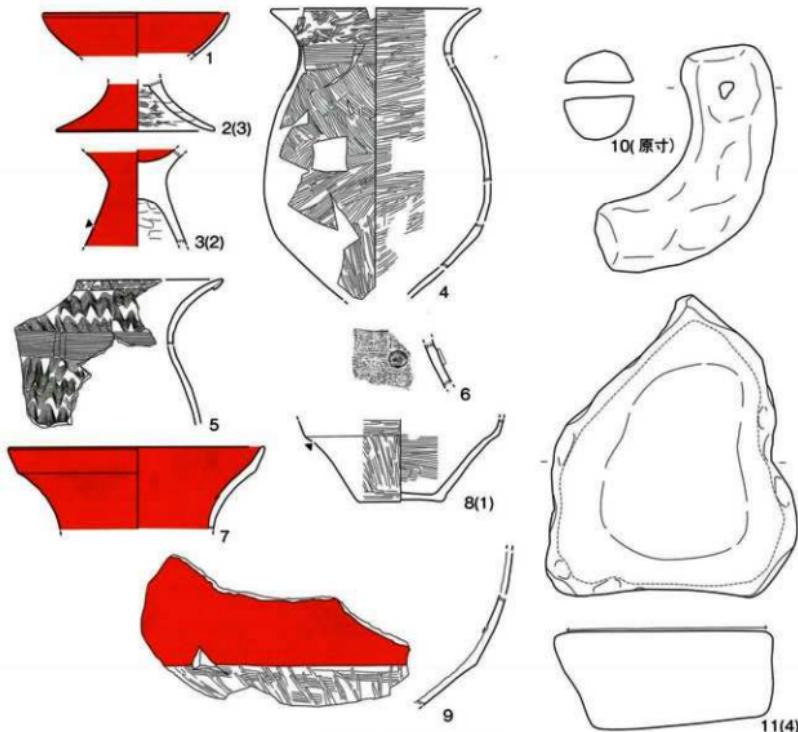
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅱ期の古い部分か、Ⅰ期の新しい部分に比定されようか。

○H11号住居址

Ⅲa9グリッドで検出された。H15号住居址を切る。北・東方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高-0.60mの規模である。ピットは床面上で2基、隅方から3基、西壁の張出部上に2基検出された。P1かP8が生柱と思われる。周溝は有さず、調査範囲内には灰は存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。器種は鉢(1~3)、高杯(4)、壺(5~8)、壺(9~10)が認められる。鉢は1・2のような所謂「鉢」と3のような壺と同様なものが存在し、何れも赤彩が施されるが、3の内面は頸部下は施さない。高杯は脚、口縁部を欠損する。内外面に赤彩が施される。壺は外側胴部下以外に櫛捲斜走文が横位羽状に施される6~8のようなものと、5の様に頸部に櫛捲巻状文を巡らし、口縁部には櫛捲斜走文、体部には櫛捲波状文を施すもののが存在する。壺は2点共にせきされており、1は内面も赤彩が施される。

以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期に比定される。



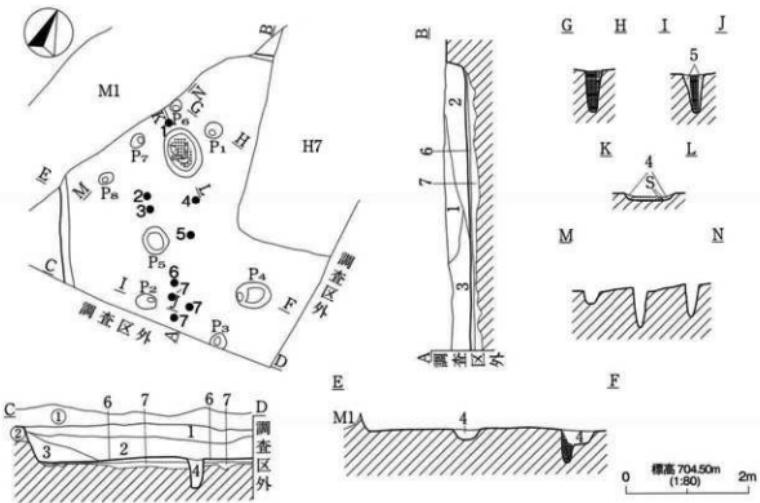
第28図 H9号住居址(2)

○H12号住居址

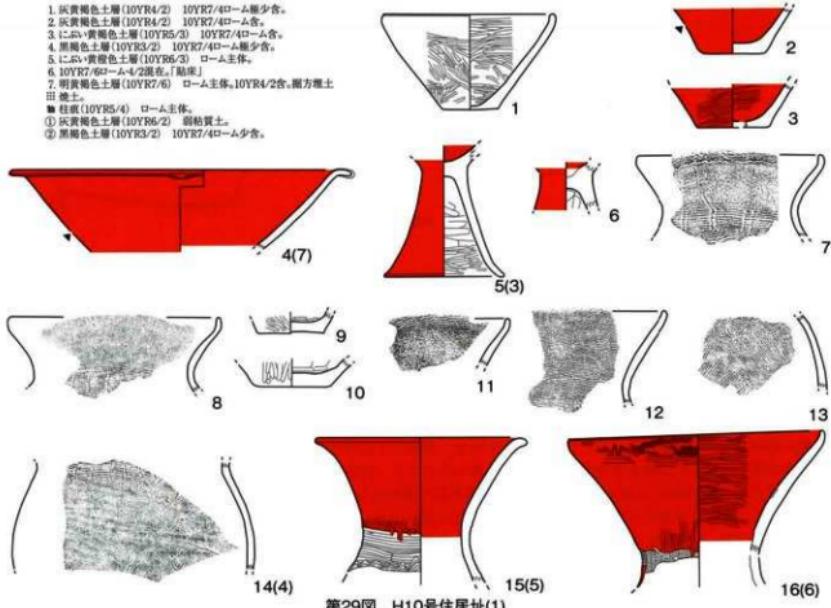
IVい3グリットで検出された。M1・D6に切られ、H23を切る。平面形態は隅丸長方形である。N-2°-Wに長軸方位をとり、長軸長-5.44m、短軸長-5.40m、壁残高-0.45mの規模を有する。周溝は有さず、P1～P4の4基の主柱穴が均等に配置される。柱はφ14～20cmの規模であった。北壁の中央部分には、カマドの痕跡と思われる焼土の堆積や粘土の小塊が覆土中に認められたことから、この部分にカマドが構築されていた可能性が高い。その東脇に拘置されていたP5は貯蔵穴の可能性が高いものと思われる。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器・石製品が出土している。土師器には、壺、甕の器種が認められ、壺にはE4・D2・D3・G1の形態が存在する。E4は「北武藏型壺」であり、底部のヘラケズリ調整以外は施されない。焼成も堅緻であり、橙色を呈する。D2形態の5やG1形態の6は内外面赤彩のように思われるが判断できない。甕は器壁が厚く、胎土に砂粒を多含する。調整は外面ヘラケズリ、内面ナデである。須恵器は壺、高壺、甕の器種が認められるが、9・10の高壺以外はD6号土坑からの混入品と思われる。回転糸切痕を有する壺7・8、甕17・18がこれに該当する。壺蓋9は高壺の可能性も高い。弥生土器はH10・H23・H28からの混入品である。器種的には鉢、高壺、甕、壺が認められる。高壺20の内面に残る赤色・梢円の痕跡は指の跡であろうか？縄文土器は早期格円押型文土器片が1点出土している。石器・石製品は砥石、打製石斧、磨製石錐、敲石、加工痕のある剥片、剥片が認められる。

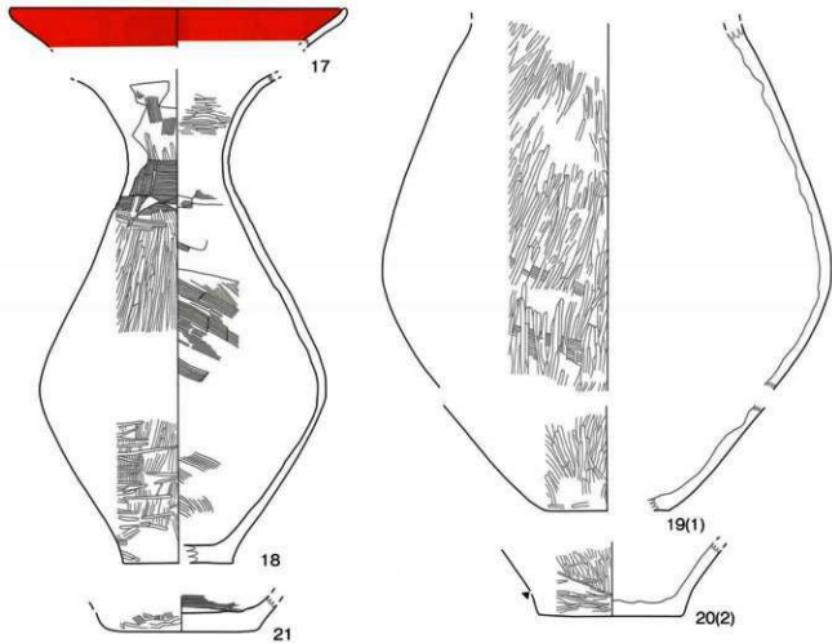
以上の出土遺物から本址は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期-6世紀中葉～7世紀初頭の時期が比定される。



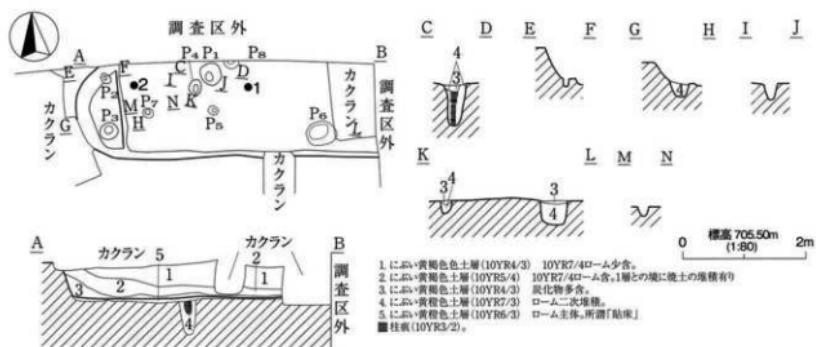
1. 深黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/4D-ム少含。
 2. 深黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/4D-ム含。
 3. 深黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR7/4D-ム少含。
 4. 黄褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4D-ム少含。
 5. 深黄褐色土層 (10YR6/3) ローム主体。
 6. 10YR7/6D-ム-4-2混含。粘土。
 7. 明黄褐色土層 (10YR7/6) ローム主体。10YR4/2含。腐泥堆土。
- 岩底 (10YR5/4) ローム主体。
 ① 深黄褐色土層 (10YR6/2) 腐粘質土。
 ② 黑褐色土層 (10YR3/2) 10YR7/4D-ム少含。



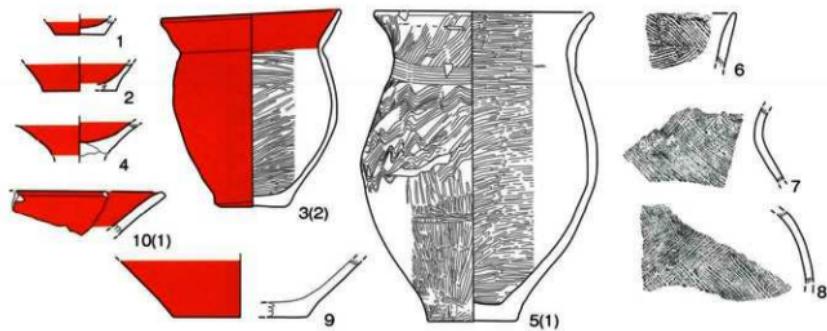
第29図 H10号住居址(1)



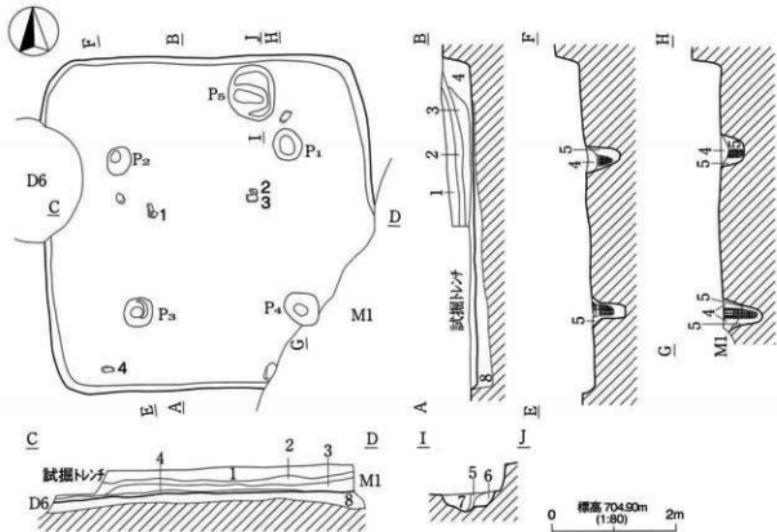
第30図 H10号住居址(2)



第31図 H11号住居址(1)

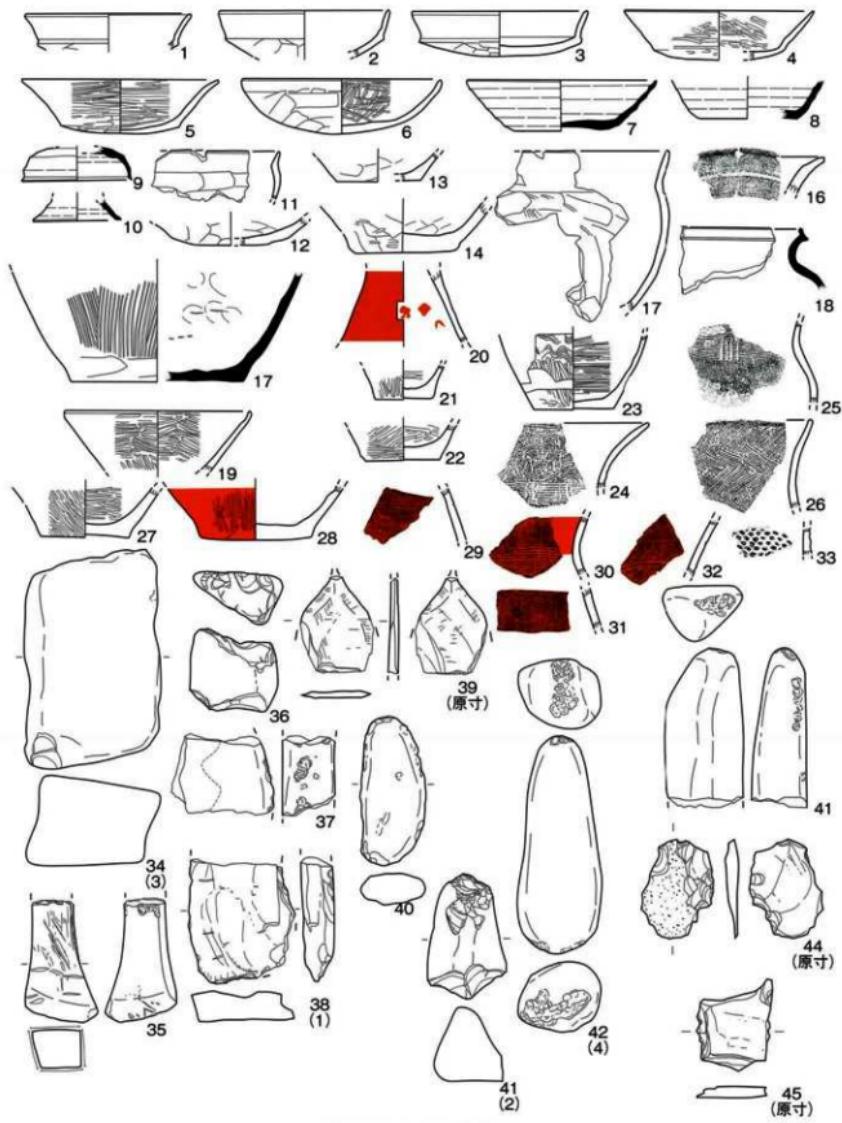


第32図 H11号住居址(2)

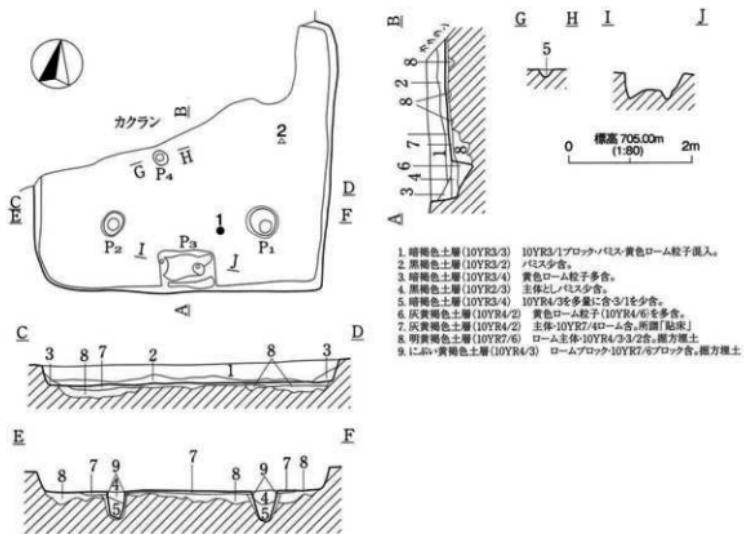


1. 黄褐色土層(10YR6/3) 10YR7/4ローム少含。
2. 黄褐色土層(10YR6/3) 10YR7/4ローム含・鐵土少含。
3. 黄褐色土層(10YR6/3) 鉄化物・鐵土少含 10YR7/4ローム含。
4. 黑褐色土層(10YR2/2) 10YR7/4D-4少含。上面が礫上に堅い。
5. 黄褐色土層(10YR6/3) 10YR7/4D-4ローム含。
6. 10YR7/4D-4-4-3斑花。
7. 黑褐色土層(10YR2/2) 10YR7/4D-4ローム少含。
8. 鐵方鐵土。
- 柱痕(10YR3/2)。

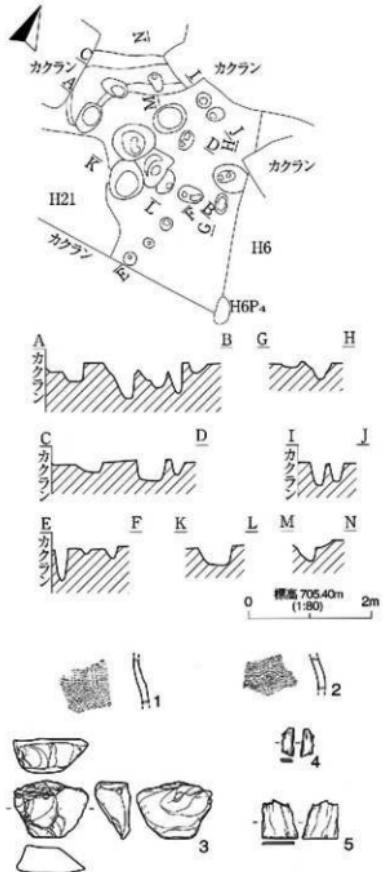
第33図 H12号住居址(1)



第34図 H12号住居址(2)



第35図 H13号住居址



第36図 H14号住居址

下に構築された出入口の梯子あるいは階段の軸を固定したものであろう。P5・P6及び掘方から検出されたピットについてはその性格は不明である。

遺物は弥生土器と石器が出土している。弥生土器には高杯、壺、壺の器種が認められる。主部は均等に4本配置されるものと思われ、P1・P2がその内の2基であろう。P4の性格は不明である。南壁下中央に構築された2基の小怪ビットを内包する長方形の掘込みは出入口であろう。遺物は土器類、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土器類には壺(1)、壺(2-5)の器種が認められる。壺は内面黒色處理が施され、底部は手持ヘラケツリ調整である。壺は武藏壺(2・4・5)と器壁の厚い胴張壺(3)が認められる。弥生土器は内外面赤彩が施される鉢(6)と頭部輪描縦状、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施される壺(7)が認められる。土製品は8の弥生土器の壺片を加工した土器片円盤が出土している。石器・石製品は9の砥石、10の礫物石、11・12の敲石、13の削片が認められる。

○H13号住居址

IV<3グリッドで検出された。H18・H27・H38を切る。北東隅を残し、遺構の北半は擾乱により現存しない。N-8°-Wに長軸方位をとり、短軸長-4.85m、標高-0.38mの規模を有する。主柱は均等に4本配置されるものと思われ、P1・P2がその内の2基であろう。P4の性格は不明である。南壁下中央に構築された2基の小怪ビットを内包する長方形の掘込みは出入口であろう。遺物は土器類、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土器類には壺(1)、壺(2-5)の器種が認められる。壺は内面黒色處理が施され、底部は手持ヘラケツリ調整である。壺は武藏壺(2・4・5)と器壁の厚い胴張壺(3)が認められる。弥生土器は内外面赤彩が施される鉢(6)と頭部輪描縦状、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施される壺(7)が認められる。土製品は8の弥生土器の壺片を加工した土器片円盤が出土している。石器・石製品は9の砥石、10の礫物石、11・12の敲石、13の削片が認められる。

以上の出土遺物から本址は、聖原遺跡の時期区分の奈良・平安時代二期-8世紀第2四半期の時期が比定される。

○H14号住居址

III<9グリッドで検出された。本址は部分的な床面と、ピットが残存して状態であり、その形状や規模は不明である。

H6・H9・H29に切られる。17基検出されたピットの性格及び本址に帰属するか否かについても判然としない。

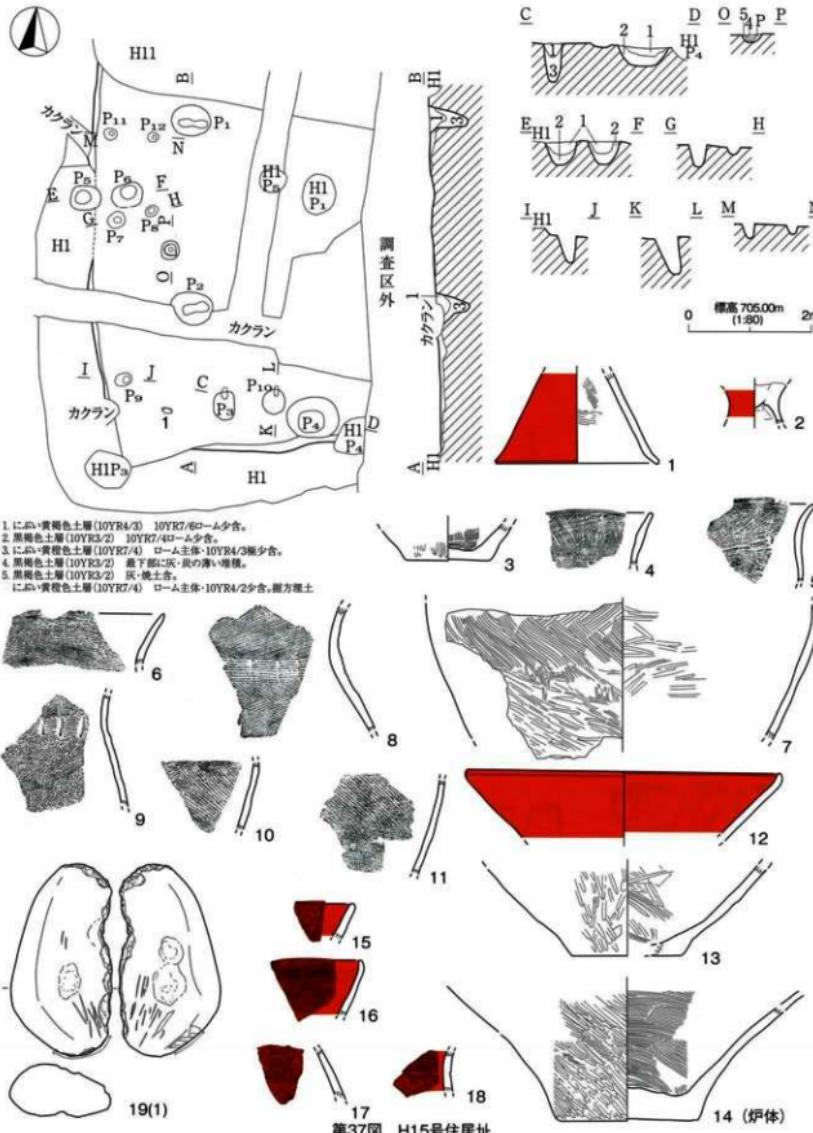
出土遺物は弥生土器、石器・石製品が認められる。弥生土器(1-2)は壺片である。1は頭部に輪描縦状文、体部に櫛描波状文が施される。2は体部に櫛描波状文が施される。石器・石製品は3が打製石斧の破片?、4・5が石製模造品あるいは磨製石器の素材なし剥片と思われる。

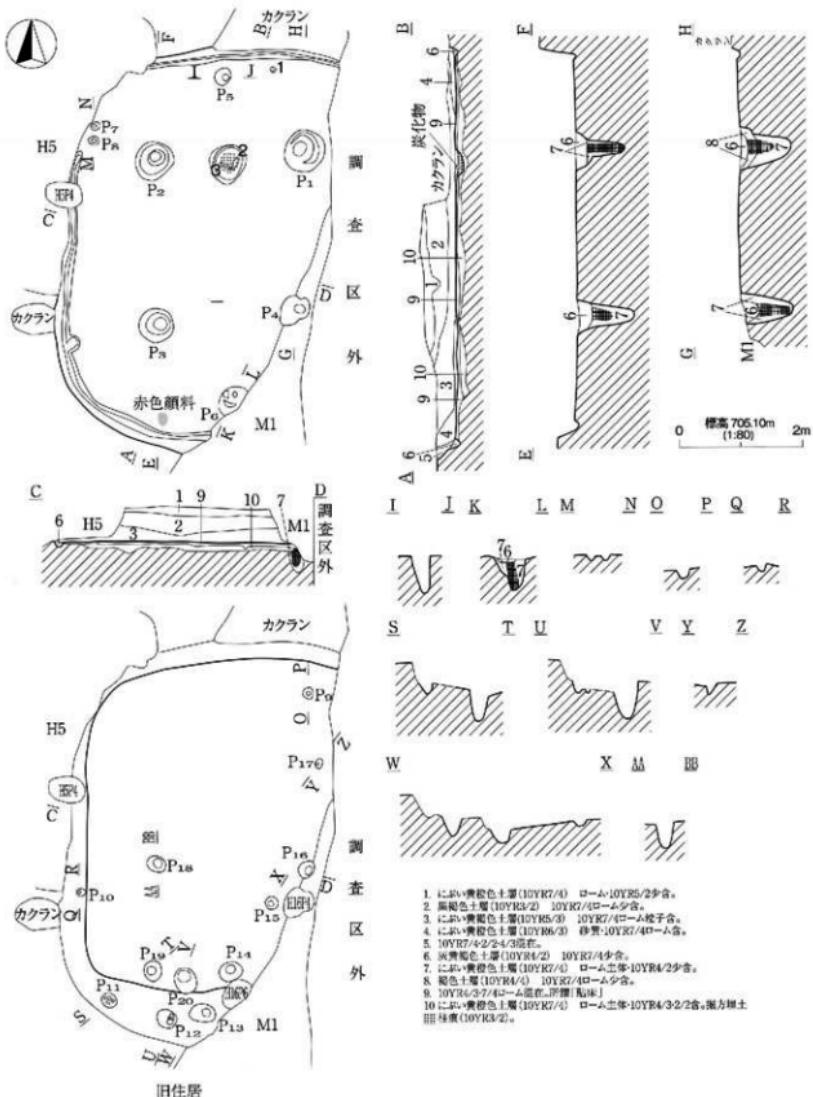
以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の所産と考えられる。

○H15号住居址

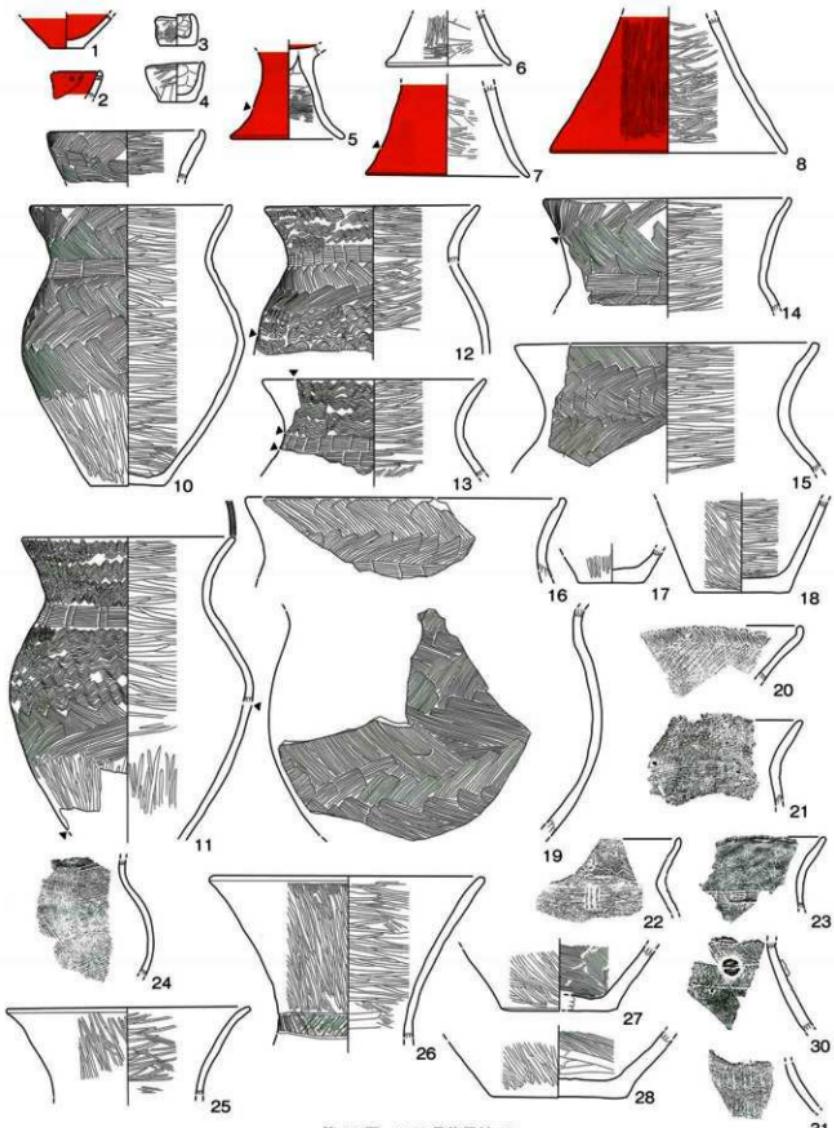
III<9グリッドで検出された。H1・H11に切られる。北・東方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高-0.05mの規模である。主柱は床面上に4本が均等配置されていたものと思われる。P1・P2の2基がその内の2本の掘方であるが、柱痕は確認できなかった。P3・P10の2基は南壁

面に2ヶの凹を持ち更に、両面を砥面とし、側面には敲打痕を有する安山岩製河床砾が出土している。

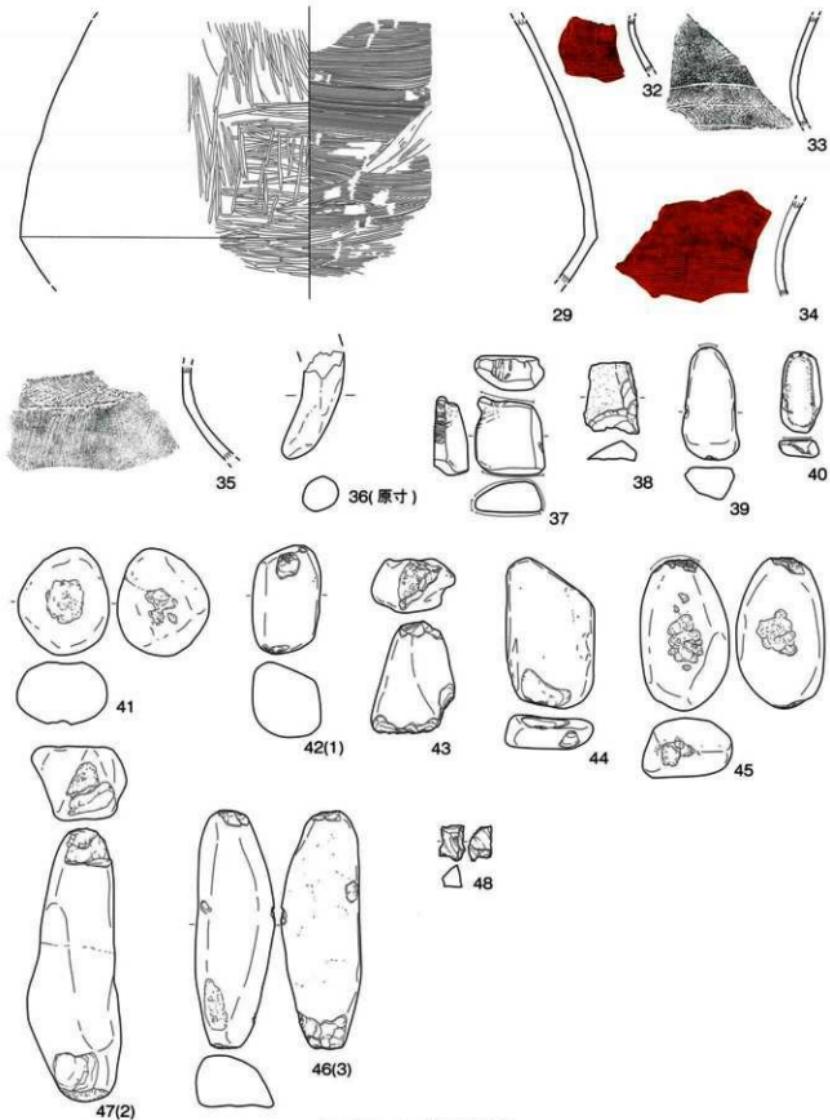




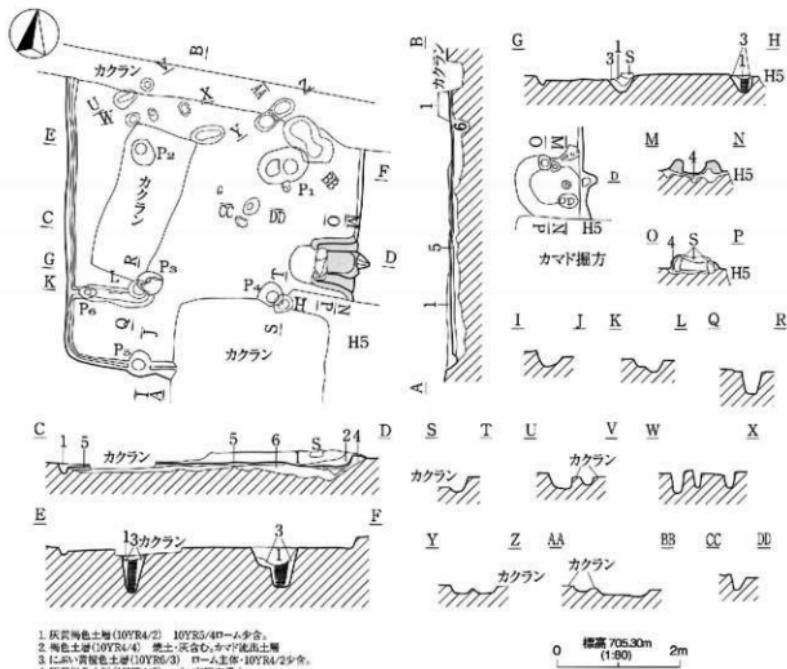
第38図 H16号住居址(1)



第39図 H16号住居址(2)



第40図 H16号住居址(3)



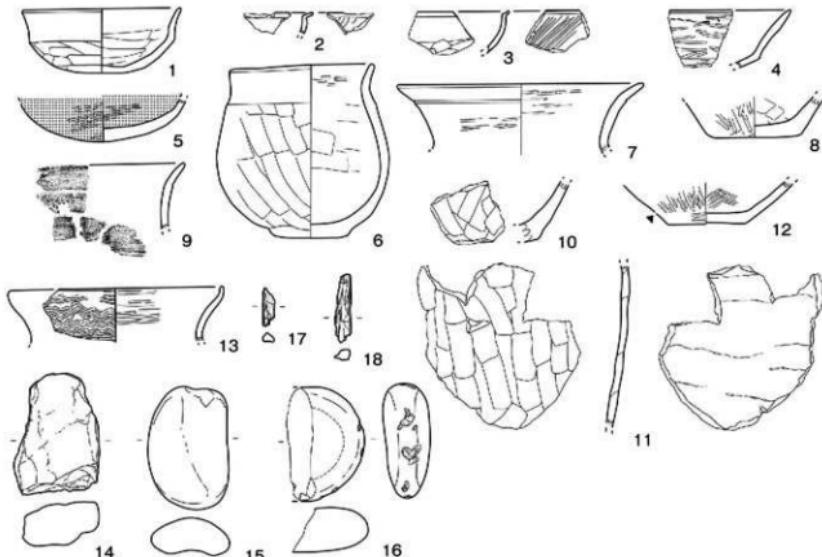
第41図 H17号住居址(1)

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅱ期に比定される。

○H16号住居址

IV-a1グリッドで検出された。隅丸長方形と言ふよりは梢円形の平面形態を呈する。M1-H5に切られ、N-0°-Wに長軸方位をとる。東方向に調査区外に延びるため、長軸長、短軸長は不明である。壁残高は0.60mの規模であった。北西隅部分を除き、調査部分の壁下には周溝が巡る。主柱穴P1～P4の4基は均等に配置され、柱はφ18～20cmの規模であった。P5、P6の2基は横持柱である。P1とP2の中間に構築されており、梢円形の掘り込みの中に「く」字状に石を組んである。南壁中央西寄りの床面上には梢円形に赤色顔料が薄く堆積していた。内包あるいは繪被されていた器が消滅したものであろうか。尚、本址は床面下掘方より旧住居が検出された。主柱、炉はそのままに、南方向に旧住居を抜強したことが明らかとなった。

遺物は弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。弥生土器には鉢、ミニチュア（手捏）土器、高杯、壺、壺の器種が認められる。鉢（1・2）は内外面に赤彩が施されるもので、2は口縁部に2孔が焼成前に穿たれている。ミニチュア土器（3・4）は手捏の鉢状ものである。赤彩は施されない。高杯（5～8）はすべて脚部であり、杯部は不明である。透かしは認められない。6を除き外面に赤彩が施される。壺（7～24）は10・14～16・19・20・24の様に櫛描斜走文を横位羽状に施するものと、13・21～23の様に櫛描波状文を横位に施するも、両者が混在する11・12の様なものの3種類が存在する。11のようなのが古い要素を残したものと思われ、口唇部には縦文が施される。櫛描斜走文を横位羽状に施すものには、頭部に櫛描麻状文が



第42図 H17号住居址(2)

施されるものと、施されないものが認められ、更に、頸部に櫛描縦状文の代わりに「T字文」が施されるものも存在する。頸部に「T字文」を施す壺は上田市「和手遺跡」に類例が認められ、地城差と考えられているが、当遺跡では他造構からも出土しており、注意が必要であろう。壺(25～35)は赤彩されるもの(32・34)と、されないものも存在する。文様は頸部にのみ施される。26のようなヘラ描斜走文を1条巡らすものと、30・33の様に横位翼状に多段展開するもの、櫛描の横位斜走文を巡らす35、櫛描波状文を巡らす31、櫛描波状と縦状文を巡らす32、櫛描T字文を巡らす34などがある。30には円形貼付文が付加されている。土製品は勾玉片が1点出土している。石器・石製品は砥石(37・38)、礫物石(39)、敲石(40～47)、使用痕のある剝片(48)が認められる。

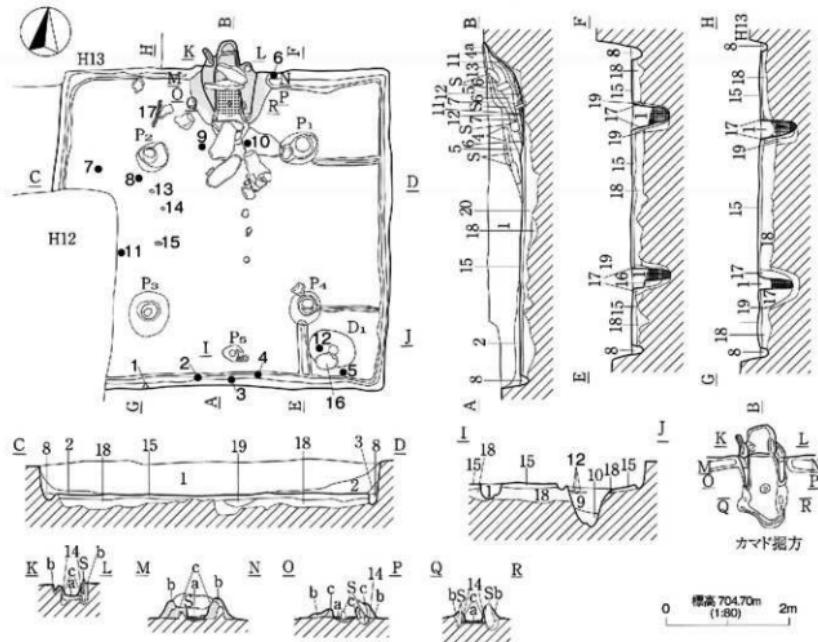
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器発掘年」)の後期II期に比定される。

○H17号住居址

Ⅲ-10グリットで検出された。H5に切られ、H21・H22を切る。北辺が擾乱により消滅しているため全容は不明である。短軸長~1.88m、壁残高~0.20mの規模を有する。西・南壁下には凹溝が巡る。主柱はP1～P4の4基に均等配置されるが、P3は壁石上に立てられたようである。また、P3には西壁から延びる所謂「間仕切溝」が掘方から検出され、これに連絡する旧P3ビットも検出された。同様にP4ビットも堀方から旧P4ビットが検出されており、本址は少なくとも1回の上屋の建替えが行われたものと思われる。また、P3、西壁のP6、南壁のP5、西南隅が構成する方形に住居内の空間が区画されていたことが伺えた。主柱の規模は約12～20cmであった。カマドは東壁の中央南寄りに粘土と石で構築されていた。

遺物は土師器、弥生土器・石器・石製品が出土している。土師器には壺(1～5)、壺(6～11)、壺(12)の器種が認められる。壺はA1(2・3)、E1(1・5)、D2(4)の形態が認められる。5は内外面に黒色処理が施される。また、A1形態の壺は放射暗文が顕著である。壺はヘラケズリ調整を基本とする。最大径を体部に有するようである。12はヘラミガキ調整が顕著なため、壺とした。弥生土器は櫛描波状文が施される壺が出土した。口縁部は受口状である。石器・石製品は14・15の礫物石、16の磨・敲石、17・18の石器素材が出土している。

以上の出土遺物から壺原遺跡の時期区分の古墳時代I期～5世紀中葉～6世紀初頭の時期が比定される。



1. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR27/4(2)ルーム鞋子・g1cm以降P1-P4/2不定大ブロック含。人為堆土と見られる。
2. にじみ黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR27/13(2)ルーム含。一層の間に変化物・灰・焼土の堆積層有り。
3. にじみ黄褐色土層 (10YR5/3) 10YR27/13(2)ルーム含。
4. 黑褐色土層 (7.5YR3/2) 粘土ブロック・10YR27/2(2)。
5. 黑褐色土層 (7.5YR3/2) 变化物多含。
6. 黑褐色土層 (7.5YR3/3) 变化物・焼土ブロック・地上ブロック含。
7. 黑褐色土層 (7.5YR5/2) 粘土ブロック・地上ブロック含。
8. 黑褐色土層 (7.5YR5/2) 粘土ブロック・地下ブロック含。削落。
9. 黑褐色土層 (10YR2/3) 削落。
10. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ロームブロック多含。
11. 黄褐色土層 (5YR4/2) 烧土柱子・粘土ブロック含。
12. 黄褐色土層 (5YR5/2) 灰土体。
13. 黄褐色土層 (5YR4/2) 粘土・灰・焼土・柱子・10YR2/2ブロック多含。
14. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム・10YR2/1柱子含。カマド裏方。
15. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム・10YR2/1柱子含。粘土。
16. 黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/3・黄色ローム。
17. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム・10YR2/2ブロック多含。
18. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム・10YR2/2ブロック多含。
19. 黄褐色土層 (25YR4/4)。
20. 黄褐色土層 (7.5YR3/3) 烧土・柱子・焼土含心土層。
21. 黄褐色土層 (10YR3/3) 10YR2/2柱子含。
22. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ローム・10YR2/2ブロック多含。
23. 黄褐色土層 (10YR4/2) 黄色ロームブロック多含。

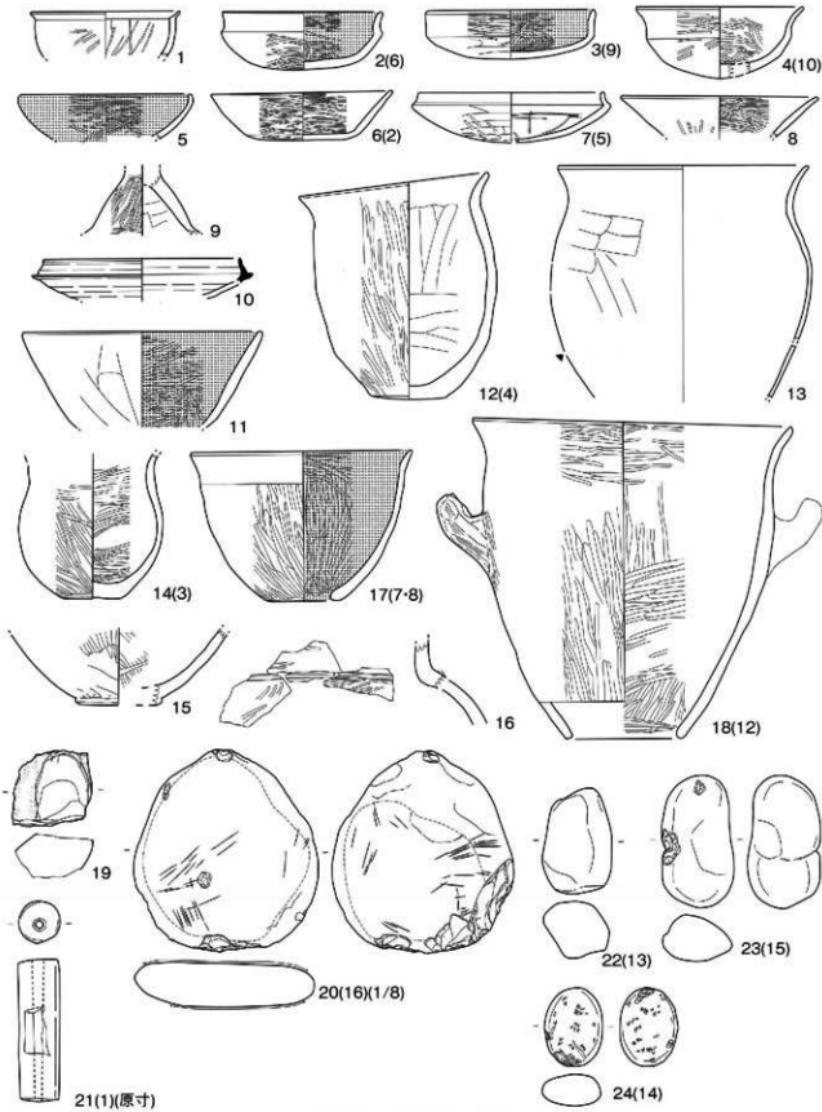
第43図 H18号住居址(1)

マドと対する南壁下にはP6が構築されていた。出入口施設であろう。

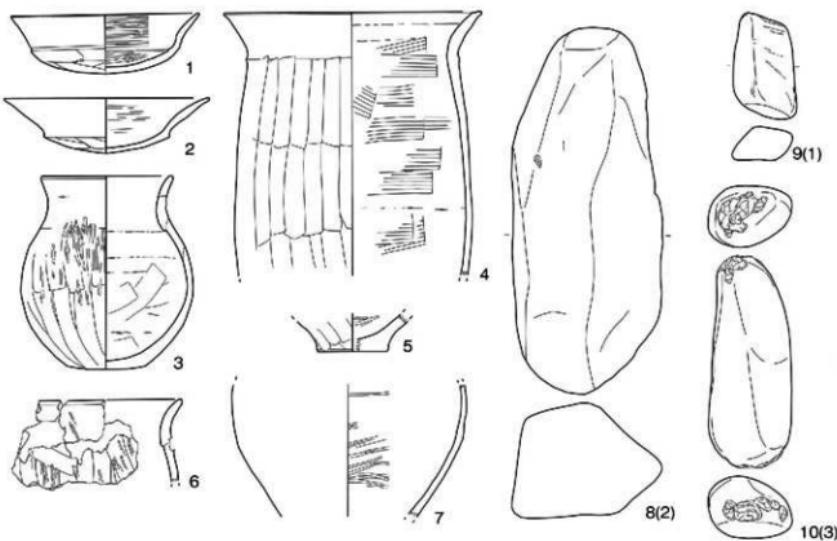
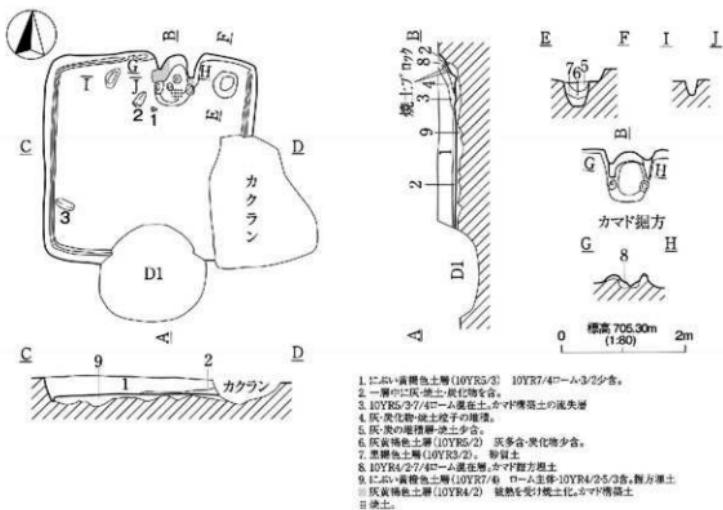
遺物は土師器、須恵器、石器・石製品が出土している。土師器には壺(1~8)、高壺(9)、鉢(11)、壺(12~15)、壺(16)、瓶(17~20)の器種が認められる。壺はA1-D3-E2-F2-F3-G3の形態が認められ、2・3は内面黒色処理が施される。高壺は脚部片である。鉢は内面黒色処理が施される。瓶の可能性も否定出来ない。壺はヘラケズリやヘラミガキ調整が施される。壺は頭部に蓬帯が巡る特異なもので、おそらく有段口縁であろう。壺は把手を持たない小型単孔のものと、対の把手を有する大型で、底部が全開する

○H18号住居址

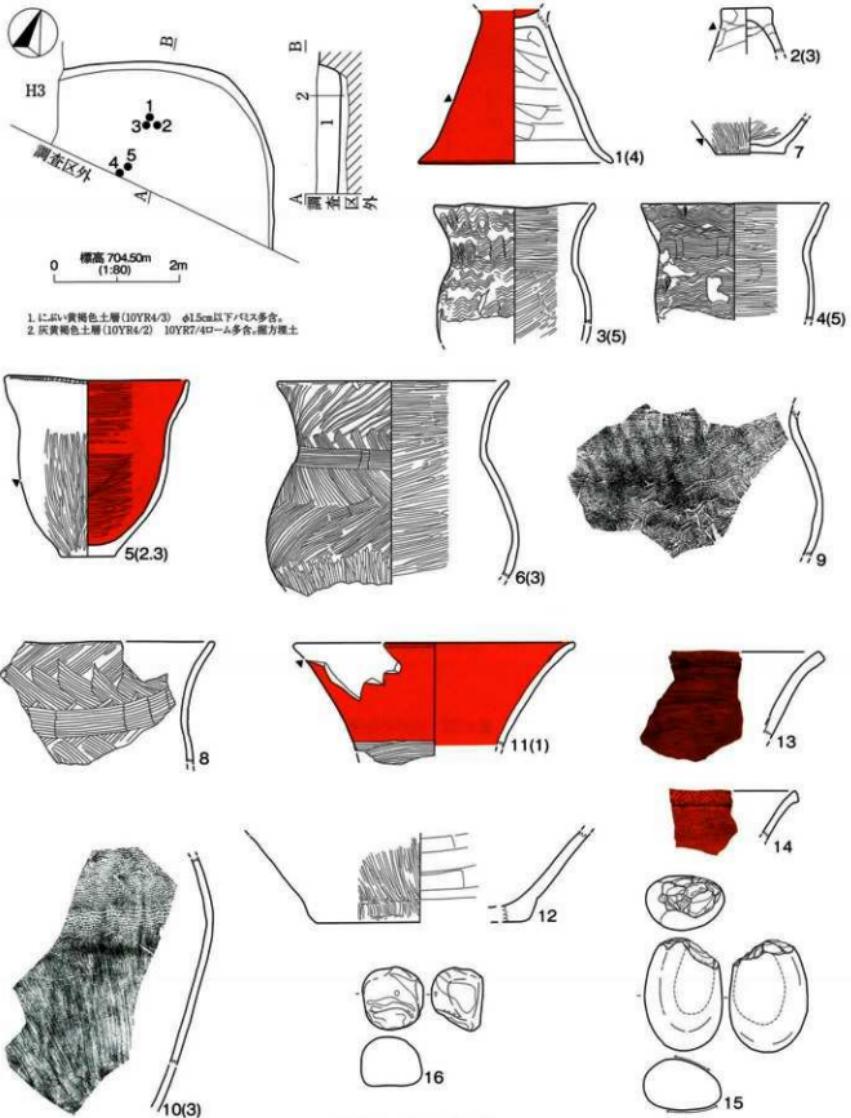
IVを4 GRID で検出された。H2・H13に切られる。北辺に比べ南辺がやや広い台形の平面プランを呈する。N-5°-W に長軸方位をとり、長軸長-5.15m、短軸長-5.55m、壁残高-0.55mの規模を有する。均等に配置されるP1 ~ P4 の4基が主柱穴であり、主柱はφ14 ~ 20 cmの規格である。壁下には周溝が巡り、P1には東壁下の周溝から、P4には東壁下と南壁下の周溝から所謂「間仕切溝」が延びている。P4と2本の間仕切溝及び東南隅に囲まれた方形の空間にはD1が構築されている。所謂「貯蔵穴」であろう。北辺中央部分には石芯を粘土で被覆したカマドが構築されていた。天井石がぎり落ちた様子が住居裏土の南北断面に明瞭に残されていた。このカ

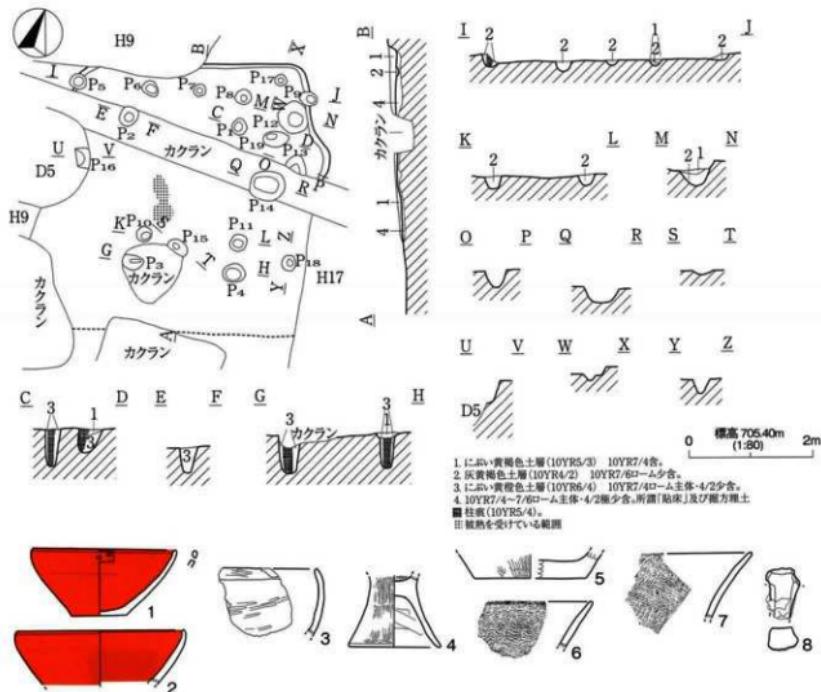


第44図 H18号住居址(2)



第45図 H19号住居址(1)





第47図 H21号住居址

ものが出土している。須恵器は壺が1点出土した。石器・石製品は砥石(19)、台石(20)、管玉(21)、編物石(22・23)、磨・敲石(24)が出土している。

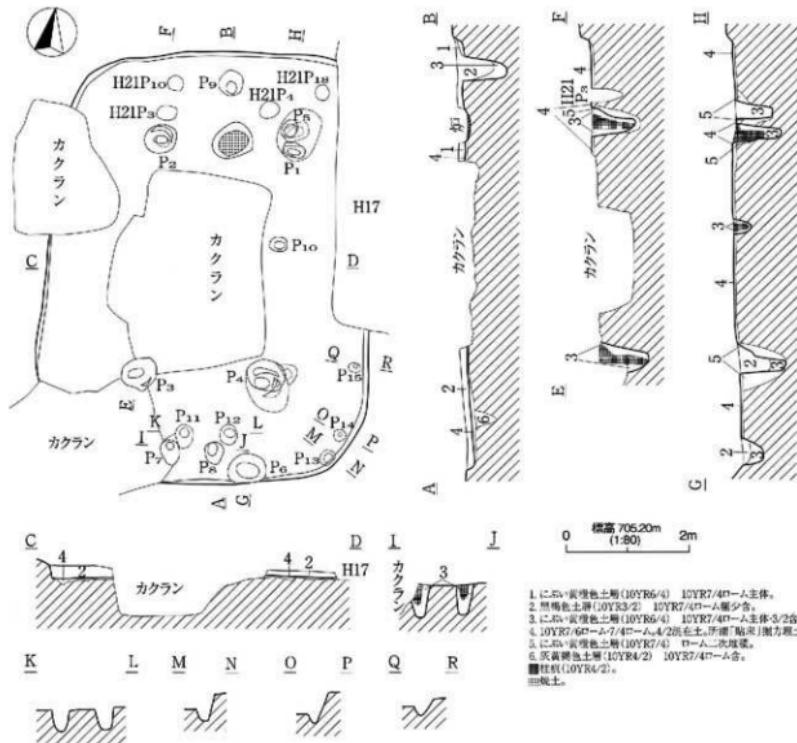
以上の出土遺物から本址の時期は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅱ期-6世紀前葉～中葉の時期が比定される。

○H19号住居址

Ⅲお10グリットで検出された。D1に切られ、D5・H25を切る。隅丸方形の平面形態である。N-0°-Wに長軸方位をとり、長軸長-3.45m、短軸長-3.40m、壁残高-0.55mの規模を有する。北壁の東半（カマド東部分）以外の壁下には周溝が巡る。主柱穴は有さず、カマド東脇に貯蔵穴と思われるビットが1基掘込まれていた。カマドは所謂「地山削出し」による袖先端部分に立石を配置し、これに天井石を架け、粘土で被覆したものと思われるが、僅かに粘土が残る状態であり、ほむ場方と言てよい状態であった。カマドの魔除祭祀といった様相ではなく、構築材を再利用するために抜き取ったと考える方が妥当と思われた。

遺物は土師器、弥生土器、石器・石製品が出土している。土師器は壺（1・2）、甕（3～6）の器種が認められる。壺はE1・D2の形態が認められる。甕は最大径を体部に有する3のようなものと、口縁部に最大径を有する長胴の4のようものが認められる。弥生土器は体部に櫛插波状文と斜走文が施される甕片が出土している。石器・石製品は台石（8）、磨石（9）、敲石（10）が出土している。

以上の出土遺物から本址の時期は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅱ期-6世紀前葉～中葉の時期が比定される。



第48図 H22号住居址(1)

CH20号住居址

IVう4グリットで検出された。H3に切られ、H28を切る。南方向に調査区外に延びるために全容は不明である。聖残高-0.38mの規模である。調査部分には周溝、ビット、炉等は認められなかった。

遺物は弥生土器、石器が出土している。弥生土器は高坏(1)、蓋(2)、鉢(5)、壺(3～10)、壺(11～14)の器種が認められる。高坏は脚部片であり、脚内部を除き赤彩が施される。蓋は天井部中央部分の破片である。鉢は菱形態のもので内面のみ赤彩が施される。文様は口唇部の刻目以外は施されない。壺は3のように口縁部～体部上半で横指波状文が施されるもの、口縁部と体部上半に横指波状文、頭部に横指縫状文が施される4・9、頸部の横指縫状文は変わらず、口縁部と体部には横指斜走文を横位羽状に施す6・8などが存在する。壺は口唇部に横指斜走文(13)や縄文(14)を施するものや、口唇部文様帶は持たず、頭部に横指横線を施す11が認められる。以上の3点は内外面に赤彩が施されている。石器は15の磨・敲石が出土している。16は石器素材の原石である。

以上の出土遺物から、本址の年代は小山岳夫の覆年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期中期新に該当するものと思われる。



第49図 H22号住居址(2)

○H21号住居址

IIIえ10グリットで検出された。H9・H17・H19・D5に切られ、H14を切る。遺構の重複が激しいため平面形態は不明であり、規模も壁残高-0.14mが提示できるのみである。均等に配置されるP1～P4の4基が主柱穴と思われる。主柱は約10～16cmの規模であった。主柱が囲む方形の中央西南寄りの床面は「8」字状に焼けており、炉の痕跡と思われる。周溝は認められなかった。

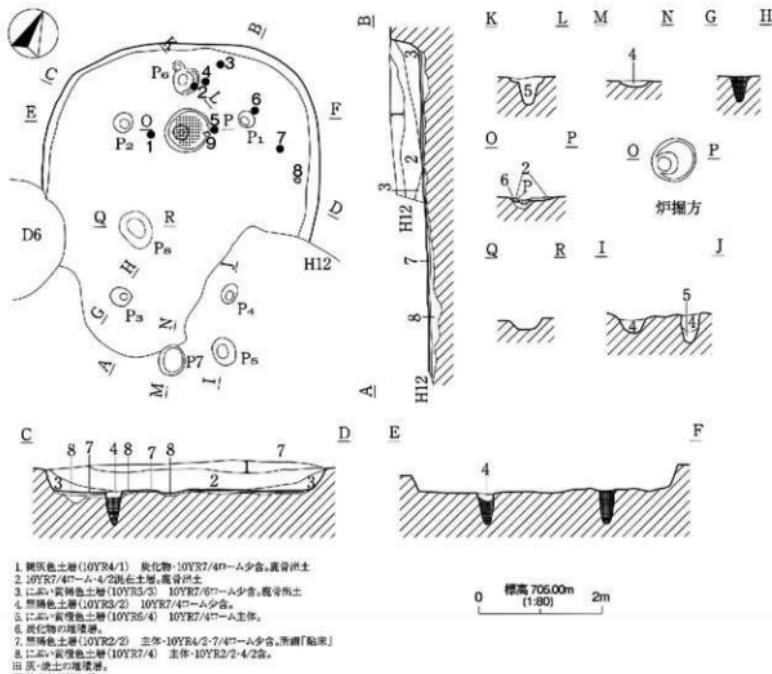
出土遺物は弥生土器、鉄が認められる。弥生土器は鉢（1～3）、台付甕（4）、甕（5～7）の器種が出土している。鉢は1・2が内外赤彩が施されるもので、1は口縁部に2孔が穿たれている。3は無頸甕としたほうが良いのかもしれない。赤彩は施されない。台付甕は脚だけが出土している。甕は5が底部片、6は口縁部片で櫛描波状文が施される。7も口縁部片である。櫛描斜走文を横位羽状に展開しているが、最上段の斜走文が波状文化している。8の鉄は鉄塊である。素材であろうか？

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期に位置付けられる。

○H22号住居址

IVえ1グリットで検出された。H17・H21・櫛乱に切られる。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-5°-Wに長軸方位をとる。長軸長-7.10m、短軸長-5.42m、壁残高-0.22mの規模である。均等に配置されるP1～P4の4基が主柱穴であり、主柱の規模は約14cm大であった。P1、P4は堀方から旧ピットが検出されている。また、南壁下に構築されたP7・P8の対のピットは住居出入口の梯子、あるいは階段の桁を固定埋設する役割を負っていたものと推測され、P1・P4同様に堀方から旧ピットが検出された。以上から本址は上屋の建替えが行われたことが明らかとなった。住居の長軸線上の北壁下と南壁下に構築されたP9、P6は棟持柱であろう。炉はP1とP2の中間に構築されていた。梢円形に掘込まれた地焼炉であった。周溝は認められなかった。

出土遺物には弥生土器、土製品、石製品が認められる。弥生土器には高坏（1～3）、甕（4～8）、壺（9）の器種が認められる。高坏は3点すべてが赤彩され、1の様に口縁部が直線的に開くものと、2の様に口縁部が水平に屈曲するものが存在する。甕は口縁部が受口気味に立ち上がる5・7と直線的に開く6の2形態が存在する。文様は、5は口縁上端に1条の櫛描波状文を巡らし、以下の口縁部を無紋とする。6は口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に施し、頭部に櫛描簾状文を巡らす。7は口縁部に櫛描波状文、頭部に櫛描簾状文を巡らす。8は頭部に櫛描簾状文、体部に櫛描波状文を巡らす。壺9は口縁部を欠損するが他はほぼ完形である。外面には赤彩が施され、頭部には櫛描の横位条線が多段に巡らされる。体部最大径は比較的腰高に位置し、屈曲はするものの稜は形成されない。土製品は10の勾玉が1点出土している。石製品は11の砥石が1点出土した。



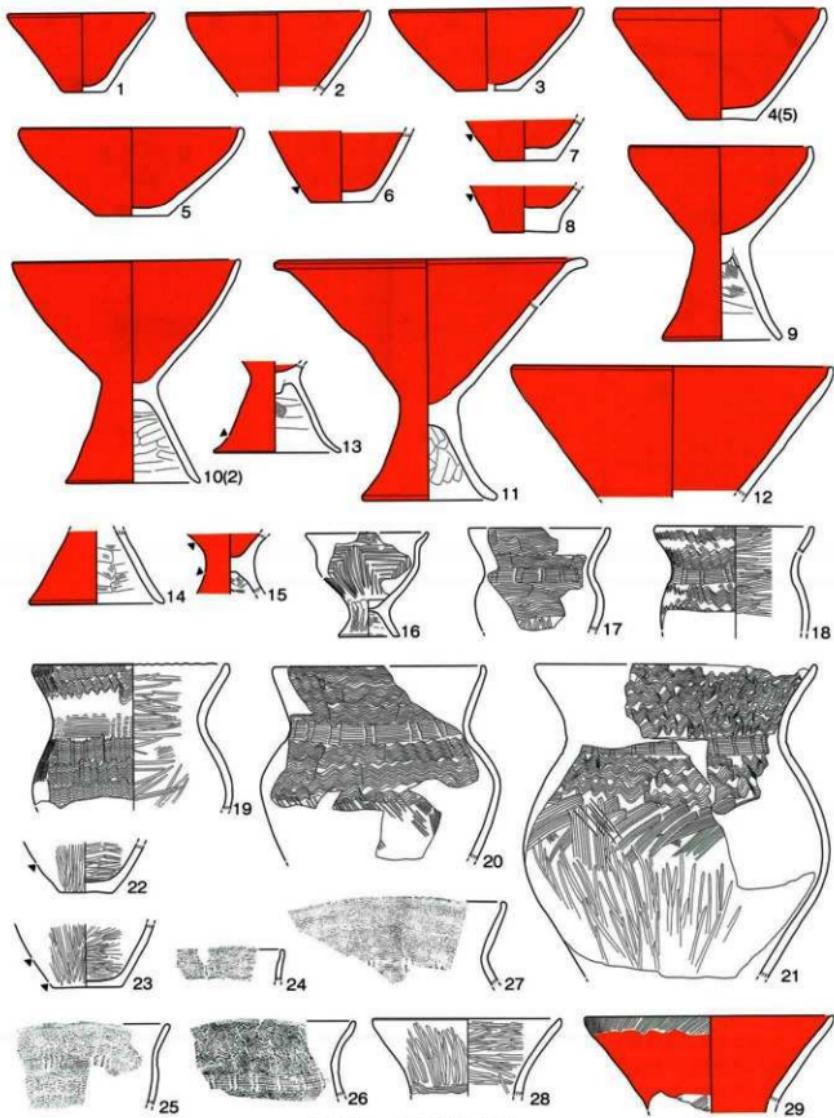
第50図 H23号住居址(1)

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期I期の新しい部分からII期の古い部分に該当するものと思われる。

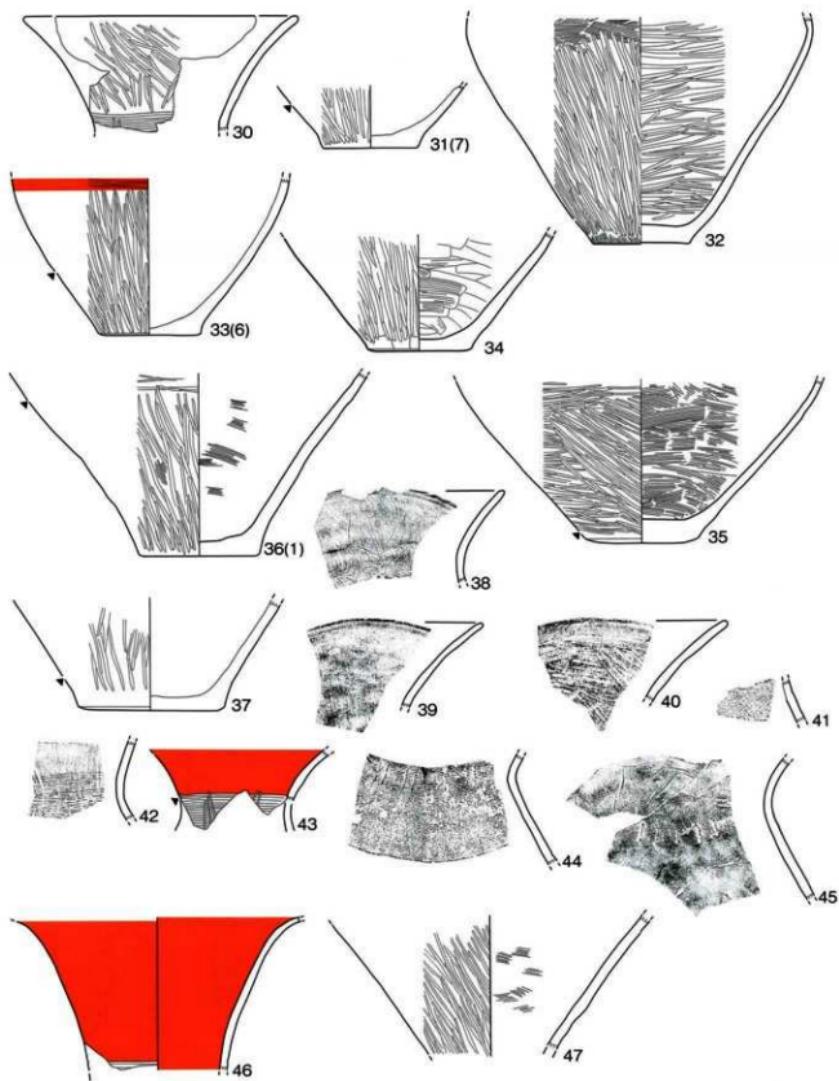
○H23号住居址

IV-a2グリッドで検出された。H12-D6に切られる。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。長軸方位N-22°-W、短軸長-4.50m、壁残高-0.48mの規模である。均等に配置されるP1～P4の4基が主柱穴であり、主柱はφ20cm大の規模であった。住居の長軸線上の北壁下と南壁下に構築されたP6とP7は柱持柱である。炉はP1とP2の中間に位置し、円形の掘込み内部に土器底部を埋設したものであった。周溝は認められなかった。

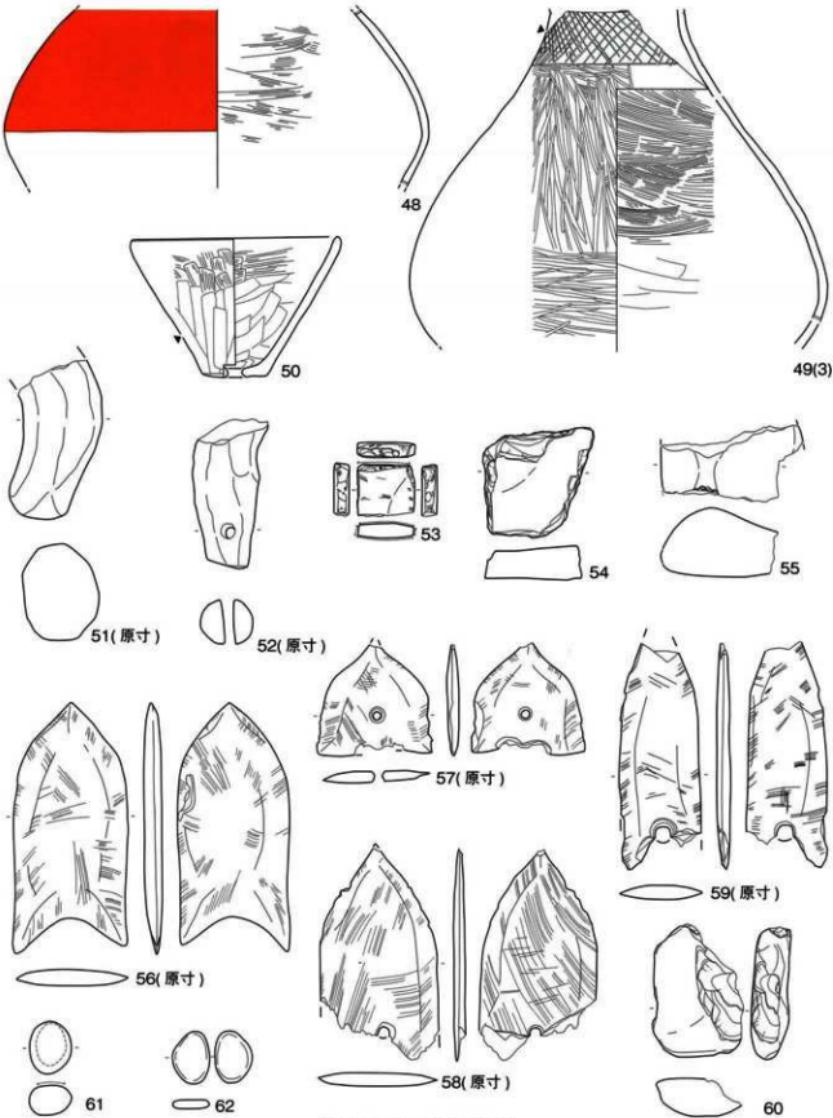
出土遺物は弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。弥生土器には鉢（1～8）、高杯（9～15）、台付甕（16）、甕（17～27）、壺（28～49）、瓶（50）の器種が認められる。鉢はすべてが内外面に赤彩が施される。高杯も脚内を除き赤彩が施される。甕の口縁部形態には、10の様に素直に開くものと、11の様に縁部に折れ曲がって開くもの、9・10の様に縁部が垂直に立ち上がるものが認められる。脚端部も11・13のように端部が開くものと、その他様に素直に開くものがある。台付甕は1点のみの出土である。「コ」字重文が施される。甕は頭部に横描筆状文を巡らし、口縁部には横描波状文を施することは共通するが、体部上半に横描波状文だけを施す17・18・19・25と横描波状文の下に横描斜走文を巡らす20・21の2種類が存在する。また、横描波状文が比較的丁寧に施されている。壺は赤彩されるもの（29・33・43・46・48）と赤彩されないものがある。口縁部は素直に開くものが大半を占めるが、28のように弱い受口状を呈するものも存在する。文様帯は29を除き頭部に集約され、横描波状文や斜走文、簾状文、「T」字文、ヘラ描格子目文が施される。簾状文と波状文を組み合わせるなど多段構成の施文



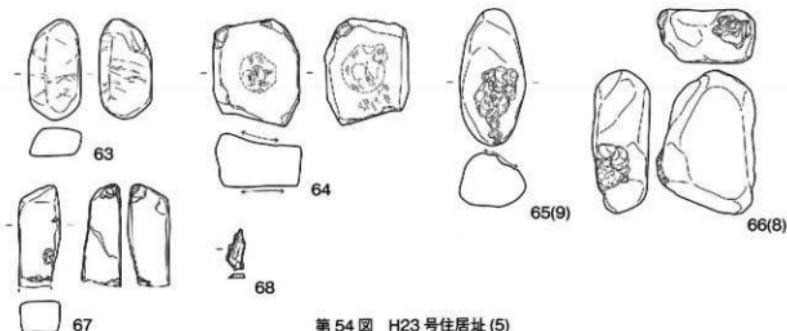
第51図 H23号住居址 (2)



第52図 H23号住居址(3)



第53図 H23号住居址(4)



第54図 H23号住居址(5)

認められる。唯一口縁部文様帶有する 29 は、この文様帶に櫛描斜走文が施されている。体部下半の稜はあまり明瞭ではない。底は単孔の鉢形のもので、法量的には中型であろうか？土製品は土製勾玉(51)と不明(52)の2点が出土した。石器・石製品は砥石(53)、白石(54・55)、磨製石錐(56～59)、礪物石(60)、磨石(61～64)、敲石(65～67)、石器素材(68)が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅰ期の新しい部分からⅡ期の古い部分に該当するものと思われる。

○H24号住居址

Ⅲき10グリットで検出された。H31・D9・D10を切る。東北隅がやや鋭角な隅丸長方形の平面形態である。長軸方位N-23°-W、長軸長-4.80m、短軸長-3.90m、壁残高-0.60m、面積-12.7 m²の規模である。均等に配置されるP1～P4の4基が主柱穴である。主柱は幅30 cm × 厚12 cmの大板状である。P3から西壁に向かい間仕切状の溝が確認されている。南壁下中央には対となるP5・P6の2基のピットが認められた。住居出入口の梯子、あるいは階段の手元を固定埋設する役割を負っていたものと推測される。その東脇には南壁以外の3方を「堤」状の土盛りで囲ったP7が検出されている。貯蔵穴であろう。炉はP1とP2の中間に構築されていた。平面「8」字状の地焼炉である。本址西北隅の壁面には横穴が2基存在しており、1本はD7に、1本はH39に繋がっていた。後世のカクランではなく住居に伴う施設と思われるが、その性格は不明である。しかし、この3基の構造が同時に存在し、関連していたことは確かであろう。

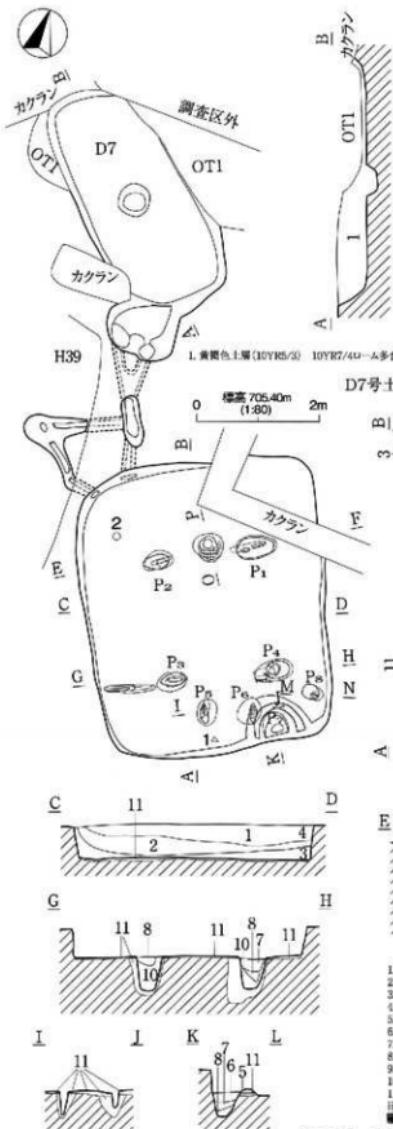
遺物は、弥生土器・土製品・石器・石製品が出土している。弥生土器には鉢(1-2)、高壺(3)、壺(4～10)、壺(11・22)の器種が認められる。鉢1は口縁部に並列する2ヶの円孔が穿たれた。2点共に内外面が赤彩される。高壺は脚と壺の連結部分の破片である。赤彩は認められない。壺は頭部に櫛描纏状文が巡らされることと共通するが、口縁部と体部上半には櫛描波状文が施されるものと、櫛描斜走文を横位羽状に施すものの2種類が存在する。壺は頭部文様帶に、11は櫛描の「T」字文、12はヘラ描の斜走文を横位羽状に多段に施す。12は外面に赤彩が施される。土製品は13の勾玉が認められる。石器・石製品は14の砥石、15の磨製石錐、16の磨石、17・18の磨・敲石、19・20の敲石、21・22の剥片が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期古に該当するものと思われる。

○H25号住居址

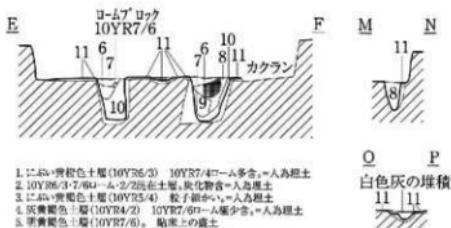
Ⅲから9グリットで検出された。H9・H19・H24・D11に切られ、H31を切る。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。N-10°-Wに長軸方位をとり、長軸長-8.70m、壁残高-0.22mの規模を有する。均等に配置されたP1～P4の4基が主柱穴である。主柱は板状を呈し、幅26 cm前後、厚10 cm大であった。周溝は有さず、炉も存在しなかつたが、擾乱や他遺構により消滅したものと思われる。南壁下中央部分に集中する掘込みは出入口に関連するものであろう。その他のピットや土坑については、本址に伴うか否かを含めその性格も判然とはしない。

遺物は弥生土器・縄文土器・土製品・石器・石製品・銅製品が出土している。弥生土器には鉢(1～4)、高壺(5～10)、壺(11



～28)、壺(29～36)、瓶(37)の器種が認められる。鉢には3のように外面口縁部に繩文を施すものや、4のような無頭蓋様のものも存在する。高环は杯部上半が後をもって屈曲し、口縁部が水平に開いた形態のものが認められる(6・7)。また、10の様に外面口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に巡らすものも認められる。要は頭部に櫛描兼状文を巡らすることは共通するが、口縁部と体部上半の文様帶には櫛描波状文を施す12～17、19・21・22と櫛描斜走文を横位羽状に施す11・18・28、口縁部には櫛描波状文、体部上半には櫛描斜走文を横位羽状に施す23、口縁部と体部に櫛描波状文を施し、体部の波状文下に櫛描斜走文を追加する27など多様なものが存在する。また、23は更に頭部兼状文に円形點付文が付加されている。壺は口縁部あるいは口唇部に文様帶を有するものが認められる。31は受口口縁の外側に櫛描波状文が施され、32は口唇部に櫛描斜走文が施される。頭部には33のように櫛描横綱文が施されるものや、36のようにヘラ描平行沈線間にヘラ描斜走文を横位羽状に施すものも認められる。瓶(37)は小型の單孔のものである。繩文土器は38の繩文が施される深鉢片が1点出土している。土製品は39の勾玉が出土した。40については時代・器種共に不明である。石器・石製品は砾石(41)、勾玉(42・47)、磨製石鐵(43)、打製石鐵(46)、打製石鐵(44)、燧石製品(45)、磨石(48・49・54)、敲石(50～53)、磨製石鐵の素材あるいは剥片(55～57)が認められる。特に注すべきは石製の勾玉42・47である。42は板状であるが、造りは丁寧で所謂「石製模造品」的なものではなく、石質も明らかに異なる。47は小型であるが翡翠製である。銅製品は劍(58・59)が2点出土している。同一個体の可能性も高い。

以上の出土遺物は、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期1期の遺物と後期Ⅲ期古の遺物が混在しているが、本址の年代は弥生時代後期Ⅲ期古と思われる。



第55図 H24号住居址(1)-D7号土坑

○H26号住居址

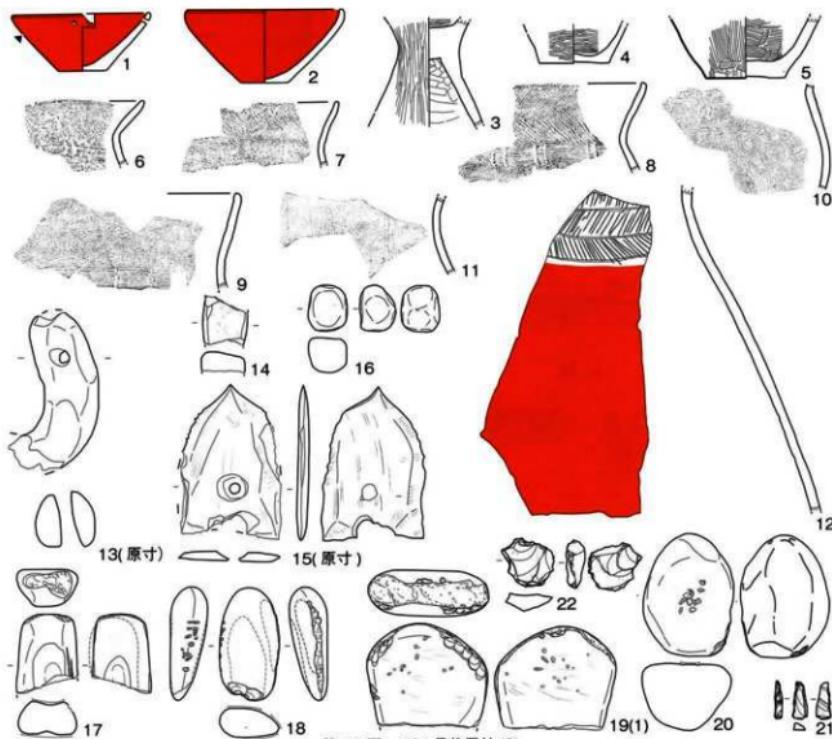
IVお3グリットで検出された。H3に切られ、H28・H30に切られる。平面形態はH3による破壊が著しく不明である。規模は短軸長-5.50m、壁残高-0.60mである。P1は本址の主柱穴であろう。P3はφ14cm大の柱痕が確認されたがP2共々用途は不明である。P3上に置かれていた石はカマドの天井石であろう。周溝は東壁下にのみ認められた。カマドは北壁の中央に構築されており、地山削出しによる袖と、これを被覆した僅かな粘土が残されていた。

出土遺物は土師器、須恵器、石器・石製品、鉄器が認められる。土師器には壺(1~7)、甕(9~10)の器種がある。壺はE1・E4・D2・G1の形態が認められる。E4形態の4は北武藏型の壺である。1・5・6・7は内面黒色処理が施される。須恵器は8の壺蓋が1点出土している。口縁端部は丸い。口縁部と天井部の境には太めの沈線が巡り稜を形成している。甕9は長胴、10は胴張である。10の口縁端部は明らかに須恵器を模倣している。石器は11が磨・敲石、12~14が敲石である。鉄器は15の角釘が1本出土した。

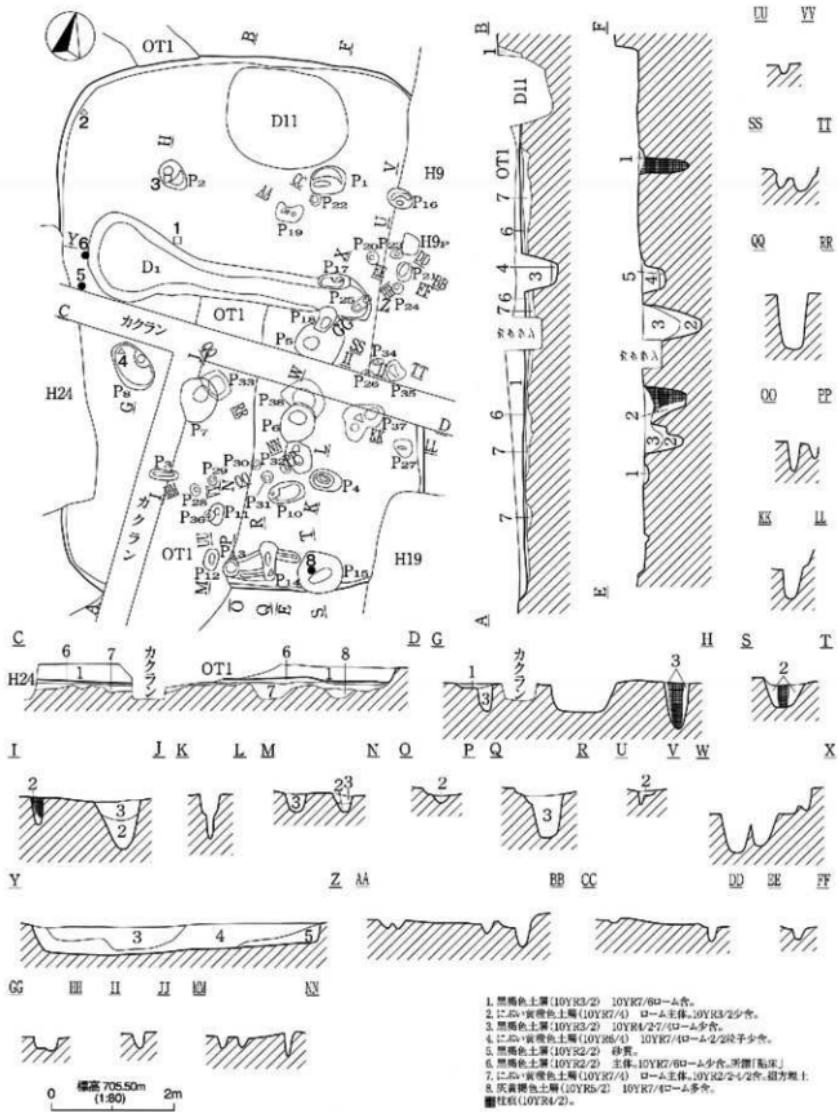
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期-6世紀中葉~7世紀初頭の時期が比定される。

○H27号住居址

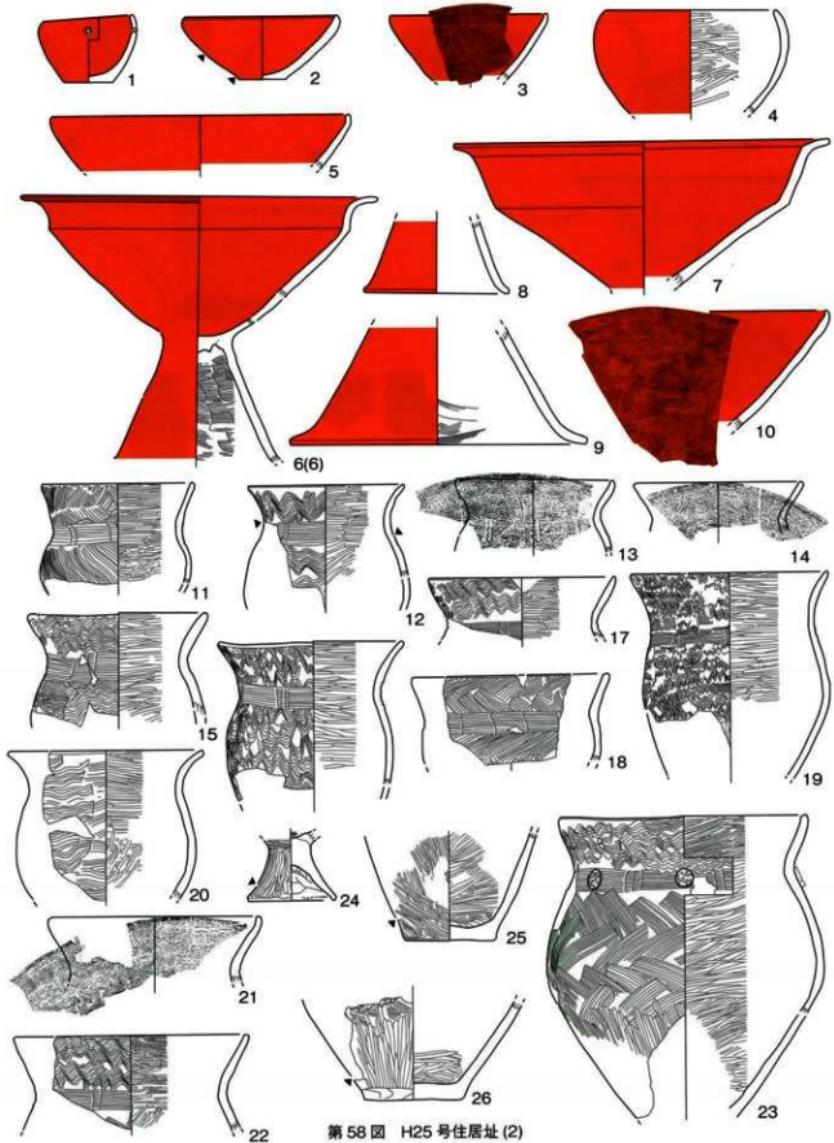
IVけ3グリットで検出された。H13に切られ、H33・H34・H38を切る。平面形態は隅丸方形である。長軸方位をN-60°~Wにとる。規模は長軸長-5.39m、短軸長5.75m、壁残高-0.38mである。均等に配置されるP1~P4の4基のピッ



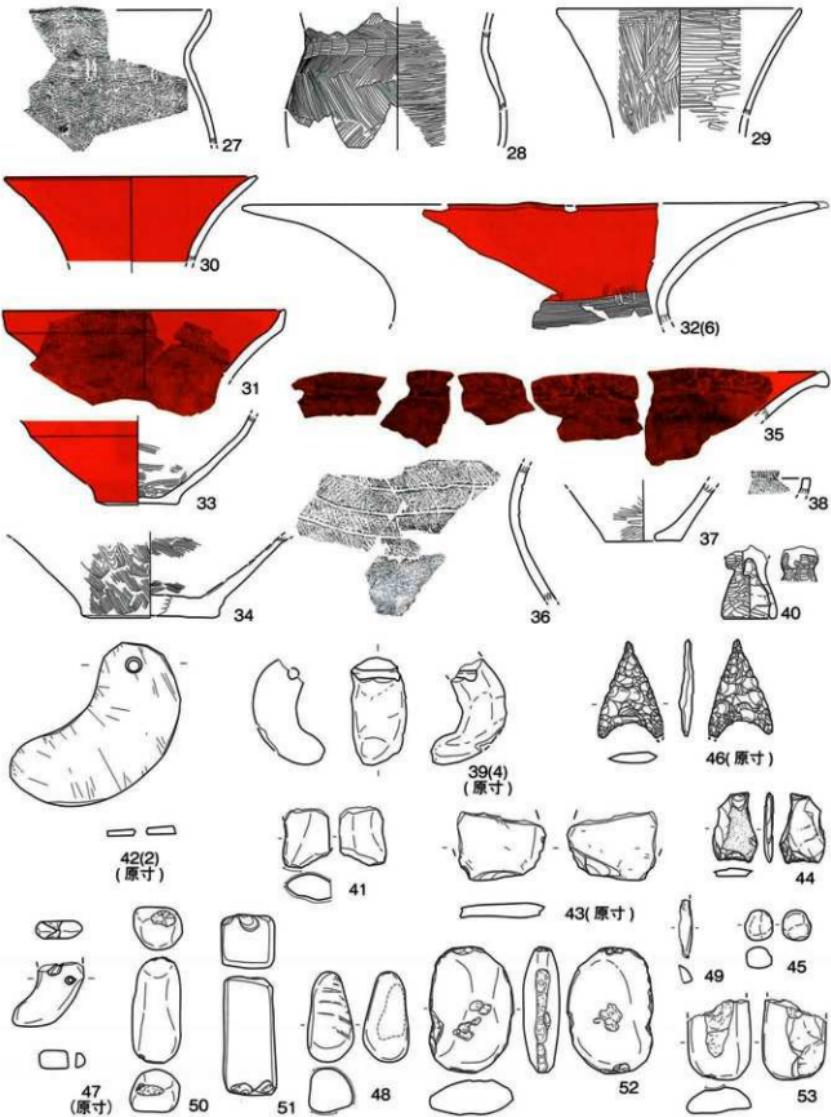
第56図 H24号住居址(2)



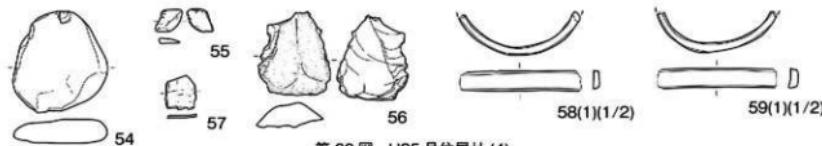
第57図 H25号住居址(1)



第58図 H25号住居址 (2)



第59図 H25号住居址(3)

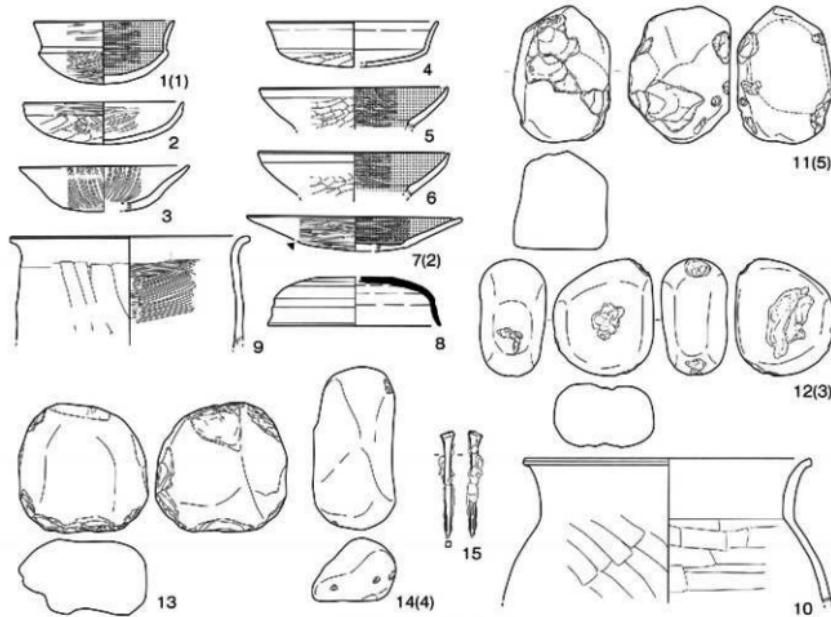


第60図 H25号住居址(4)

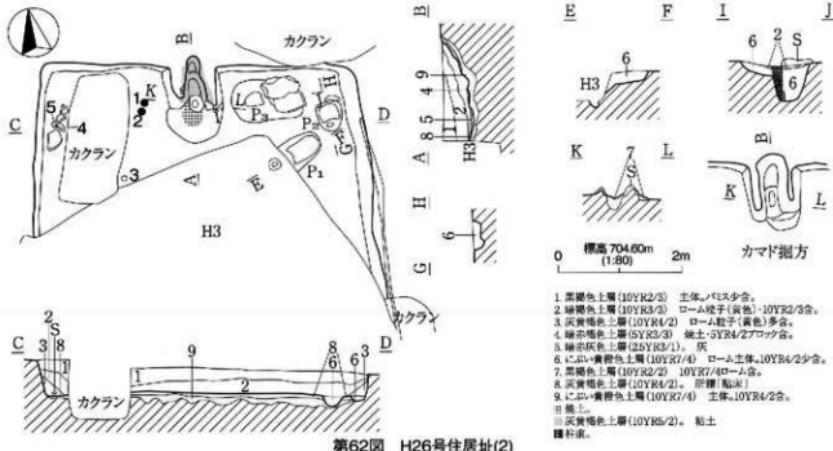
トが主柱穴である。主柱は約24 cm前後の規模であった。壁下には周溝が巡り、4基の主柱に向かい所謂「間仕切溝」が延びている。カマドは西壁の中央に石芯を粘土で被覆して構築されていた。カマドの南脇には貯藏穴が認められた。また、カマドと対峙する東壁下中央には出入口施設と思われるP6と周溝から延びる溝が認められた。

遺物は土師器、須恵器、弥生土器、土製品、石器・石製品が出土している。土師器には壺(1～8)、高杯(9～11)、甕(12～23)、壺(23～26)、瓶(27～31)、手握(32)の器種が認められる。壺はA1、G1の2形態が存在する。高杯は暗文状ヘラミガキが頗著で、杯部に縫を有する。甕は鉢とした方が良いものも含まれる。法量的には小・中・大に分かれる。器形は体部に最大径を有するもので、所謂「長胴甕」は認められない。壺との区別は器面調整における、ヘラミガキと、火にかけて使用したか否かによる。甕も壺同様に、法量的には小・中・大に分かれる。底部は、基本的に全開であるが、30のみ単孔である。31は瓶としては見慣れない器形である。須恵器は縫が1点出土している。土製品は勾玉が1点出土した。弥生土器は頭部に櫛指摩状文、口縁部と体部に櫛指波状文が施される甕、口縁部に櫛指は繩文が施される壺と頭部にヘラ描斜走文を横羽状に配置する壺が出土している。石器・石製品は38の磨石、37の敲石、40の磨製石器用の石材が出土している。

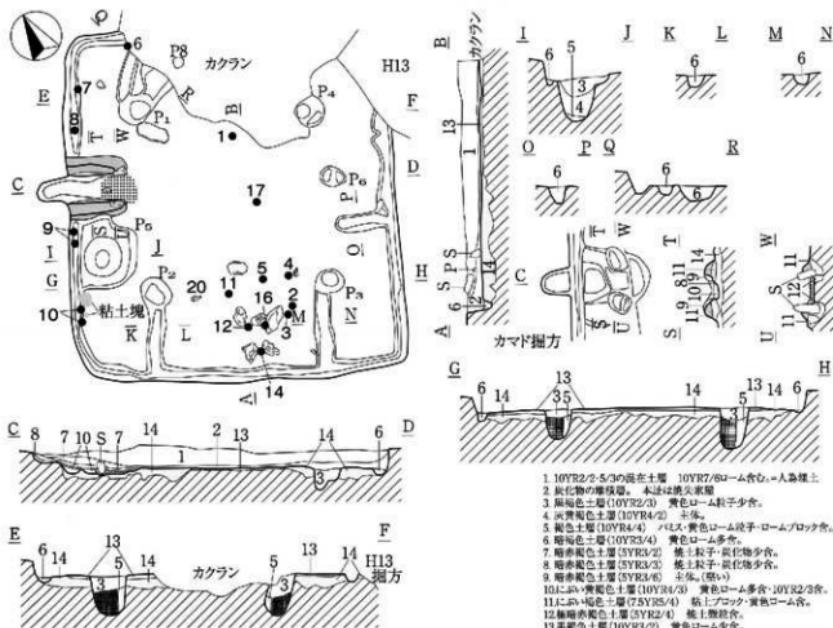
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代1期～5世紀後半～6世紀初頭の時期が比定される。



第61図 H26号住居址(1)

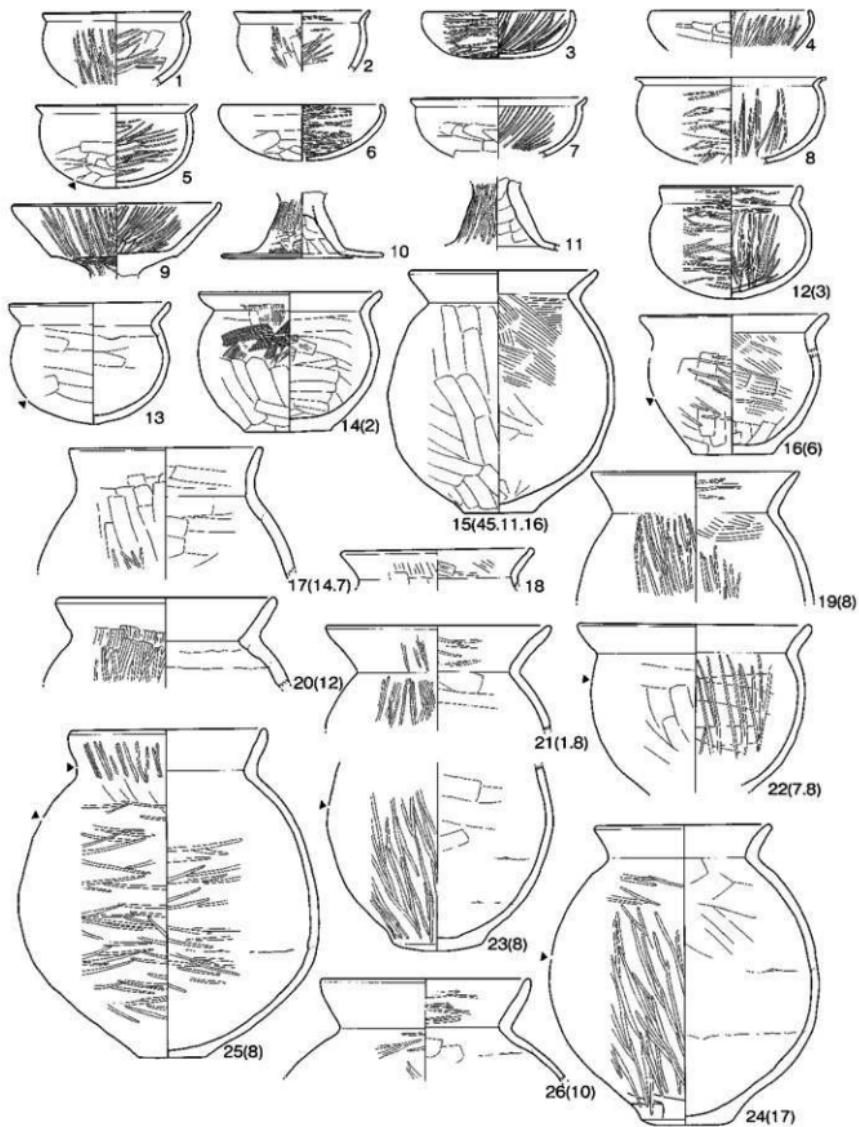


第62図 H26号住居址(2)

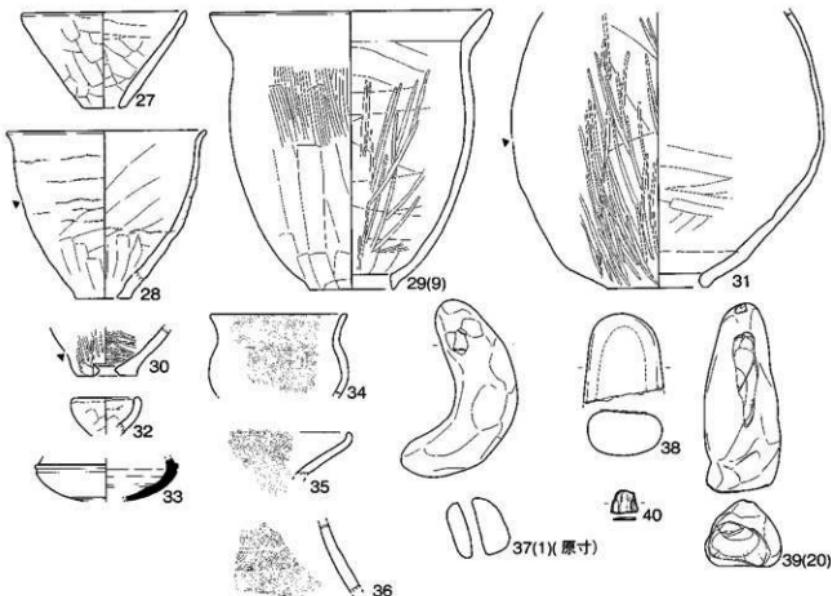


第63図 H27号住居址(1)

1. 黒褐色土層 (10YR2/3) 士体・パミス少含。
2. 黑褐色土層 (10YR2/3) ローム吹子・骨質: 10YR2/3含。
3. 黑褐色土層 (10YR2/3) 黄色ローム吹子少含。
4. 黑褐色土層 (SYR2/3) 士体・パミス少含。
5. 黑褐色土層 (2SYR2/1) 士体。
6. にわく黒褐色土層 (10YR2/2) ローム・士体・10YR4/2少含。
7. 黑褐色土層 (10YR2/2) 10YR7/2含。
8. 黑褐色土層 (10YR4/2) [壁際・粘土]。
9. にわく黒褐色土層 (10YR7/4) 士体・10YR4/2含。
10. 粘土。
11. 黄褐色土層 (10YR5/2) 粘土。



第 64 図 H27 号住居址 (2)



第 65 図 H27 号住居址 (3)

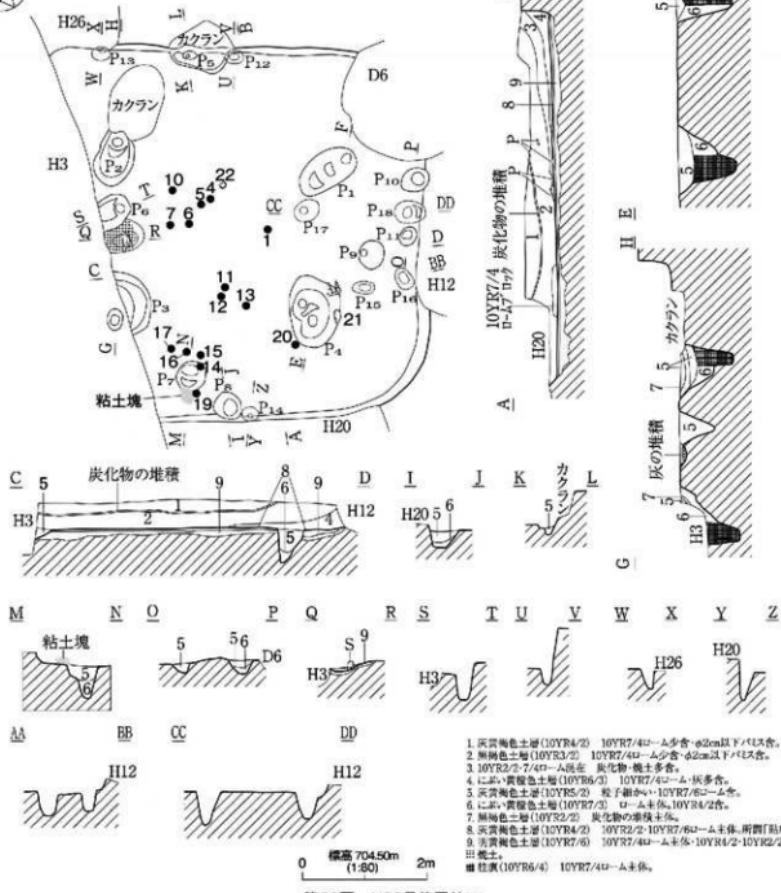
○H28 号住居址

IV 4 グリットで検出された。H3・H12・H20・H26・D6 に切られる。他遺構による破壊により全容は不明である。短軸長 - 6.1m、壁残高 - 0.45m の規模を有する、隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。主柱穴は P1 ~ P4 の 4 基であり、均等に配置されている。主柱は φ 20 cm 前後の規模である。P1・P4 の形態から本址は建巻が行われたものと思われる。東壁下の細方で検出された P9・P10 は出入口施設と思われる。周溝は有さない。炉は P2 と P3 の中间に構築された地焼がで、楕円形の平面形態を呈する。

遺物は弥生土器、縄文土器、土製品、石器・石製品、鉄器が出土している。弥生土器には鉢 (1 ~ 7)、台付鉢 (8)、高杯 (9 ~ 14)、壺 (15 ~ 52)、無頸壺 (53 ~ 54)、壺 (55 ~ 81) の器種が認められる。鉢は赤彩が施されるものと、されないものが存在するが、されないものは総じて法量が大きい。高杯は赤彩が施され、外面口縁部に櫛描波状文を巡らすものも存在する。環部に稜を有するものは皆無である。壺は頸部櫛描縦状文は共通するが、口縁部と体部には櫛描波状文を施すものと、櫛描斜走文を横位羽状に施すもの、また口縁部は櫛描波状文、体部は櫛描斜走文の横位羽状のもの等が存在する。49 の様な円形貼付文や上田市「和手遺跡」に特徴的な頸部に櫛描縦状文の代わりに櫛描「T」字文を施すもの (50・51) も認められた。無頸壺は 2 点共に内外面に赤彩が施されている。壺は赤彩を基本とするが、施されないものも存在する。口縁部文様帶を有するもの (57・59・71 ~ 73)、円形貼付文が付加されるもの (71・72・74・75) も存在する。頸部文様帶にはヘラ描、あるいは櫛描の斜走文を横位羽状に展開するものや、ヘラ描の鋸歯文が多く、櫛描横線文や「T」字文を施すものは (76 ~ 81) 少数である。体部下半の明瞭な後も本達である。縄文土器は 82 の楕円押型文が施される深鉢片が 1 点出土している。土製品は 83 の勾玉が 1 点出土した。石器・石製品は砥石 (84 ~ 86)、打製石斧 (87)、磨製石斧 (88 ~ 89)、磨製石鎌 (91)、打製石鎌 (92)、スクレイバー (90)、編み物石 (93 ~ 95)、磨石 (96 ~ 100)、磨・敲石 (101)、敲石 (102 ~ 108)、素材・剥片 (109 ~ 113) の器種が認められる。鉄器は (113) の刃子が 1 点出土している。

以上の出土遺物から、本址の時期は小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」) の弥生時代後期 II 期と思われる。

N



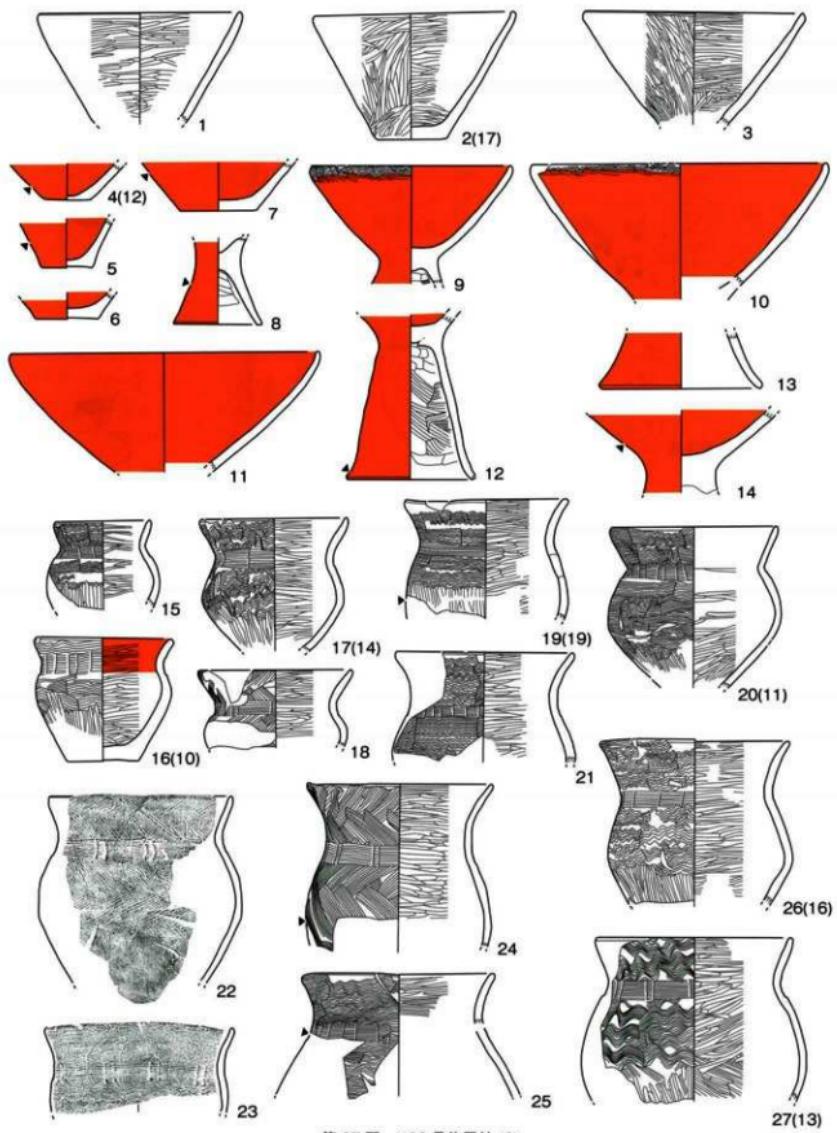
第66図 H28号住居址(1)

○H29号住居址

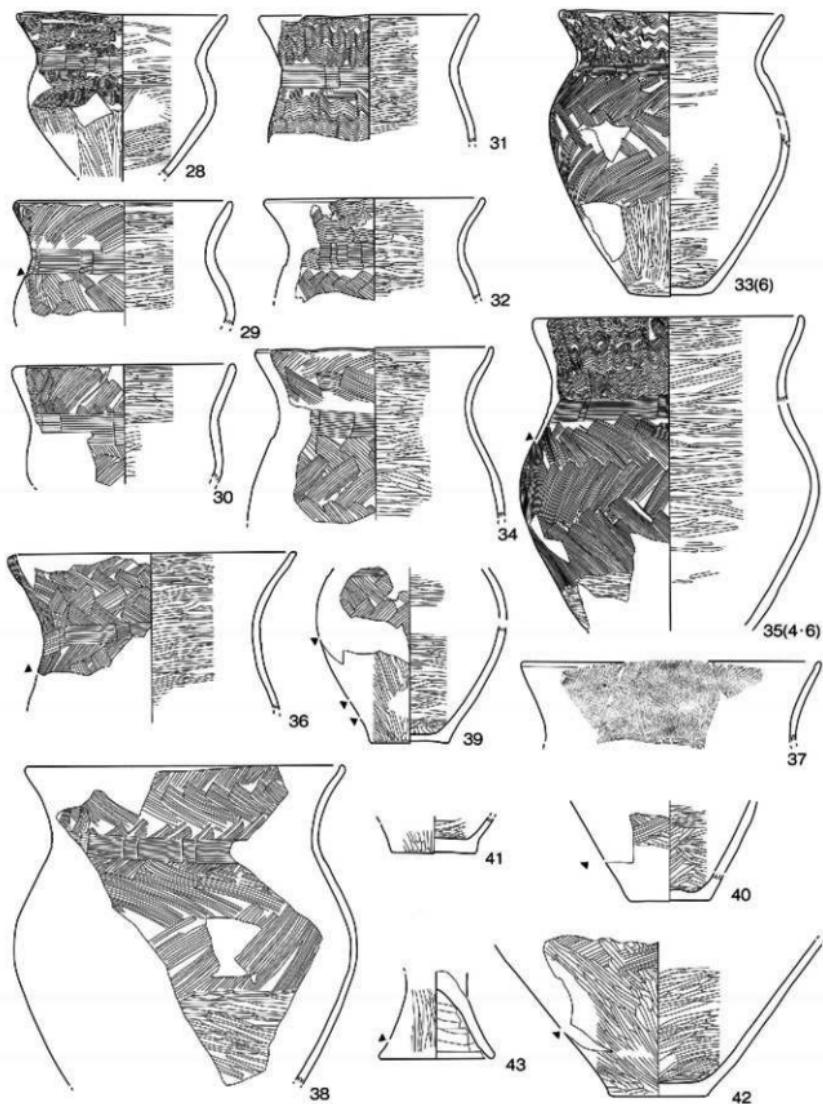
Vあ7グリットで検出された。カマドと思われる石と焼上が確認された。そのため、規模・形態等は不明である。

遺物は土師器と石器が出土している。土師器は壺(1~4)、甕(5~7)の器種が認められる。壺は全て内面に黒色処理が施される。口縁部からの切離方法は1・2が回転系切、4はヘラである。甕は全て武藏甕であり、口縁部は「コ」字である。石器は敲石が1点出土している。

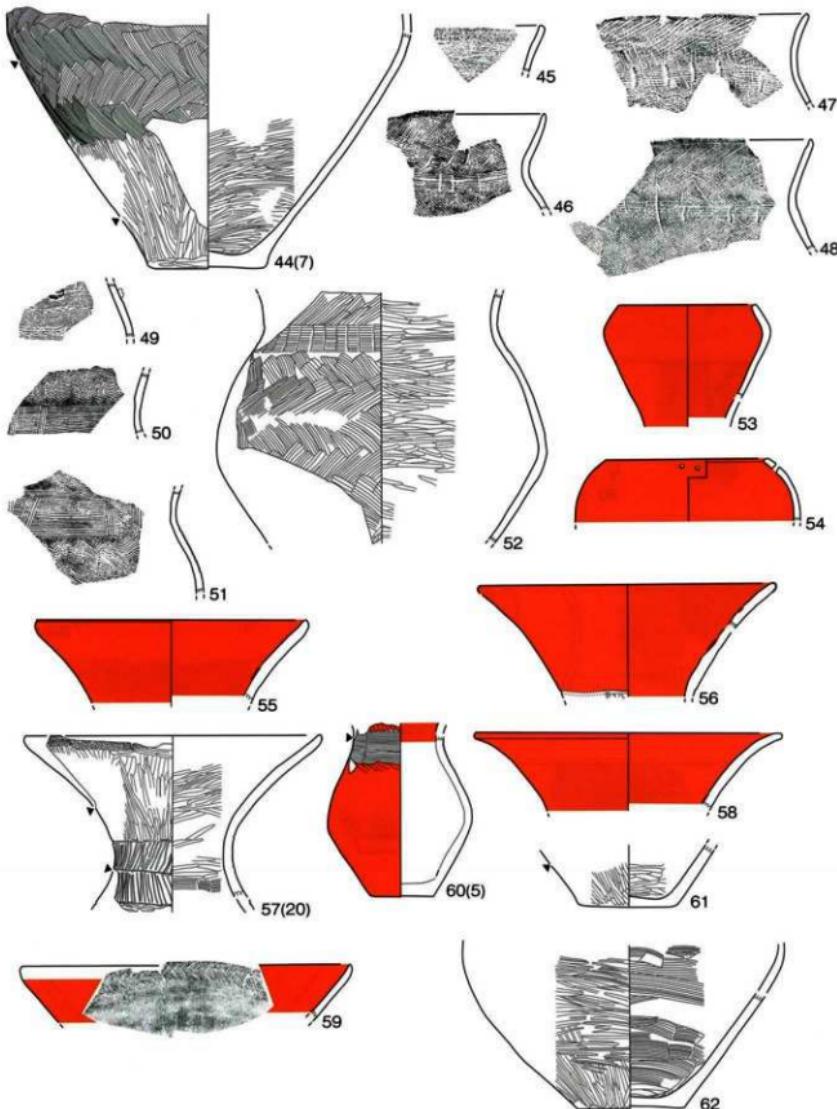
以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の平安時代V期-9世紀前半の時期が比定される。



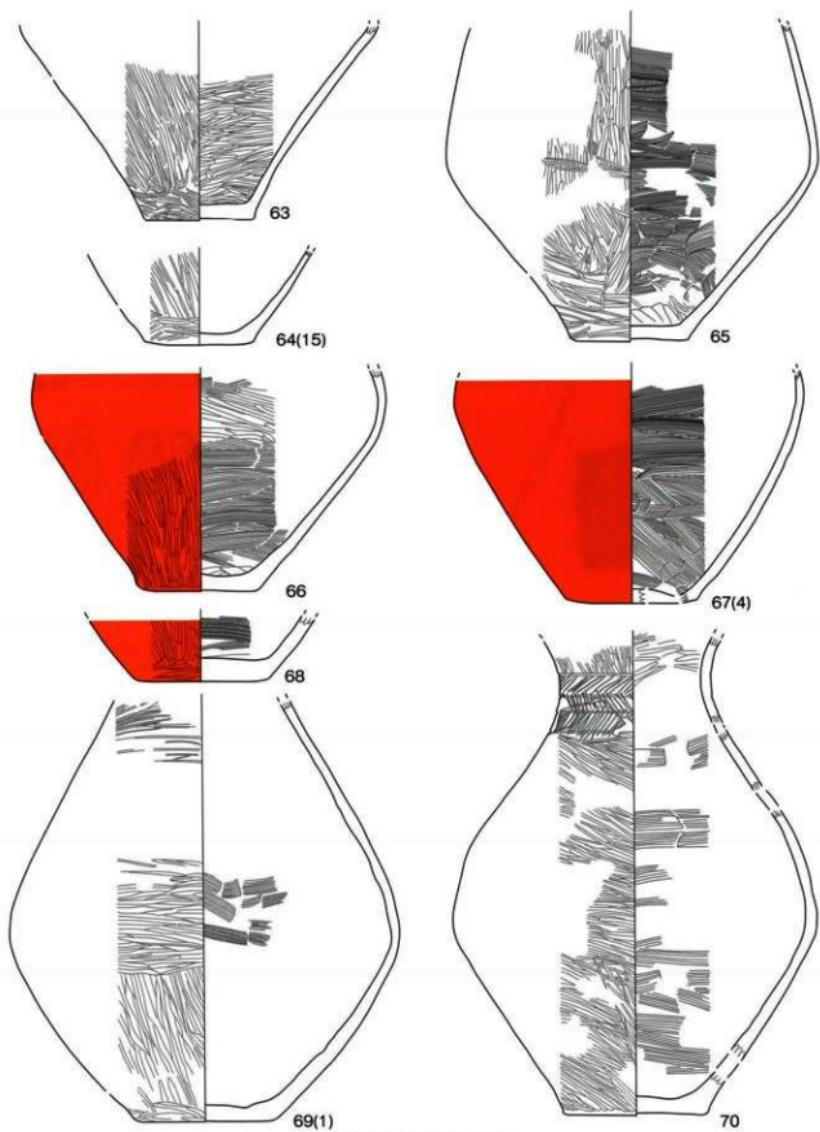
第67図 H28号住居址(2)



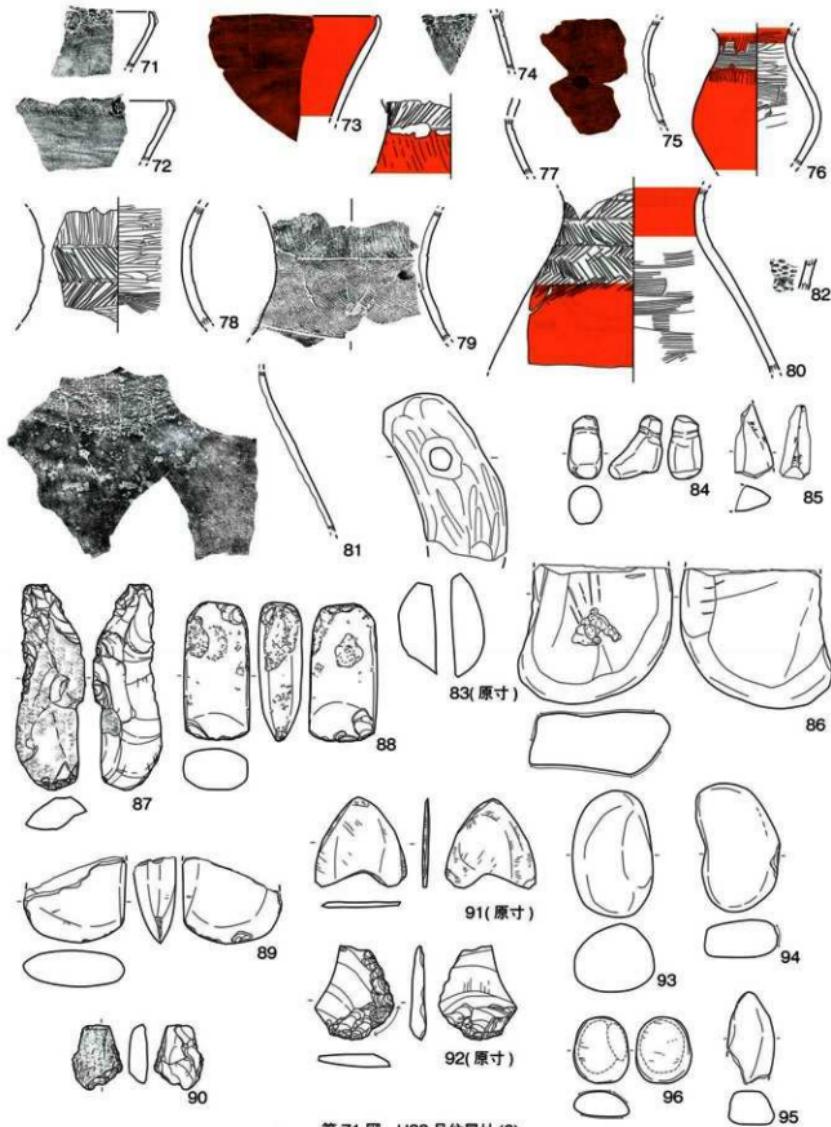
第68図 H28号住居址(3)



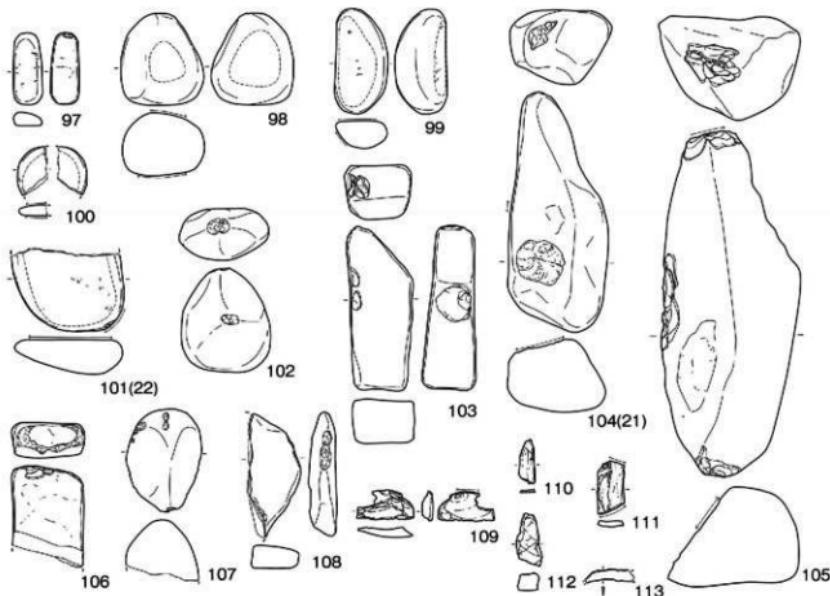
第69図 H28号住居址(4)



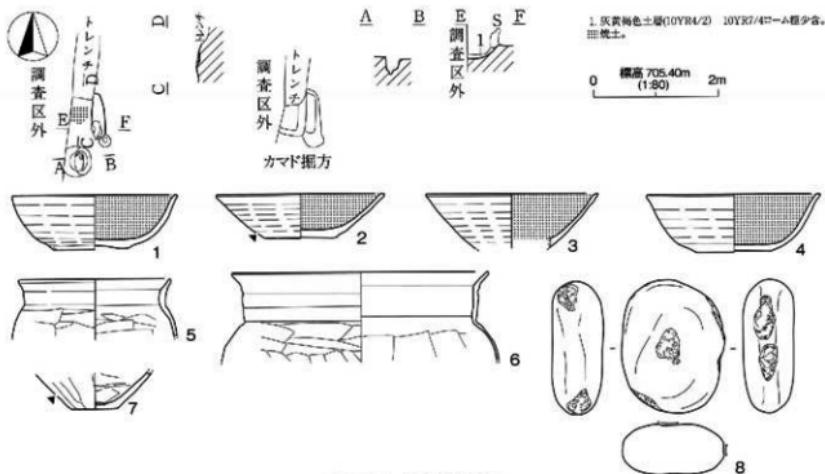
第 70 図 H28 号住居址 (5)



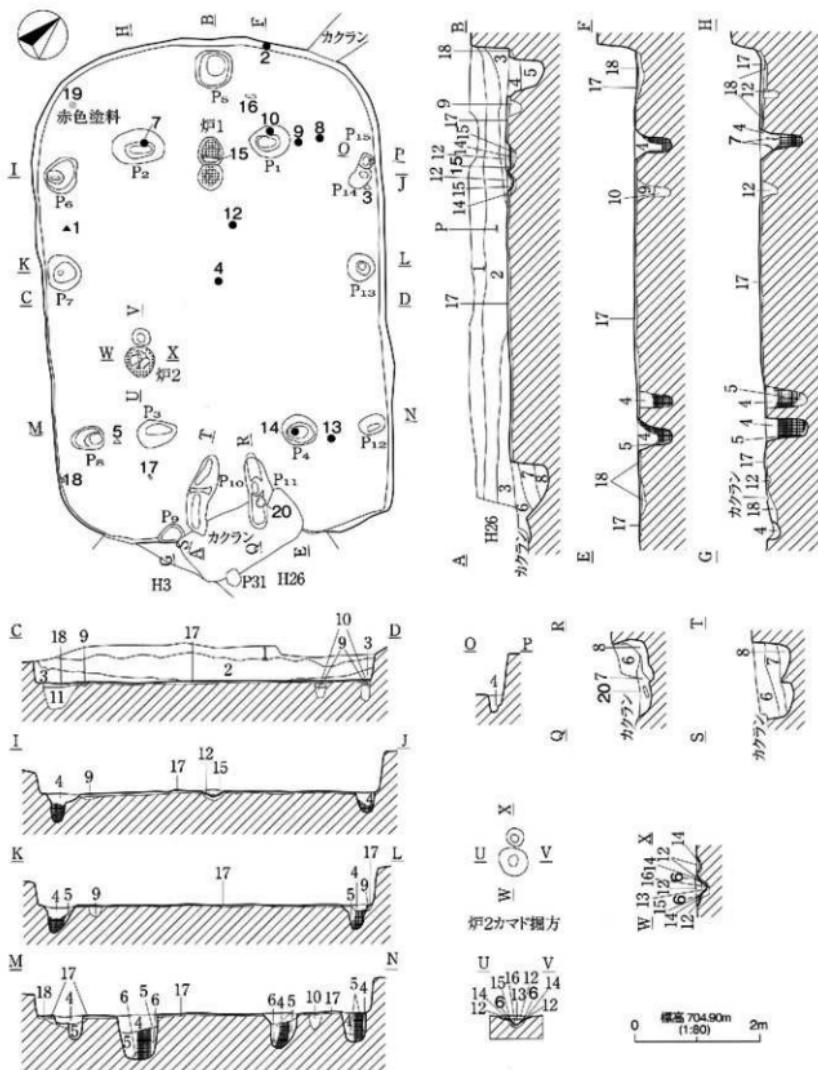
第71図 H28号住居址(6)



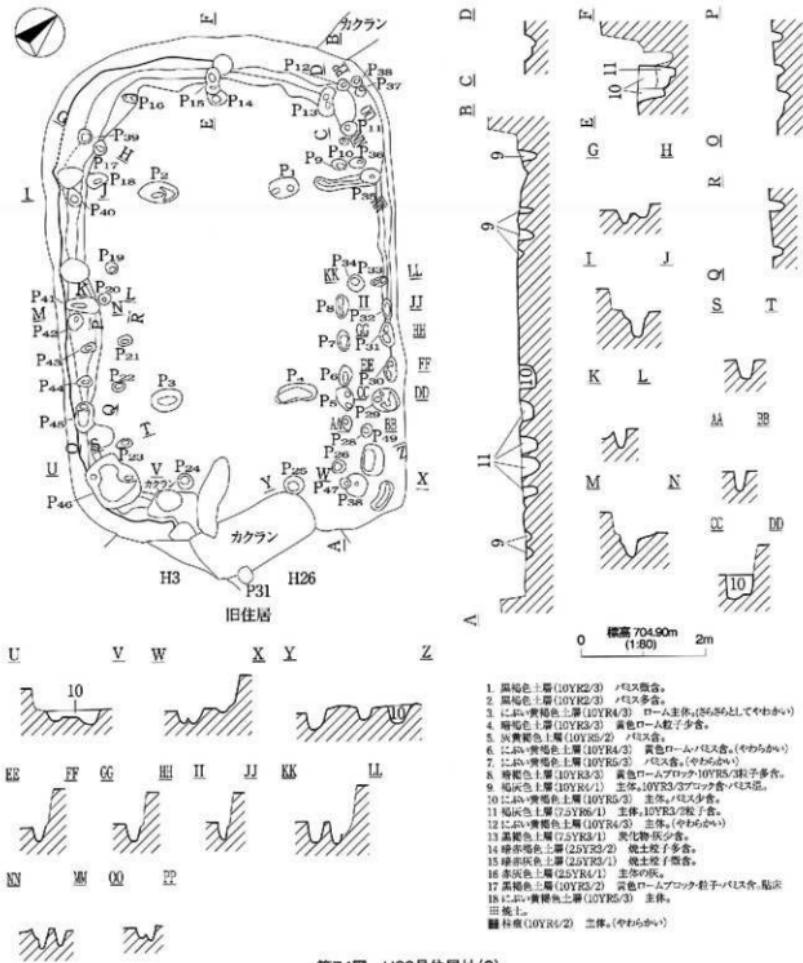
第72図 H28号住居址(7)



第73図 H29号住居址



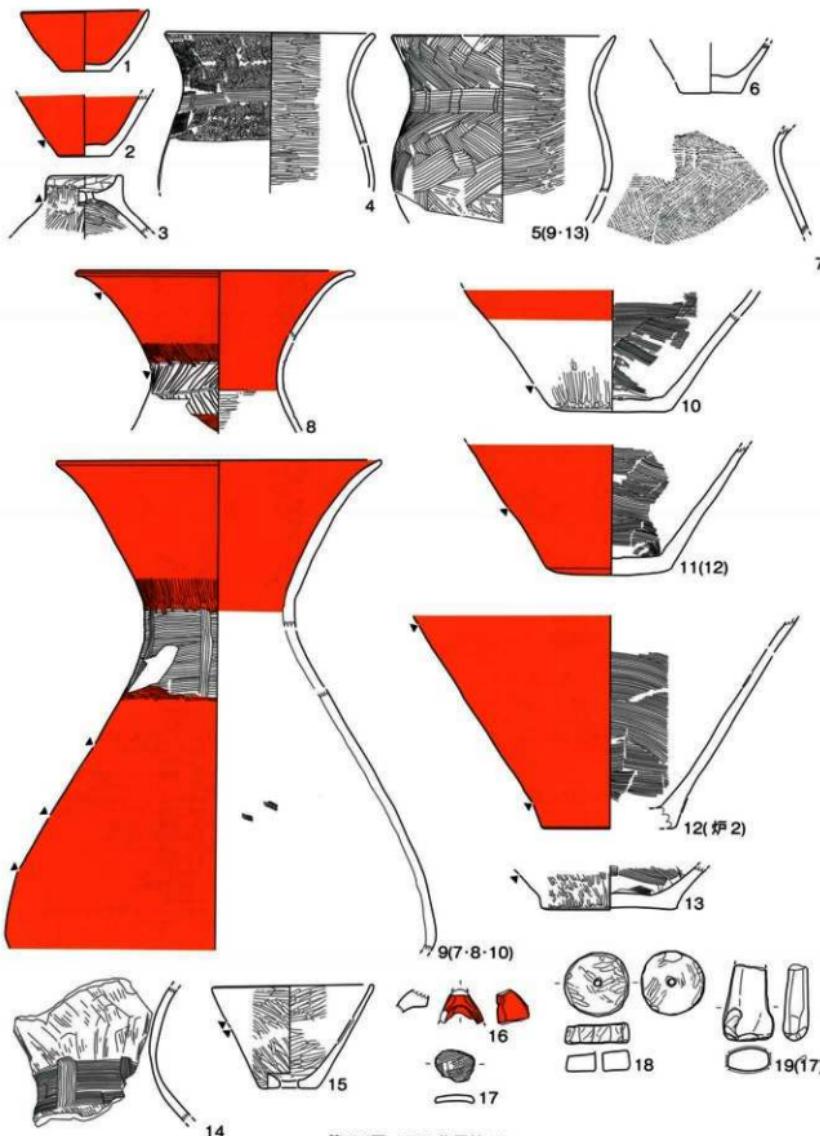
第73図 H30号住居址(1)



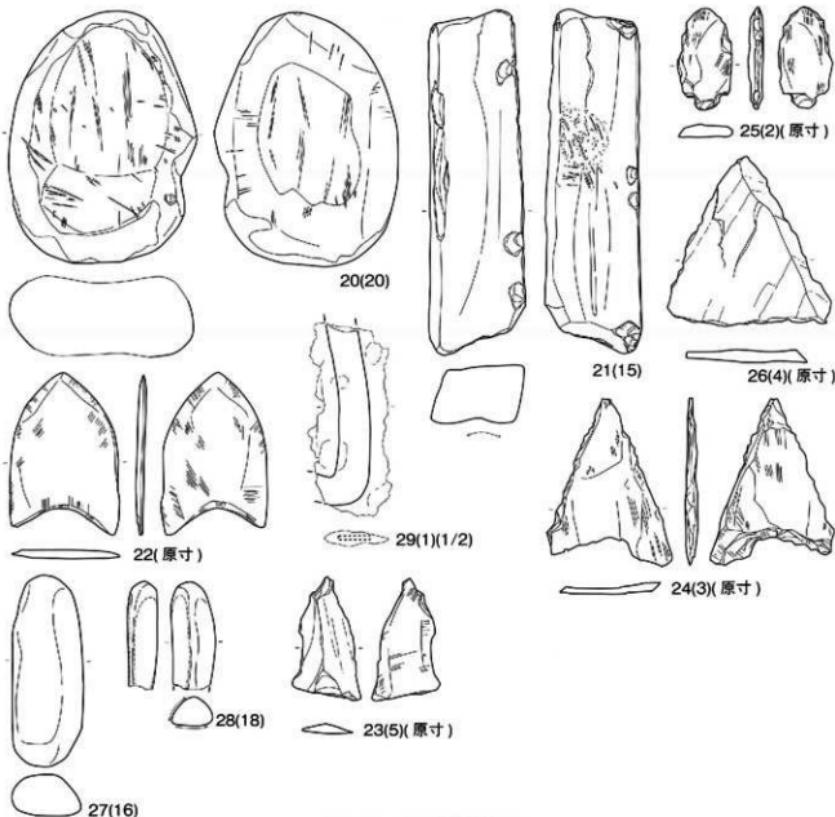
第74図 H30号住居址(2)

○H30号住居址

IVおよびVグリッドで検出された。H3・H26に切られる。隅丸長方形といふよりは、小判型の平面形態を呈する。N-46°-Wに長軸方位をとり、長軸長-8.18m、短軸長-5.6m、壁残高-0.6m、面積-31.6 m²の規模を有する。均等に配置されたP1～P4の4基が主柱穴であり、長辺である東西壁下に均等配置されたP6～P8、P12～P14の6基は所謂「襠柱穴」である。このことは、本址の上層が「ふきおろし」の状態ではなく、壁が立ち上がる外観であった可能性を示唆する。



第74図 H30住居址(3)

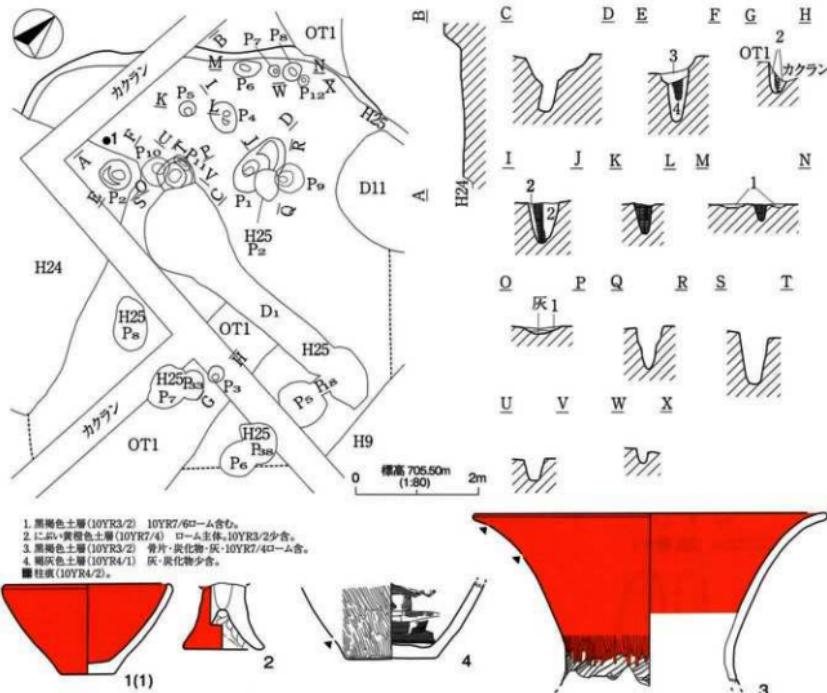


第 75 図 H30 号住居址 (4)

南壁下に對で構築された不整形な楕円形ピット - P10・P11 は、出入口施設である。炉は P1・P2 間と、P3 の北側の 2 カ所に構築されていた。前者を炉 1、後者を炉 2 とすると炉 1 は 2 基のピットが「8」字状に連結した形態であり、炉石を伴う。炉 2 は円形のピット内に土器を埋設したものであった。本址は堀方調査により、拡張されて建替が行われたことが明らかとなった。規模的には長軸長で 50 cm 前後小さく、壁下には周溝を有している。

遺物は弥生土器、土製品、石器、石製品、鐵器が出土している。弥生土器には鉢 (1~2)、蓋 (3)、甕 (4~7)、壺 (8~14)、瓶 (15) の器種が認められる。甕は頭部衛描塵状文は共通するが、口縁部と体部上半は櫛指波状文か櫛指斜走文の横位羽状の 2 種類が認められる。壺は赤彩を基本とし、頸部には櫛描「T」字文か、ヘラ描斜走文を横位羽状に展開する。土製品は 16 の匙、17 の土器片円盤、18 の土製円盤が認められる。石器・石製品は砾石 (19)、台石 (20・21)、磨製石鏡あるいはその未製品 (22~26)、礪物石 (27)、磨石 (28) が認められる。鐵器は器種不明の 29 が 1 点出土した。

以上の出土遺物から、本址の時期は小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」) の弥生時代後期Ⅲ期と思われる。



第76図 H31号住居址

Ⅲき9グリットで検出された。H24・H25に切られるため、全容は不明である。壁残高-0.28mの規模である。P1・P2は主柱穴と思われる。周溝は認められず、炉等も調査範囲には存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。器種的には内外面に赤彩が施される鉢（1）、外面に赤彩が施された高杯の脚（2）、頸部にヘラ描斜走文を横位羽状に展開すると思われる外面赤彩の壺口縁部（3）、残存部無彩の壺底部（4）が認められる。

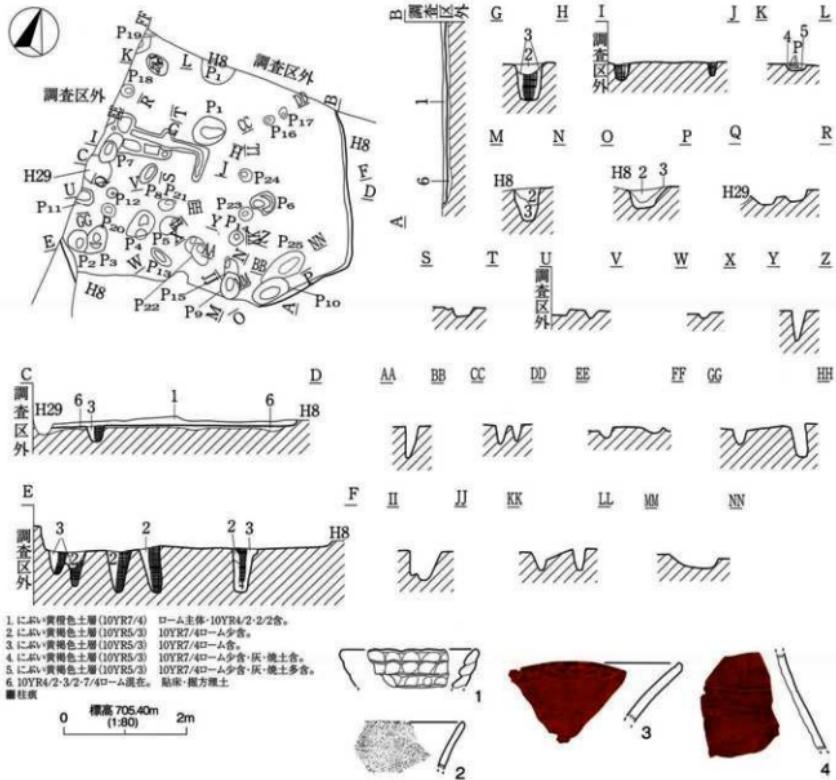
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。

○H32号住居址

Ⅲき8グリットで検出された。H8号住居址に切られる。北・西方向に調査区外に延びるため全容は不明である。壁残高-0.1mの規模である。P4・P6は主柱穴の可能性が高いが、判然としない。床面、堀方から検出された計25基のビットの性格は不明である。周溝は有さず、調査範囲にはカマド、炉等は存在しなかった。

遺物は弥生土器が出土している。1は輪積痕を残す鉢である。同様な土器は佐久市内の複数の遺跡で検出されており、製作途中の未製品ではなく、使用目的による制約を受けこの様な形態を呈しているものと思われる。2は壺の口縁部片であり、横位斜走文を横位羽状に展開している。3・4は赤彩が施される壺である。5は口縁部片であり、口縁部に横位斜走文が施される。4は頭部片である。ヘラ状工具による平行沈線間に斜走文が施される。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年（1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」）の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。



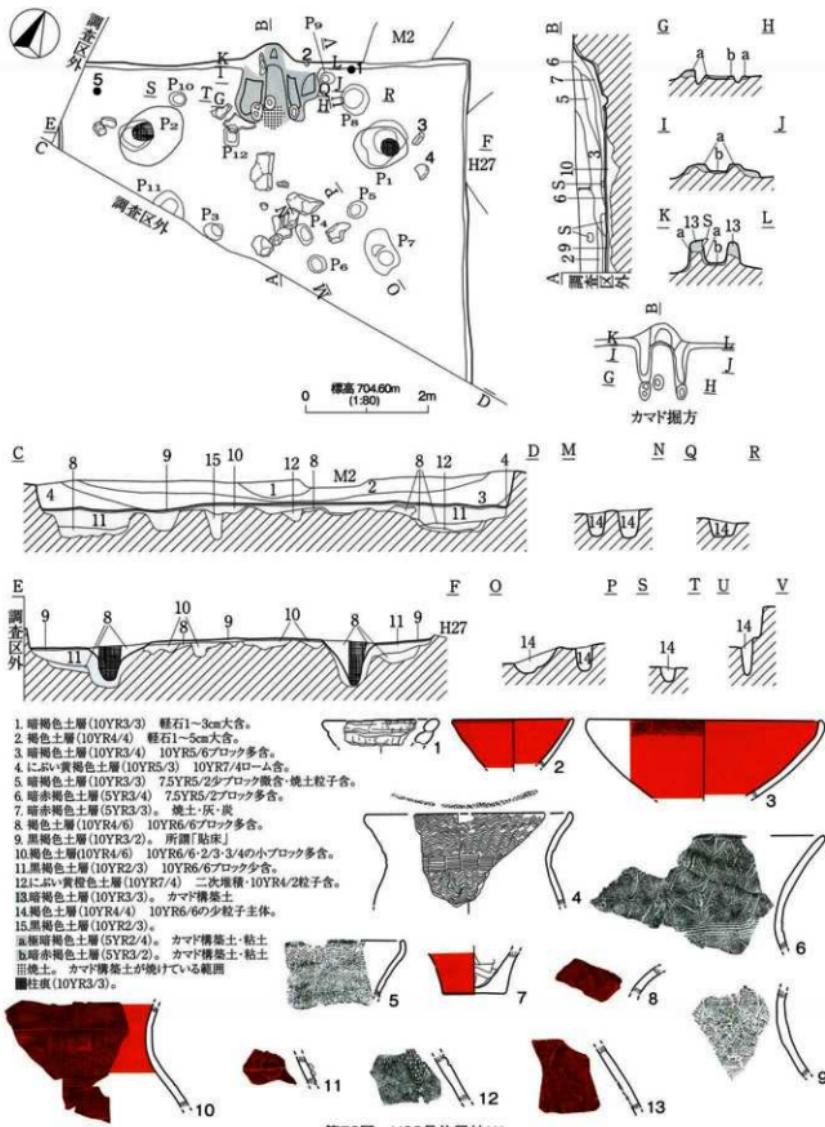
第77図 H32号住居址

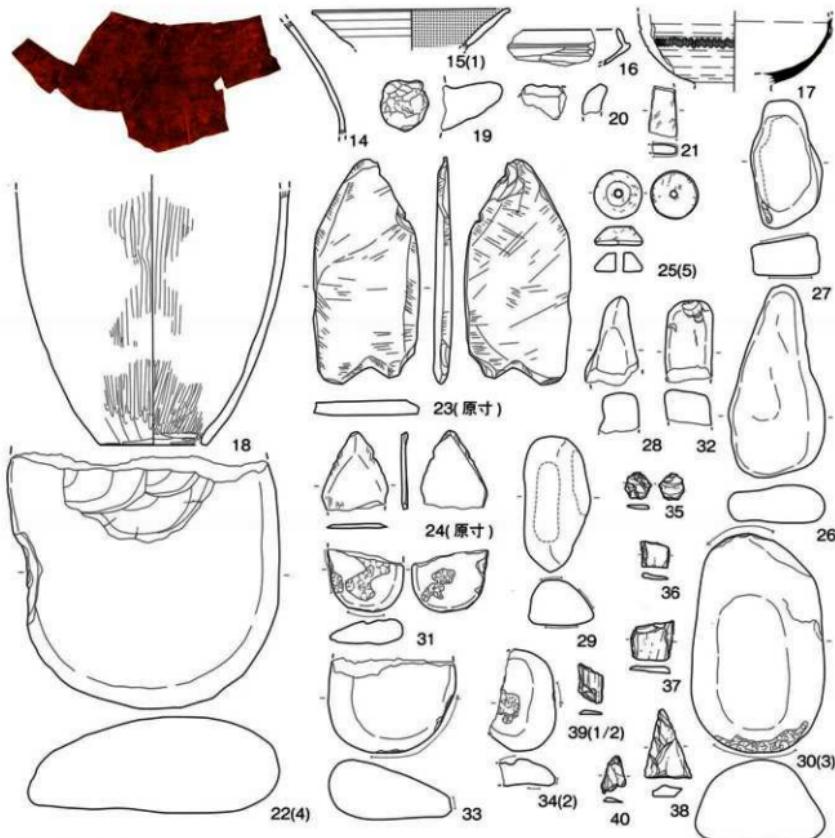
OH33号住居址

IVに3グリッドで検出された。H27に切られ、H3を切る。南方向に調査区外に延びるため全容は不明であるが、隅は丸くなく、直角である。短軸長-6.65m、壁残高-0.6mの規模を有する。主柱穴は4基が均等配置されるものと思われ、P1-P2が該当する。主柱の規模はφ30 cm前後である。カマドは、北壁中央に所謂「地山削出」による袖の先端に石を立て、これに天井石を架け粘土で被覆していたものと推測される。カマド前方の床面上に散乱していた石はカマドの構築材であろう。周溝は有さない。

遺物は弥生土器(1~14)、土師器(15~16·18~19)、須恵器(17)、土製品(20)、石器・石製品(21~40)が出土している。弥生土器は本来、H34号住居址に伴うものと思われる。器種的には鉢(1~3)、壺(4~6)、壺(7~14)が認められる。土師器には壺(15~16)、瓶(18~19)の器種が認められる。壺の形態はD2·F3である。瓶は取手と底部全体が開口する大型のものである。須恵器は体部に横描波状文が施される高壺が1点出土している。土製品は羽口片が1点出土した。石器・石製品は砥石(21)、台石(22)、磨製石錐(23~24)、筋錐車(25)、研磨物石(26)、磨石(27~29)、敲石(30~34)、素材・剥片(35~40)の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址の年代は、聖原遺跡の時期区分の古墳時代Ⅲ期-6世紀中葉から7世紀初頭の時期が比定される。





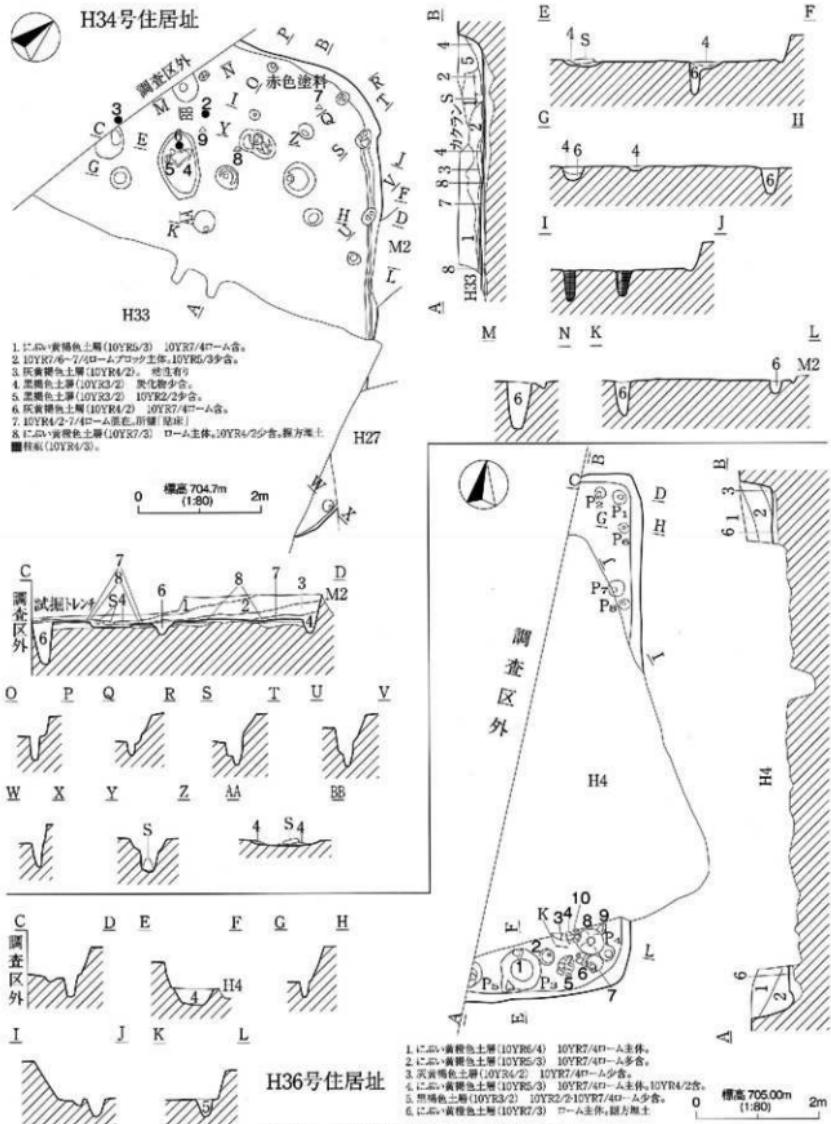
OH34号住居址

Ⅳa 3グリットで検出された。H33-M2に切られる。西方向の調査区外に延びる。前記理由により、全容は不明である。壁残高0.4mの規模である。P1・P2は主柱穴の可能性が高いが、判然としない。東壁下の一部には周溝が巡る。調査範囲内には炉は存在しなかった。

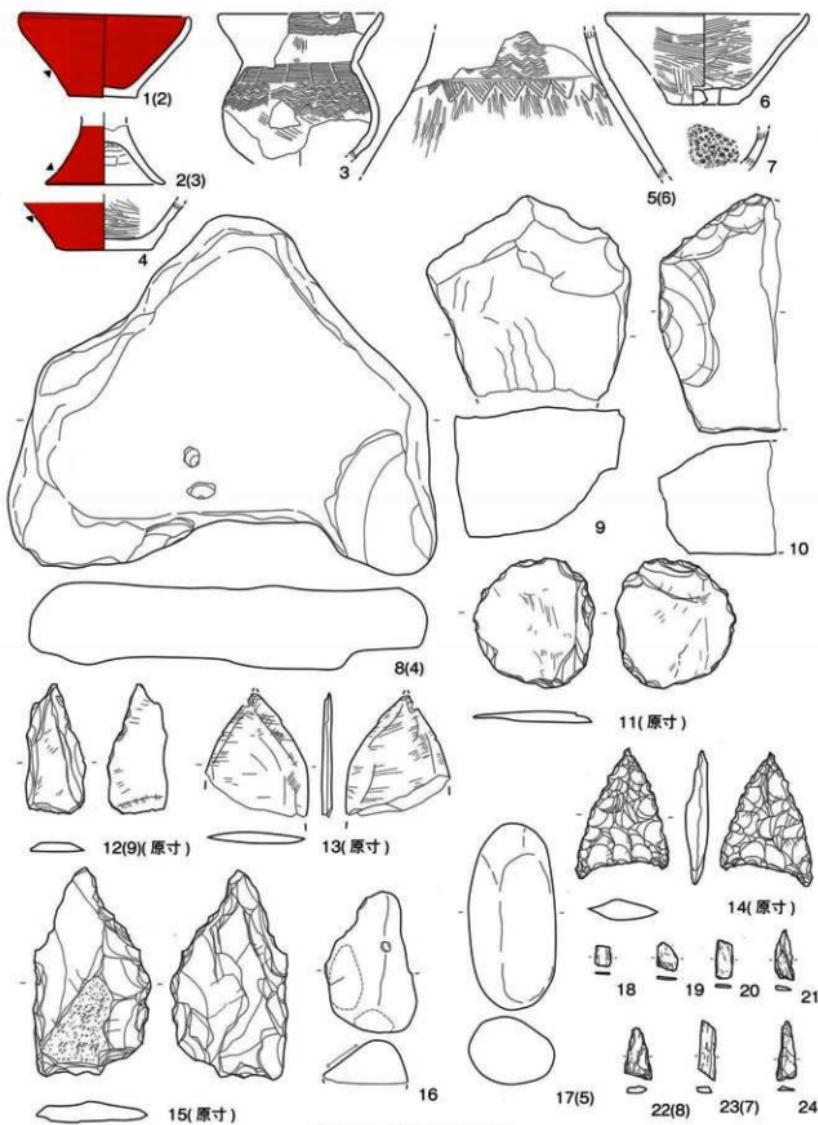
遺物は弥生土器(1~6)、縄文土器(7)、石器・石製品(8~24)が出土している。弥生土器には内外面赤彩の鉢(1)、脚内部を陥き赤彩される高壺(2)、頸部に横描波状文、体部に横描波状文、口縁部に1条の横描波状文を巡らす壺(3)、外面赤彩が施される壺底部片(4)、頸部のヘラ描平行沈線間に横描波状文を充填し、その下に内部にヘラ描斜走文が充填される、ヘラ描鋸歯文が施される壺(5)、鉢形で底部に単孔を有する瓶(6)の器種が認められる。縄文土器は横円押型文が施される深鉢片が1点出土した。石器・石製品は石製円盤(11)、磨製石錐及びその未製品(12・13・15)、打製石錐(14)、磨石(16・17)、素材・剥片(18~24)の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅰ期に該当するものと思われる。

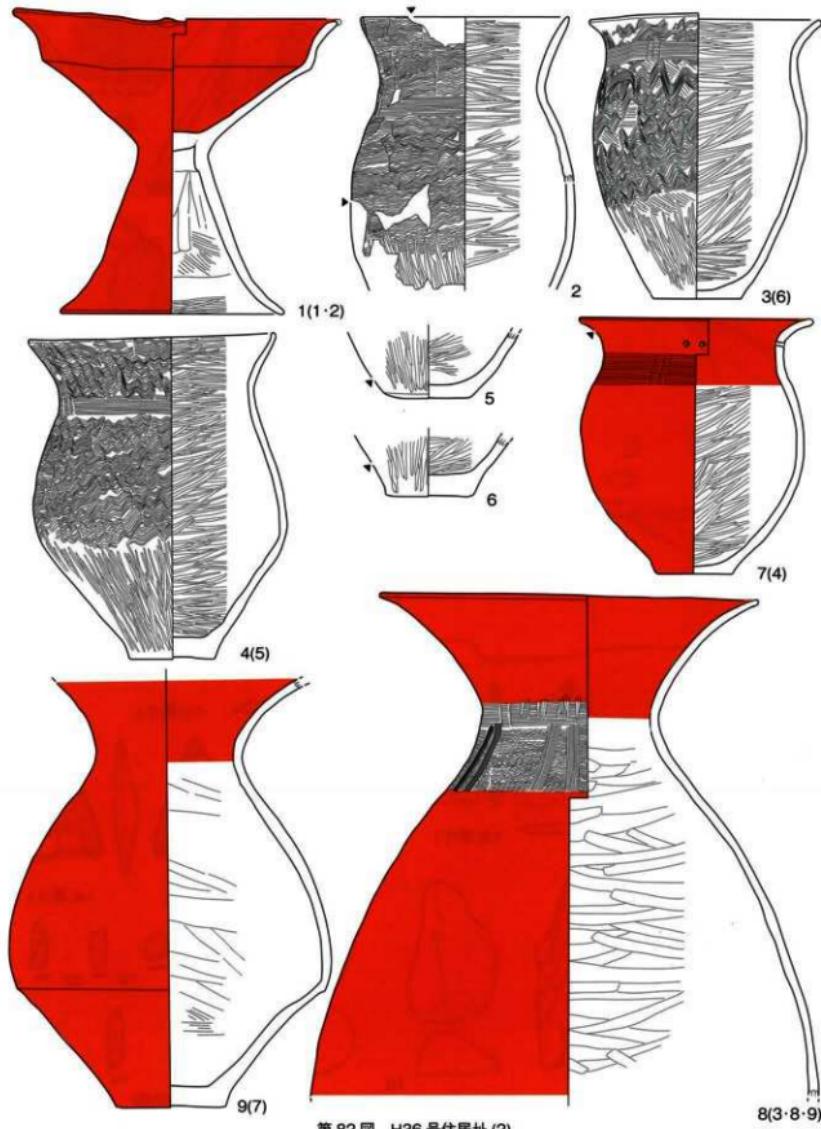
第79図 H33号住居址(2)



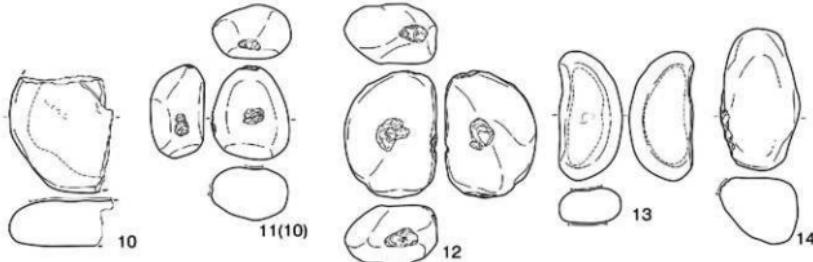
第80図 H34号住居址(1)-H36号住居址(1)



第 81 図 H34 号住居址 (2)



第 82 図 H36 号住居址 (2)



第83図 H36号住居址(3)

○H36号住居址

Ⅶあ2グリットで検出された。H4に切られ、H40を切る。西方向に調査区外に延びるため、全容は不明である。壁残高-0.6mの規模を有する。中央部分がH4により破壊されているため、主柱、炉等は不明である。また、周溝も認められない。東南隅からは土器がまとめて出土している。

遺物は弥生土器・石器・石製品が出土している。弥生土器には高坏(1)、甕(2~6)、壺(7~9)の器種が認められる。高坏は坏部に縫を有して、口縁部が弓なりに外反する。甕は頸部に櫛描麻状文、口縁部と体部上半には櫛描波状文が施される。壺(7)は頸部に2ヶ一対の小孔が対角線上に一組穿たれており、蓋を固定したものと思われる。頸部に櫛描麻状文が巡る他は、外面と内面口縁部には赤彩が施される。器形は甕のものである。8は底部を欠損する。頸部に櫛描麻状文と波状文を多段に施し、更にこれらを櫛描「T」字文で縦位に区画している。外面と内面口縁部には赤彩が施される。9は口縁部を欠損する。残存部には文様は認められない。外面と内面口縁部には赤彩が施される。石器・石製品は台石(10)、敲石(11・12・14)、磨石(13)の器種がみとめられる。

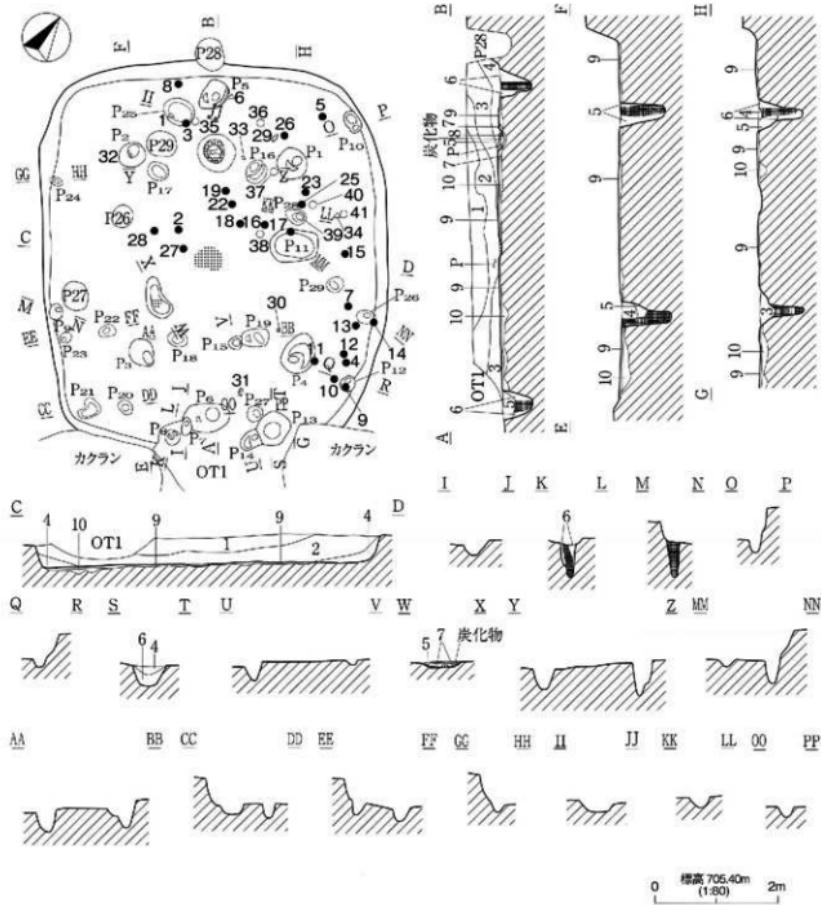
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期古に該当するものと思われる。

○H37号住居址

Ⅲく10グリットで検出された。OT-1に切られ、H39を切る。隅丸長方形の平面形態を呈し、N-34°-Wに長軸方位をとる。長軸長-6.5m、短軸長-5.64m、壁残高-0.5m、面積-214m²の規模を有する。均等配置されるP1~P4の4基が主柱穴であり、約20cm前後の柱痕が確認された。周溝は有さないが、長辺である東西壁下には小規模なビットが複数構築されている。長軸線上の南北端には棟持柱と思われる、P5・P6が確認された。炉はP1・P2間に構築された、土器埋設炉である。この他に、住居中央の床面及び、P3の北側の2カ所に焼土が認められた。堀方から検出された、P16~P19の存在から本址は壁替が行われているものと推測される。

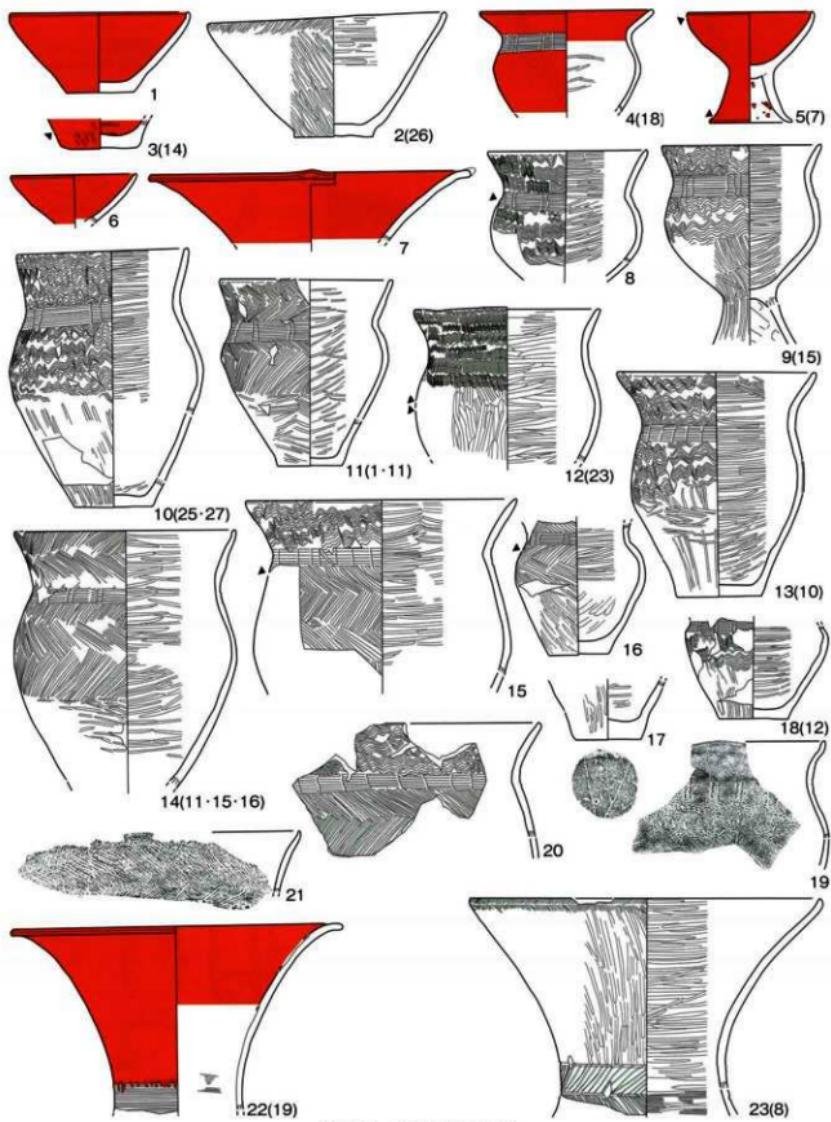
遺物は弥生土器(1~33)、土製品(34)、石器・石製品(35~48)、鉄器(49~51)が出土した。弥生土器には鉢(1~3)、台付鉢(4)、高坏(5~7)、甕(8~21)、壺(22~31)、瓶(32~33)の器種が認められる。鉢は口縁部に櫛描斜走文を巡らすもの(2)も存在する。高坏は赤彩され、坏部には縫を有さない。甕は台付きのもの(9)も存在する。文様は頸部の櫛描麻状文は共通するが、口縁部と体部には櫛描波状文が施されるもの、櫛描斜走文を横位羽状に展開するものの、口縁部に櫛描波状文、体部には櫛描斜走文を横位羽状に展開するもの等が存在する。壺は赤彩されるものと、されないものが存在し、口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に巡らすもの(23)も存在する。頸部文様帶にはヘラ描平行沈線間にヘラ描斜走文を横位羽状に施するものや、櫛描斜走文を横位羽状に充填するもの、櫛描「T」字文を施すもの等が存在する。瓶は2点ともに、中央の単孔を6ヶの小孔が取り囲む特徴的な穿孔のものである。土製品は勾玉が1点出土した。石器・石製品は翡翠製の勾玉(36)、磨製石錐(35)、編物石(37)、磨石(38~39・46~47)、敲石(40~45)、素材・剥片(48)の器種が認められる。鉄器は鉄錐(49~50)、鉄剣(51)が認められた。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅱ期に該当するものと思われる。

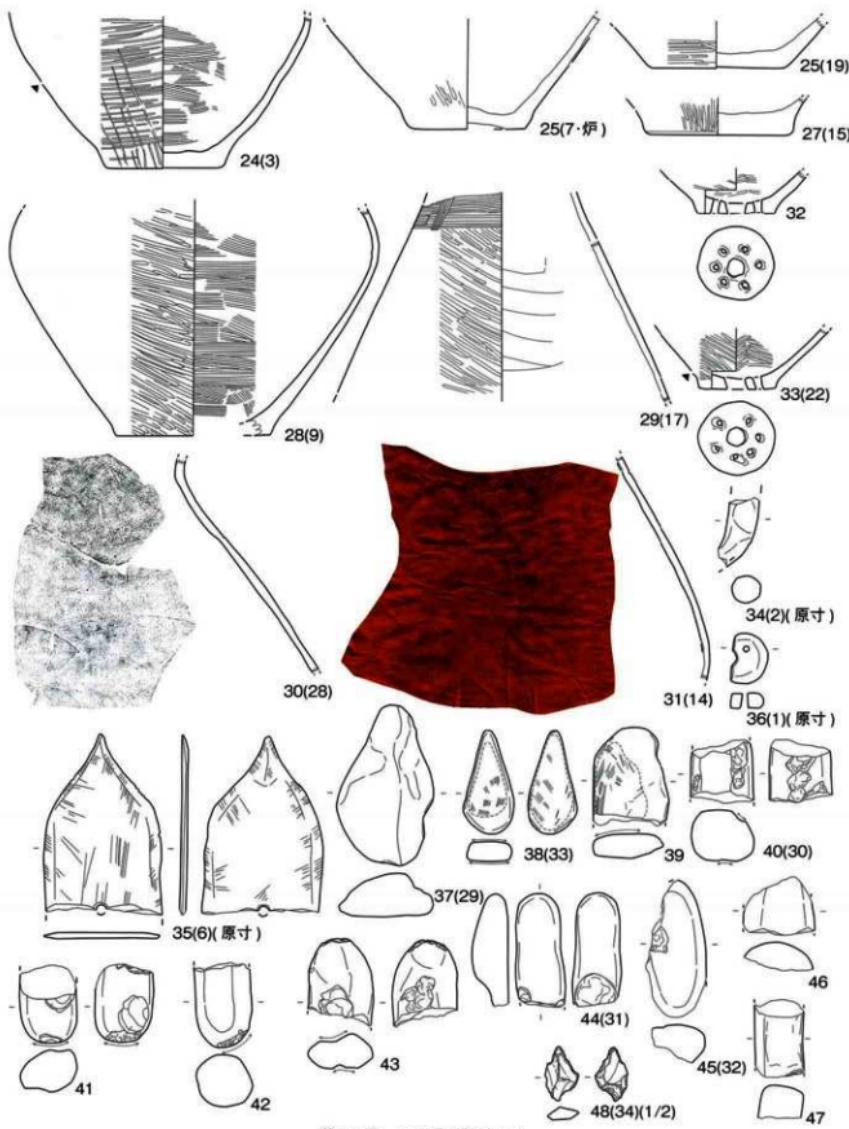


1. に多い黄褐色土層(10YR4/3) 10YR3/2ゾック・粒子含。
2. 黄褐色土層(10YR4/2) 黄色ルーム多含 10YR3/2ゾック。
3. 黄褐色土層(10YR3/2) 未保、黄色ルーム粒子含。
4. 黄褐色土層(10YR3/1) 未保。
5. に多い黄褐色土層(10YR4/3) 10YR3/2少含 7/10ルーム粒子含。
6. に多い黄褐色土層(10YR4/4) 10YR3/2少含。
7. に多い黄褐色土層(5YR6/4) 未保 10YR3/2少含。
8. に多い黄褐色土層(5YR4/3) 10YR3/2少含。
9. 黄褐色土層(10YR3/2) 未保 10YR7/4ルーム・未保・粘土。
10. に多い黄褐色土層(10YR7/4) ルーム・未保 10YR4/2含。田植土。

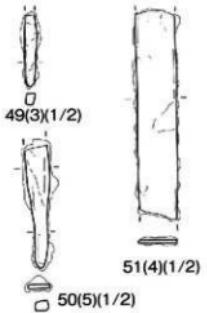
第84図 H37号住居址(1)



第 85 図 H37 号住居址 (2)

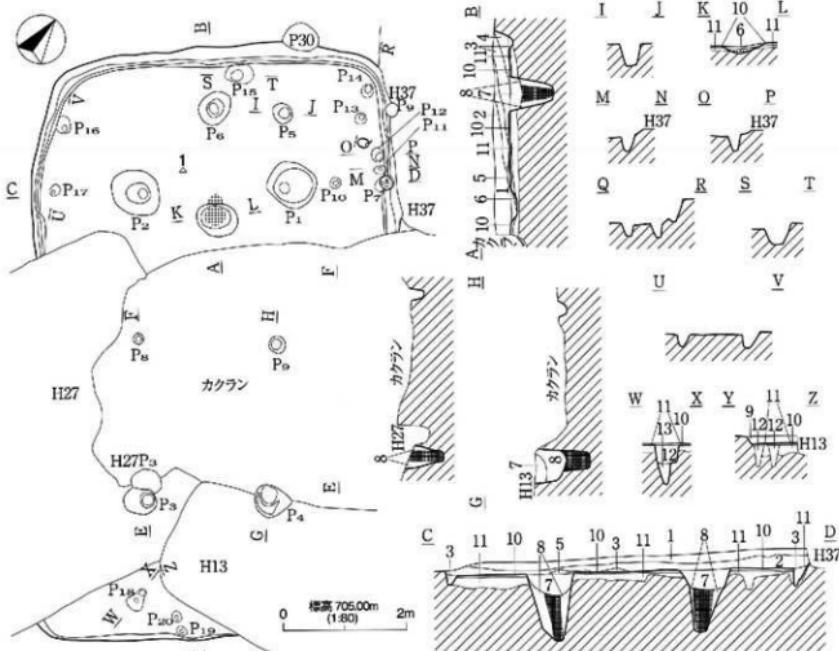


第 86 図 H37 号住居址 (3)



第 87 図 H37 号住居址 (4)

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年 (1999 年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」) の後期 II 期に該当するものと思われる。

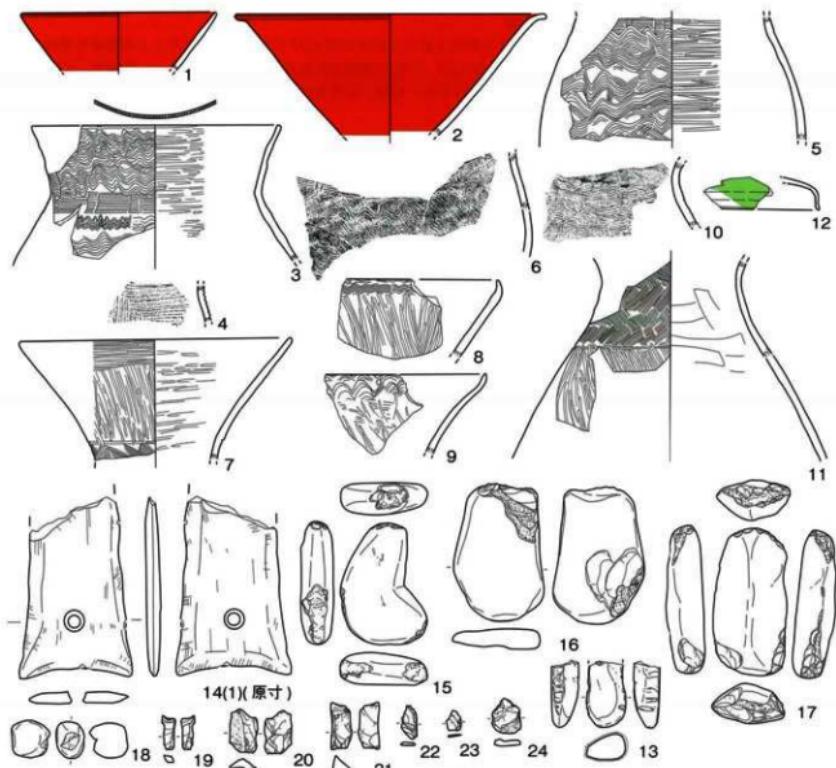


1. 10YR4/1-3/2-の褐色土層。10YR2/4/0-1-A主少含。
2. 灰褐色土層 (10YR4/2) 10YR2/4-2m-少含。
3. 黑褐色土層 (10YR2/2) 10YR2/4/0-1-A主含。
4. に記載。黄褐色土層 (10YR6/4) 10YR2/4/0-A主含。
5. に記載。黄褐色土層 (10YR6/4) 10YR2/4/0-A主含。
6. 黑褐色土層 (10YR3/2) 硫化物・鐵土・蛭子含。

7. 沖積色土層 (10YR2/3) 10YR5/3少含。
8. に記載。褐色土層 (10YR4/3) 10YR5/3含。
9. 黑褐色土層 (10YR2/3) 10YR5/3-1cm-太多含。
10. 黄褐色土層 (10YR4/2) 10YR5/3-2cm-太多含。
11. 10YR4/6-7/4/0-1m-次塗抹・擦方墻土。
12. 黑褐色土層 (10YR3/2) 硫化物・鐵土・蛭子含。

13. 嘴褐色土層 (10YR4/6) 黄色ローム多含、カカドウにやわらか。
- 柱土。
- 住居 (10YR5/3) 10YR6/4少含。

第 88 図 H38 号住居址 (1)



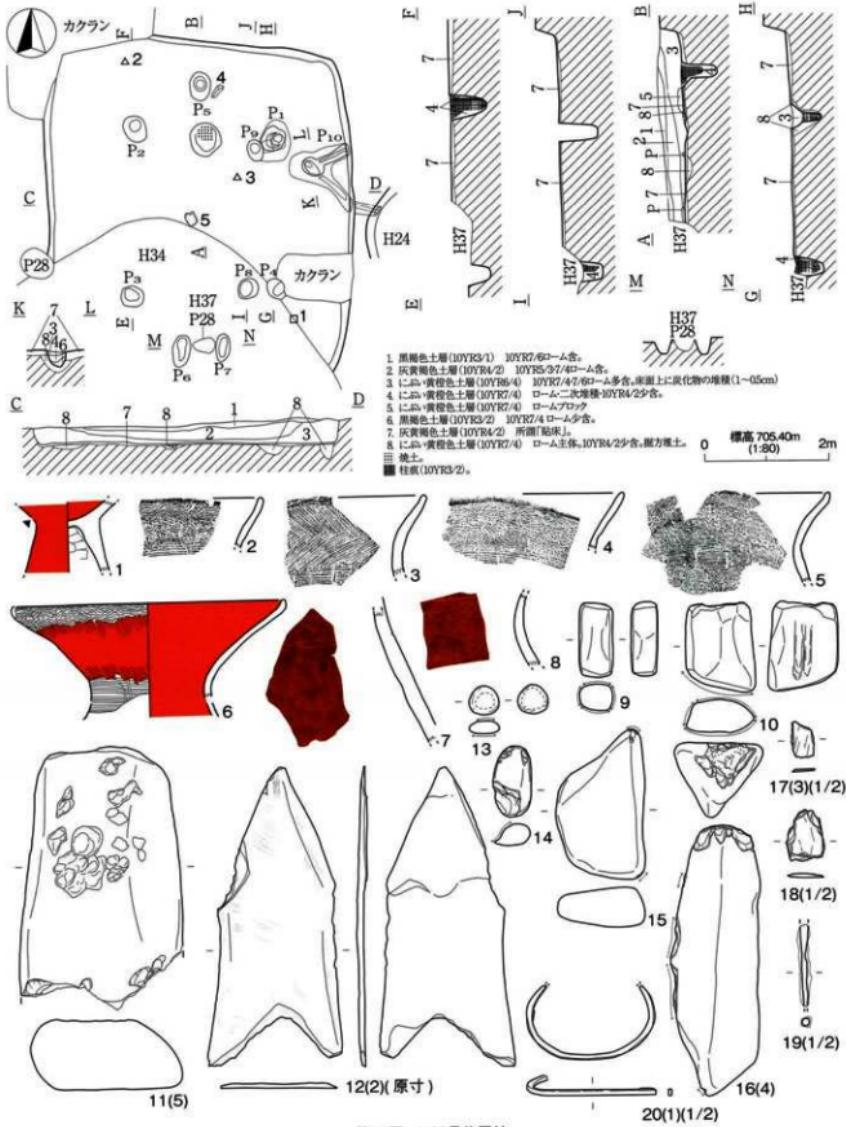
第89図 H38号住居址(2)

○H39号住居址

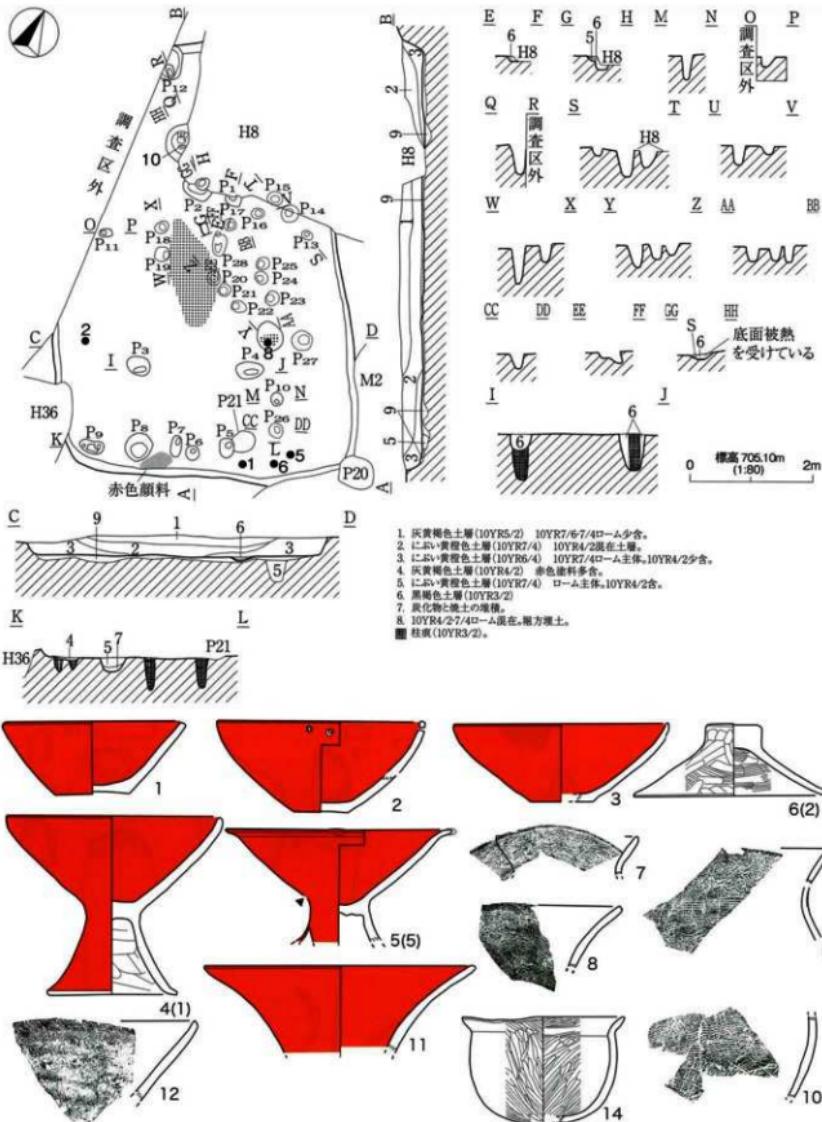
Ⅲく9グリットで検出された。H37・D9に切られるため、全容は不明である。短軸長-5.0m、壁残高-0.35mの規模を有する。均等に配置されるP1～P4の4基が柱穴であり、φ20cm前後の柱痕が確認された。周溝は有さない。南壁下中央付近には出入施設と思われるP6・P7の2基のピットが検出された。P5は棟持柱の可能性が高いが、対となるピットが南壁下に認められなかった。炉は、P1・P2間に構築された地焼炉である。P8・P9の2基のピットの存在から、本址は建替えが行われた可能性が強いものと推測される。本址は東壁側面からの横穴でH24とD7に連絡しているが、その性格は不明である。

遺物は弥生土器(1～8)、石器・石製品(9～18)、鉄器(19)、銅製品(20)が出土している。弥生土器には赤彩される高杯(1)、頸部に櫛描波状文、口縁部と体部には櫛描斜走文の横位羽状展開か櫛描波状文が施される壺(2～5)、壺は全てが赤彩され、受口気味の口縁部に櫛描波状文、頸部に櫛描「T」字文が施されるもの(6)、頸部のヘラ描平行沈線間に櫛描斜走文を横位羽状に充填するもの(7・8)等の器種が認められる。石器・石製品は砾石(9・10)、台石(11)、磨製石錐(12)、磨石(13)、敲石(14～16)、素材・剥片(17・18)の器種が認められる。鉄器は19の針?が1点認められる。銅製品は幅が狭い鏡が認められる。

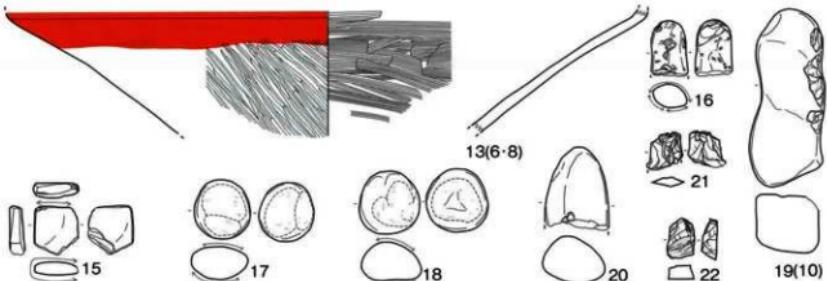
以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期I期に該当するものと思われる。



第90図 H39号住居址



第91図 H40号住居址(1)



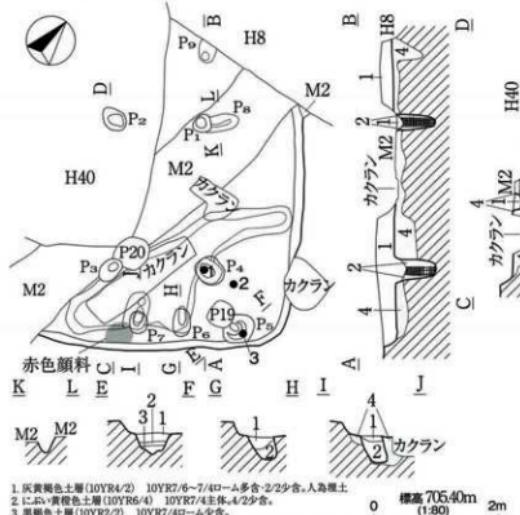
第92図 H40号住居址(2)

○H40号住居址

Ⅲc 9グリットで検出された。H8・M2に切られ、H41を切る。隅丸長方形の平面形態を呈するものと思われる。N -24° -W に長軸方位をとり、長軸長 -7.1m、短軸長 -4.9m、壁残高 -0.35m の規模を有する。P3・P4は主柱穴と思われるが対応する2基のピットは調査範囲内には存在しない。南壁下中央のP6・P7の2基は出入施設であろう。炉はP2とP13の中間に、P4の北側の2カ所に検出された。いずれも地焼炉である。周溝は有さない。

遺物は弥生土器(1~13)、土師器(14)、石器・石製品(15~22)が出土した。弥生土器には内外面赤彩の鉢(1~3)、内外面赤彩の高杯(4~5)、蓋(6)、壺は口縁部に櫛搔波状文が施されるもの(7~9)、体部上半に櫛搔波状文、下半に櫛搔斜走文を横位羽状に施すもの(10)、壺は内外面赤彩される口縁部片(11)、受口気味の口縁部に櫛搔斜走文を横位羽状に施すもの(12)、体部下半に稜を有し、移りより上部に赤彩が施されるもの(13)が存在する。土師器は14の鉢が1点認められる。石器・石製品は砥石(15~16)、磨石(17~18・20)、敲石(19)、素材・剥片(21~22)の器種が認められる。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。



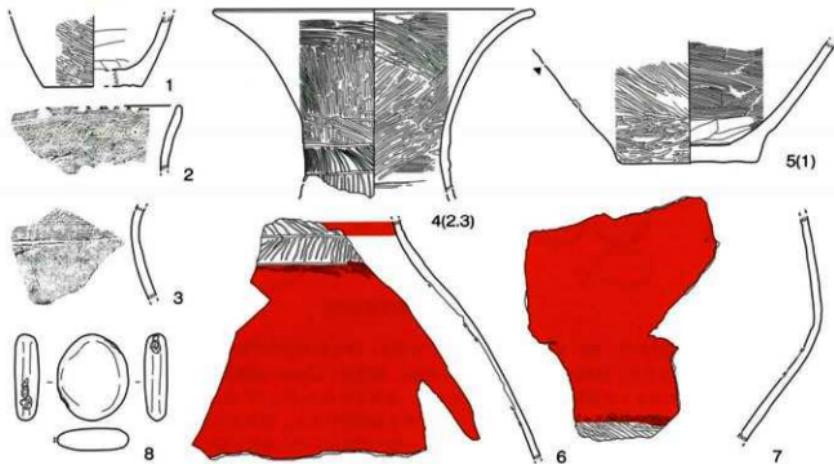
第93図 H41号住居址(1)

○H41号住居址

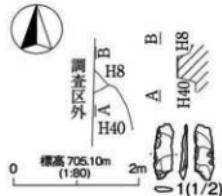
Ⅲd 9グリットで検出された。H8・H40・M2に切られるため、全容は不明である。壁残高 -0.25m の規模を有する。均等に配置されるP1~P4の4基が主柱穴であり、φ16~20cm大の柱痕が確認された。南壁下中央には出入口施設と思われるP6・P7の2基のピットが検出されている。周溝は有さず、炉は確認されなかった。尚、本址南壁下P7の西脇には、40×30cm大の楕円形に赤色顔料が認められた。

遺物は弥生土器、石器が出土している。弥生土器は壺(1~3)、蓋(4~7)の器種が認められる。壺は2の口縁部の押捺は多分に中期的な要素であり、混入の可能性も否定できない。壺は赤彩されるものと、されないものが存在するが、口縁部に文様帯は有さない。頭部にはヘラ描平行沈線間に斜走文を横羽

1. 黄褐色土層(10YR4/2) 10YR7/6-7/ローム多含 2/2少含、人為堆土
2. にぶい黄褐色土層(10YR6/4) 10YR7/4主体 4/2少含。
3. 黒褐色土層(10YR2/2) 10YR7/4ローム少含。
4. にぶい黄褐色土層(10YR7/4) ローム主体、10YR4/2-2/2少含、堆方堆土
■柱痕(10YR3/2)。



第94図 H41号住居址(2)



第95図 H42号住居址

状に展開している。石器は8の敲石が1点出土している。

以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の住居址と捉えられ、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の後期Ⅲ期に該当するものと思われる。

○H42号住居址

Vあ8グリットで検出された。H8-H40に切られ、西方向に調査区外が延びるため、わずかなプランと床面が確認されたにすぎない。詳細は不明である。

遺物は石器の素材・剥片が1点出土している。本址の時期は弥生時代後期Ⅰ期以前である。

第2節 掘立柱建物址

○F1号掘立柱建物址

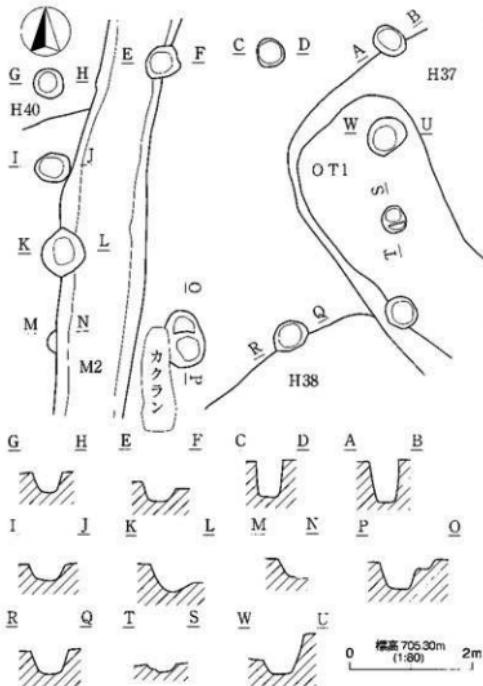
Ⅲけ1グリットで検出された。M2に切られ、H37・H38・H41・OT-1を切る。長軸方位をN-84°-Eにとる。桁行3間×梁行3間の長方形の平面形態を呈する側柱式の掘立柱建物址である。桁行長-5.7m、梁行長-4.3m、面積-24.51 m²の規模を有する。柱穴は長径50cmの大円ないし稍円形の平面形態で、断面は逆梯形を呈する。柱間は桁行が18m前後、梁行が15m前後である。

遺物は弥生土器の壺底部(1)と、磨石(2)が出土したが、本址の年代を特定する遺物はない。本址の年代は不明である。

○F2号掘立柱建物址

IVか4グリットで検出された。3基の同規模のピットが、規則性を持って1列に検出されたため掘立柱建物址とした。そのため詳細は不明である。おそらくは、南方向の調査区外に展開するものと思われる。

出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である



第96図 F1・F2号掘立柱建物址

長軸方位を $N - 73^\circ - W$ にとり、長軸長 $- 0.81m$ 、短軸長 $- 0.8m$ 、壁残高 $- 0.12m$ 、面積 $- 0.17 m^2$ の規模を有する。平面 - 円形、断面 - 逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D3号土坑

Ⅲc 8グリットで検出された。H8を切り、M2に切られる。全容は不明であるが、長軸長 $- 0.88m$ 、壁残高 $- 0.14m$ の規模である。断面 - 逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

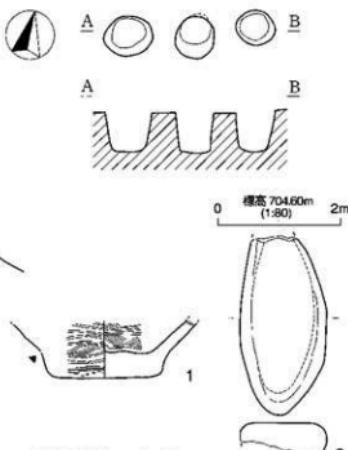
○D4号土坑

Ⅲc 8グリットで検出された。H8を切り。N $- 90^\circ - W$ に長軸方位をとり、長軸長 $- 0.8m$ 、短軸長 $- 0.74m$ 、壁残高 $- 0.1m$ 、面積 $- 0.19 m^2$ の規模を有する。平面 - 円形、断面 - 逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D5号土坑

Ⅲe 10グリットで検出された。H21を切り、H19に切られる。壁残高 $- 0.85m$ の規模である。平面 - 長方形、断面 - 逆梯形の形態である。底面の中央に径 $30 cm$ 大のピットが 1 基穿たれている。西壁面に穿たれた小径ピットについては確実に本址伴うか否か判断できない。

遺物は須恵器、弥生土器、石器が出土している。須恵器は 1 の壺、2・3 の壺の器種が認められる。弥生土器は 4 の



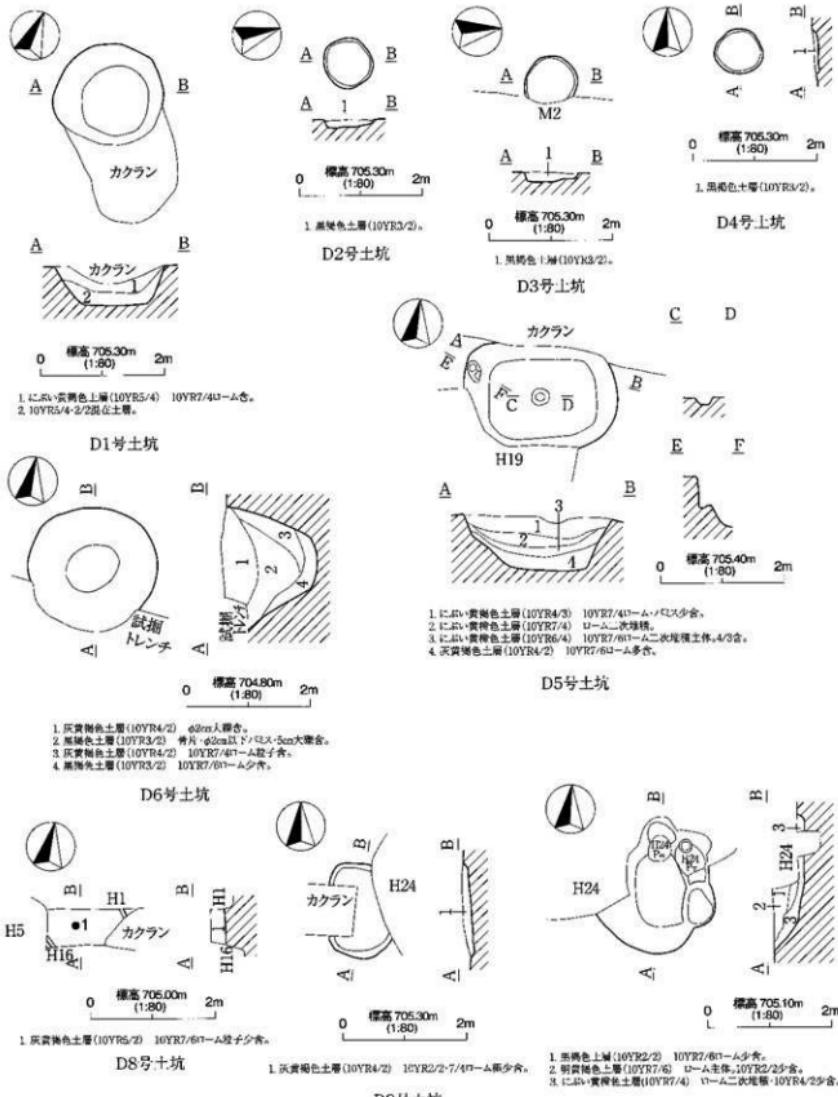
第3節 土坑

○D1号土坑

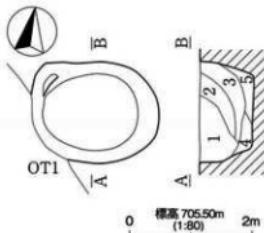
Ⅲo 10グリットで検出された。H19を切り。長軸方位を $N - 110^\circ - W$ にとり、長軸長 $- 1.8m$ 、短軸長 $- 1.65m$ 、壁残高 $- 0.65m$ 、面積 $- 1.81 m^2$ の規模を有する。平面 - 円形、断面 - 逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D2号土坑

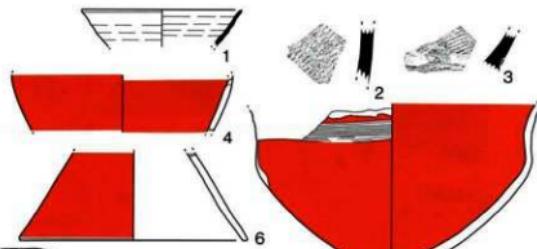
Ⅲc 8グリットで検出された。H8を切り。全容は不明であるが、長軸長 $- 0.88m$ 、壁残高 $- 0.14m$ の規模である。平面 - 円形、断面 - 逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。



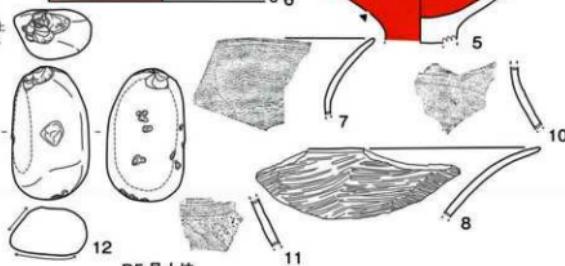
第97図 土坑(1)



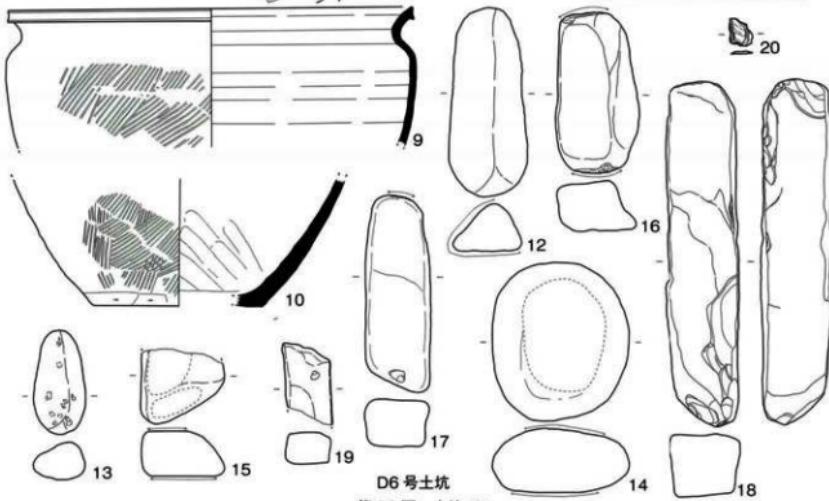
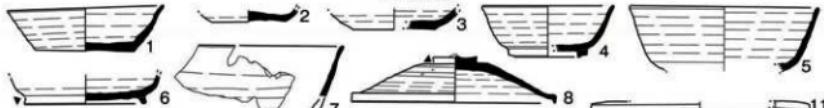
1. にじみ黄褐色土層(10YR4/3)。粒子細かい、人為堆土。
2. にじみ黄褐色土層(10YR6/3)。10YR7/4合、人為堆土。
3. 10YR7/4ローム・4/3混在・10YR2/2合。
4. 灰黄褐色土層(10YR4/2)。
5. 4種中に10YR8/2ローム多。



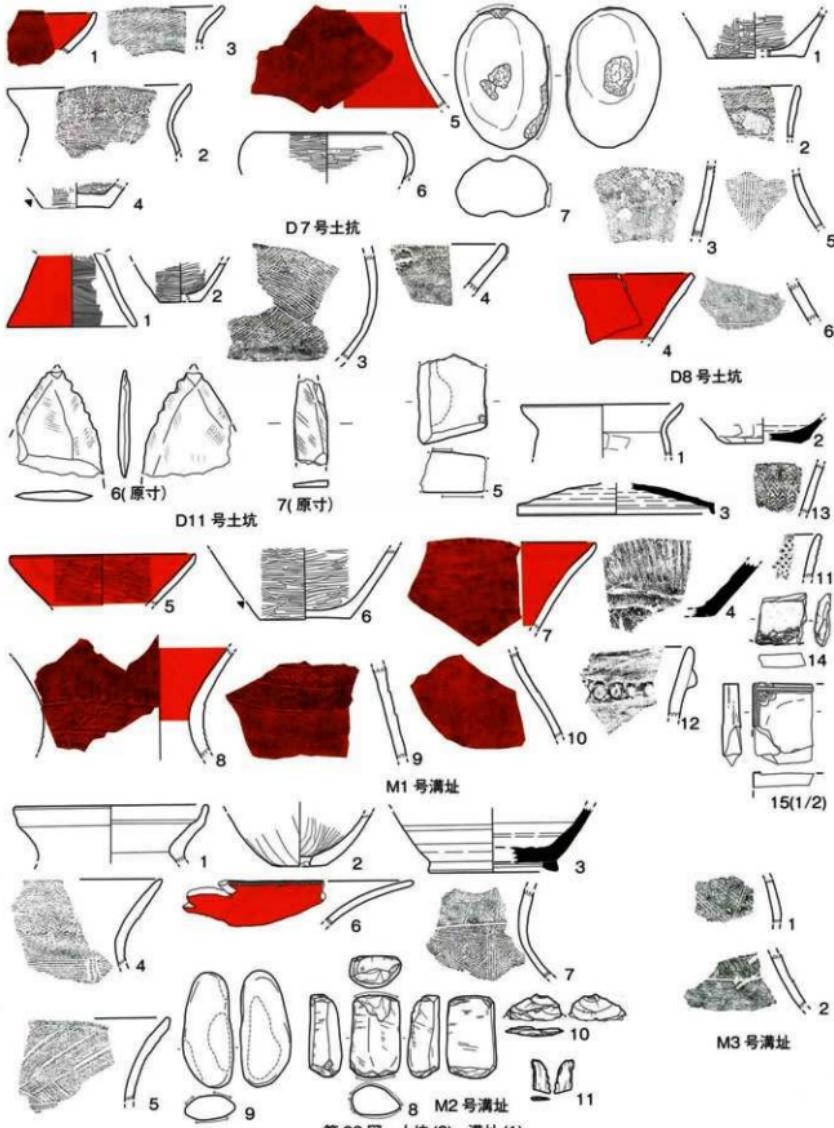
D11号土坑



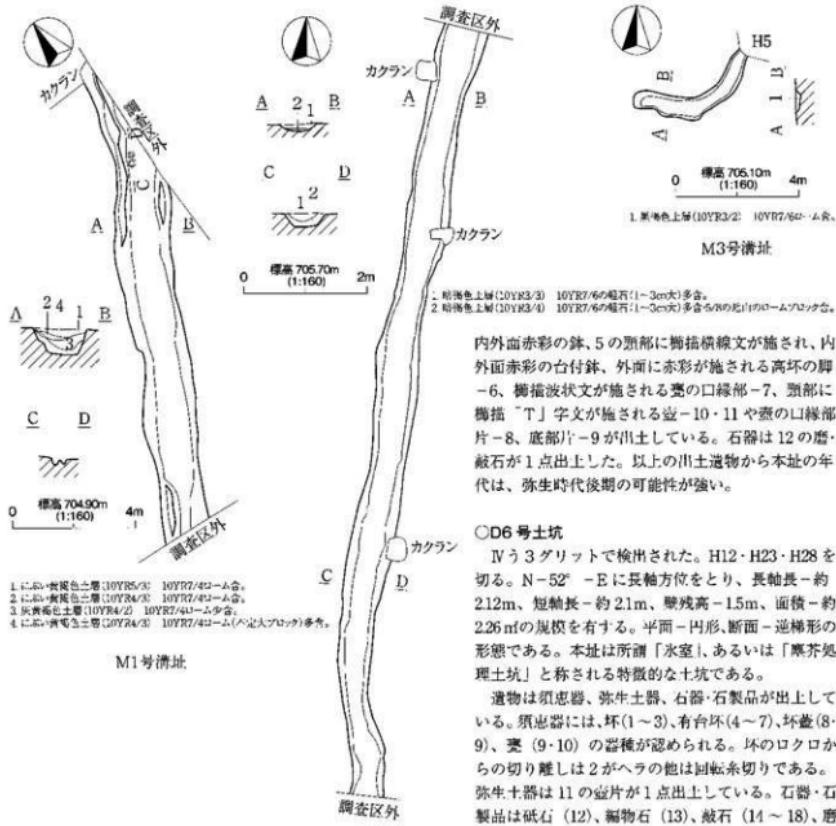
D5号土坑



D6号土坑



第99図 土坑(3)・溝址(1)



第100図 溝址(2)

○D7号土坑

Ⅲき8グリットで検出された。OT-1に切られる。N-43°-Wに長軸方位をとり、長軸長-41m、短軸長-約1.75m、壁残高-0.5mの規模を有する。H24・H39と西南隅の壁面に穿たれたピットにより連結する。平面-長方形、断面-逆梯形の形態である。

遺物は弥生土器、土師器、石器が出土している。弥生土器には鉢(1)、壺(2・3)、壺(4・5)の器種が認められる。鉢は内外面に赤彩が施され、口縁部に櫛描波状文が施される。壺は2が頸部に櫛描縫状文、口縁部と体部上半に櫛描波状文が施される。3は口縁部に櫛描斜走文が施されている。壺は4は底部片である。5は頸部片で、赤彩が施され、頸部には櫛描「T」字文が施される。土師器はG4形態の壺が出土している。石器は7の敲石が出土した。以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の所産と捉えられる。

○D8号土坑

Ⅲあ10グリットで検出された。H1・H5・H16に切られる。壺残高-0.25mの規模を有するが、平面形態は不明である。断面-逆梯形の形態を呈する。

遺物は弥生土器が出土している。1は壺の底部、2は口縁部片で頸部に櫛描箋状文、口縁部には櫛描波状文が施される。3は壺の体部片であり、櫛描斜走文が横位羽状に施されている。4は内外面に赤彩が施される壺の口縁部片、5は櫛描「T」字文が施される壺の頸部片、6はヘラ描平行沈線間に櫛描斜走文を横位羽状に充填する壺の頸部片である。以上の遺物から、本址の年代は弥生時代後期と捉えられる。

○D9号土坑

Ⅲき10グリットで検出された。H39を切り、H124に切られる。N-7°-Eに長軸方位をとり、長軸長-1.54m、壺残高-0.14mの規模を有する。平面-長方形、断面-逆梯形の形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D10号土坑

Ⅲか10グリットで検出された。H24・H25に切られる。壺残高-0.5mの規模である。極めて不整形な形態である。出土遺物は皆無であり、本址の年代は不明である。

○D11号土坑

Ⅲか8グリットで検出された。H25を切る。N-83°-Eに長軸方位をとり、長軸長-約2.05m、短軸長-1.7m、壺残高-0.88m、面積-約2.18m²の規模を有する。5層から成る覆土は人為堆土である。

遺物は弥生土器と石器・石製品が出土している。弥生土器は、1の外側赤彩の高杯脚部片、2・3の壺片のうち3は体部に櫛描斜走文を横位羽状に施している。4はL1縁部に櫛描斜走文を施し、更に円形貼付文が附加された壺のL1縁部片である。右器・石製品は5が台石、6・7は磨製石礫である。以上の出土遺物から本址は弥生時代後期の所産と考えられる。

第4節 溝址

○M1号溝址

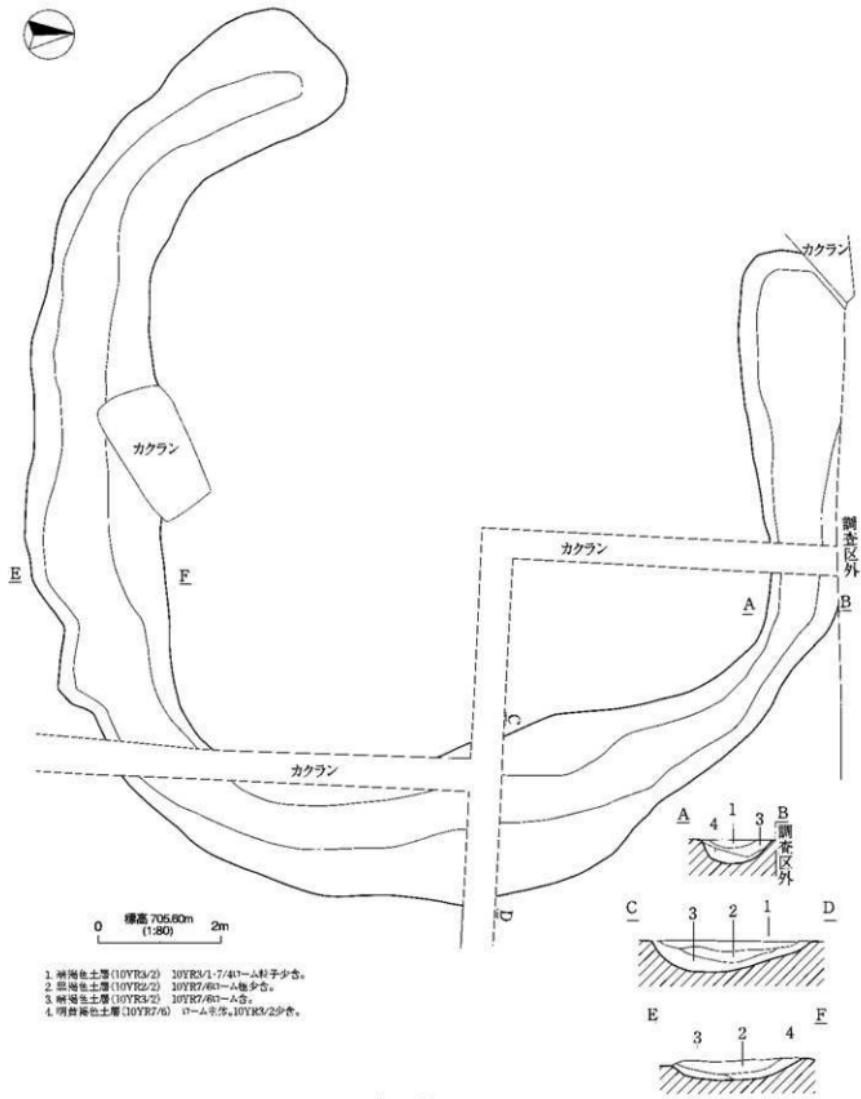
IVか1グリット～IVい4グリットにかけて検出された。両端共に調査区外に延びている。底面は北から南に向かい勾配(0.46m)を成す。深度は北端-1.14m、南端-0.47m、幅は2m前後で、断面は逆梯形の形態であるが、部分的にテラスを有している。道遺構のような堅い面はなく、水路の痕跡も認められない。遺物は土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、石器・石製品が出土している。土師器は壺(1)、須恵器は壺(2)・壺蓋(3)・壺(4)の器種が認められる。須恵器壺の底部には回転糸切痕が残されている。弥生土器は鉢(5)・壺(6～10)の器種が認められる。縄文土器は早期押型文上器(11・13)と後期の凸帯文土器が認められる。11は格円、13は山形押型文である。石器は打製石斧の破片が出土している。石製品は硬の破片が出土している。以上の出土遺物から、本址は平安時代以降の年代が推測される。

○M2号溝址

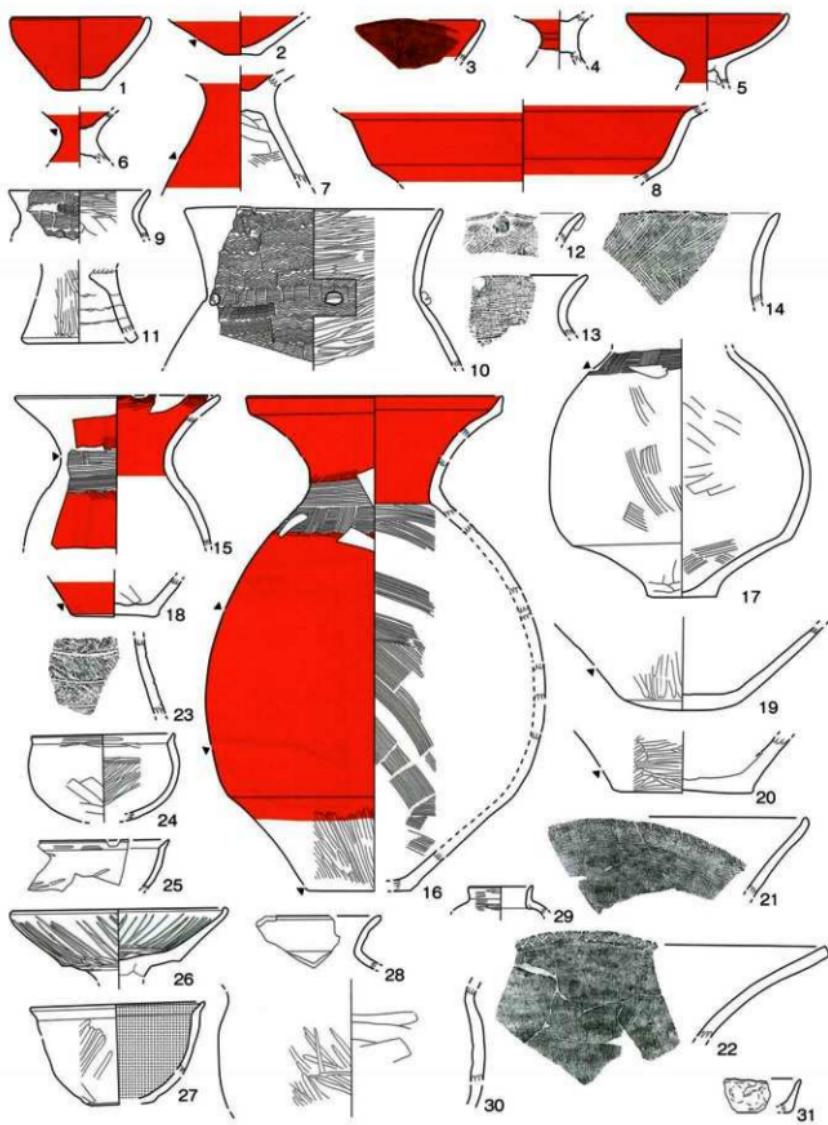
Ⅳけ7グリット～Ⅳけ3グリットにかけて検出された。両端共に調査区外に延びている。底面は北から南に向かい勾配(0.85m)を成す。深度は北端-0.2m、南端-0.14m、幅は1.4m前後である。断面は逆梯形を呈する。その性格は道の可能性が高い。遺物は土師器、須恵器、弥生土器、石器・石製品が出土している。上部器は、1の有段口縁の瓶、2の単孔の瓶が出土した。須恵器は3の壺底部が1点出土した。弥生土器は頸部櫛描箋状文、口縁部櫛描波状文が施される壺(4)、口縁部に櫛描斜走文を横位羽状に展開する壺(5)、口唇部に縄文を施し、内外面に赤彩が施される壺口縁部片(6)、頸部のヘラ描平行沈線間に、櫛描横線文と櫛描斜走文を横位羽状に施し、これをヘラ描「T」字文で縦位に区画する壺頸部片(7)が認められる。右器・石製品は8の砥石、9の磨石、10・11の石器素材、ないし剥片が出土している。以上の出土遺物は弥生時代後期から平安時代に及ぶものであるが、道構間の重複では本址は住居跡群を切っていることから、本址の年代は平安時代以降と捉えておく。

○M3号溝址

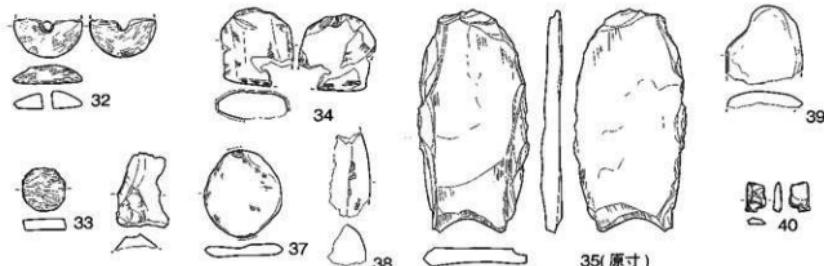
IVい2グリットで検出された。H5に切られる。平面形態は弧状である。幅-0.7m前後、深度-0.2mの規模である。



第101図 OT1(1)



第102図 OT1(2)



第103図 OT1(3)

周溝墓の可能性もあるが、判断できない。遺物は弥生土器が出土している。図化可能なものは以下の2点である。1は櫛描斜走文を横羽状に施す壺、2は頸部にヘラ描平行沈線間に斜走文を横羽状に充填する壺である。以上の出土遺物から、本址は弥生時代後期の年代が推測される。

第5節 その他の遺構・遺物

○OT-1

IIIき9グリットを中心に検出された円形周溝墓である。塚の外輪で径14mの円形をなし、北北西方向が幅7mで溝が切れる。主体部は残存していなかった。溝幅は不安定で、最大-2.5m、最小-0.8mである。深度は0.3m前後である。JR小海線を挟み、当調査区の北に位置する円正坊III・IV次調査区では周溝墓群が確認されていることから、弥生時代後期の墓域は微高地となる円正坊III・IV次調査区に向か展開していることが推測される。

遺物は弥生土器(1～23)、土師器(24～31)、土製品(32～33)、石器・石製品(34～40)が出土している。弥生土器には鉢(1～3)、台付鉢(4)、高杯(5～8)、壺(9～14)、煮(15～23)の器種が認められる。台付鉢の脚上部の3本の平行沈線、煮(22)の口唇部の格子文は莫質である。土師器は壺(24～25)、高杯(26)、鉢(27)、壺(28)、煮(29・30)、手捏(31)の器種が認められる。土製品は紡錘車(32)、土器片円盤(33)の器種が認められる。石器・石製品は砥石(34)、磨石(36・39)、敲石(37・38)、磨製石鏡(35)、素材・剥片(40)の器種が認められる。これらの遺物の内、確実に本址に伴うものは16・17の弥生土器の壺と思われ、この2点から類推される本址の年代は、小山岳夫の編年(1999年長野県考古学会シンポジウム「長野県の弥生土器編年」)の弥生時代後期V期ないし古墳時代I期に該当するものと思われる。

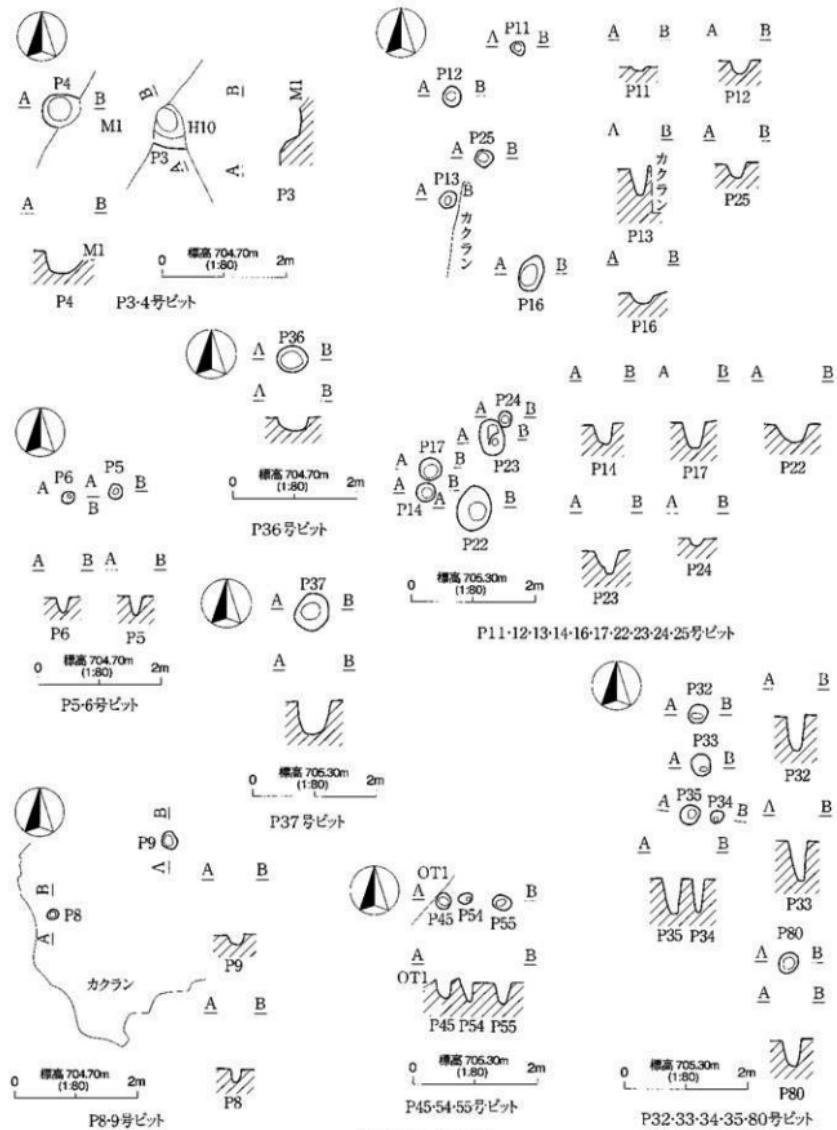
○ピット

66基が検出された。IVう1、IVお1、IVか1、IVき1、IVこ1・2、IIIこ10、IVく3、IVい4グリットに集中する傾向が認められる。大半が柱・杭等を設置した柱穴と思われる。個々の概要については、図・表・写真を参照されたい。

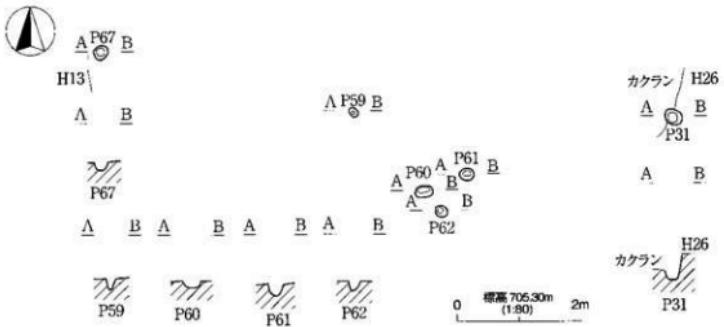
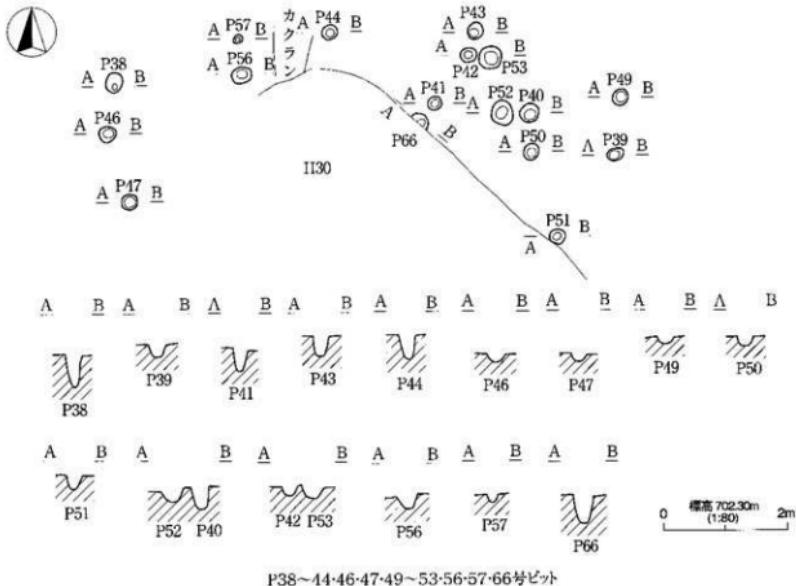
遺物はP3:弥生土器-8点。P4:弥生土器-18点、縄文(押型文)-1点。P12:弥生土器-1点。P13:弥生土器-1点、土師器-1点。P14:弥生土器-2点。P17:弥生土器-2点。P18:弥生土器-10点。P26:弥生土器-2点。P27:弥生土器-32点、土師器-1点。P36:弥生土器-2点。P38:弥生土器-2点。P59:弥生土器-1点。P60:弥生土器-1点、土師器-1点。P68:弥生土器-4点、不明-1点。P75:弥生土器-2点。P76:弥生土器-3点。P77:弥生土器-1点。P79:土師器-2点。P80:弥生土器-2点。P81:土師器-2点。が出土している。

○遺構外出土遺物

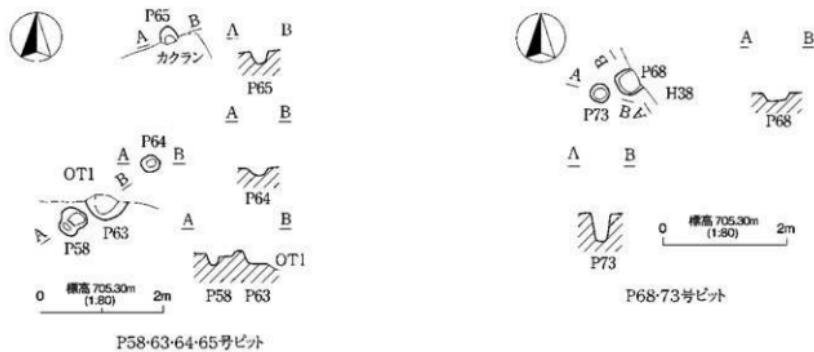
本米個々の遺構に帰属していたものであるが、重機による表土除去、遺構検出作業等により遺構から切り離された遺物群を一括して掲載した。縄文時代後期の土器片が新たに加わる唯一の要素であり、それ以外は個々の遺構から出土している時代のものである。



第104図 ピット(1)

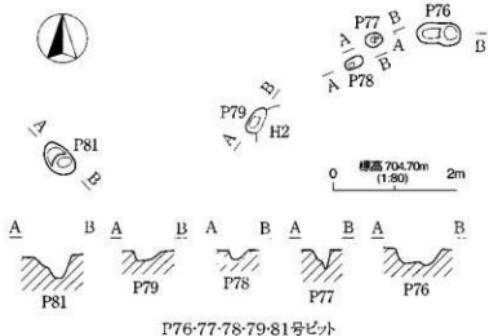
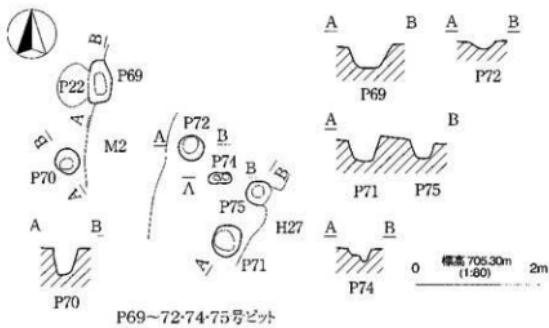


第105図 ピット(2)

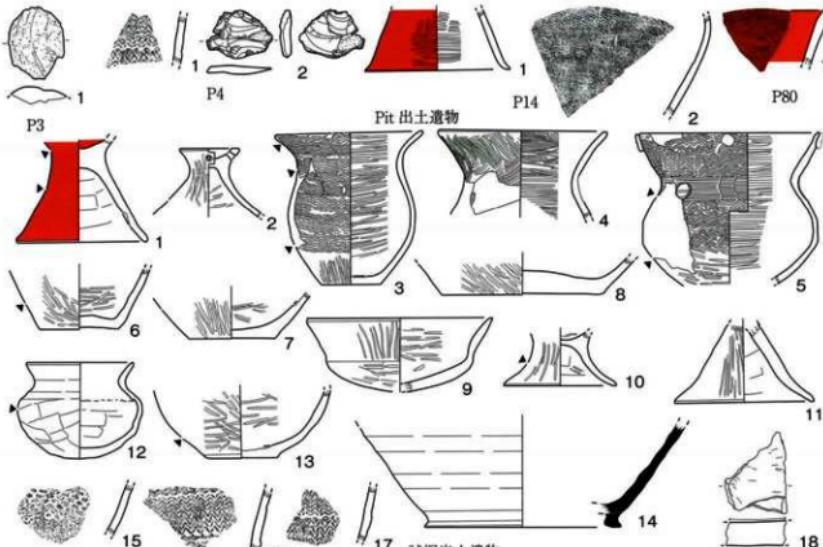


0 標高 705.30m (1.80) 2m

P68-73号ビット



第106図 ビット(3)



第107図 Pit 出土遺物(4)・試掘調査出土遺物

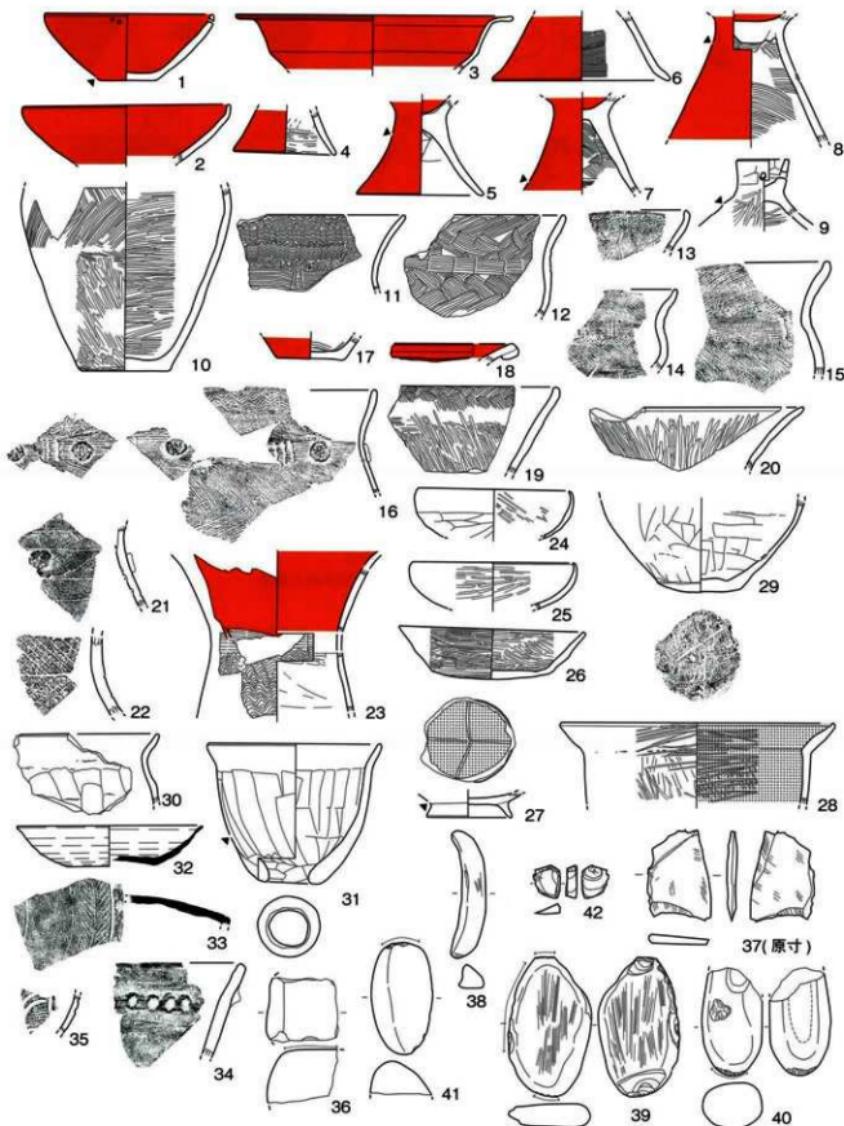
○試掘出土遺物

遺構外出土遺物と同様の理由により、個々の遺構から切り離されてしまった遺物群である。遺構外出土遺物も本項の遺物も当然の事ながら遺構との接合関係は検証を行っている。

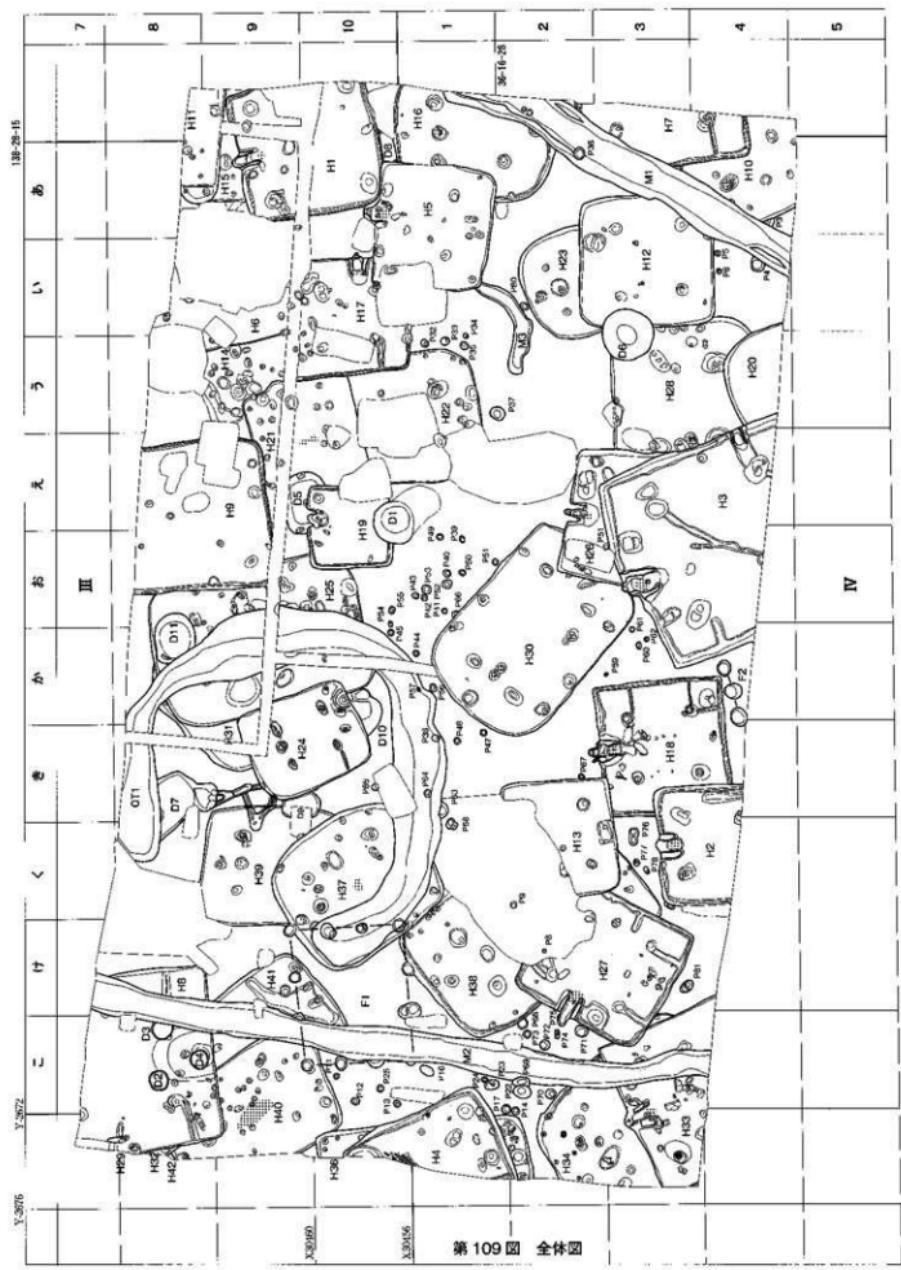
○獸骨等

今回の調査においては多量の獸骨が出土した。弥生時代後期の住居址及びその周辺から出土しており、大量の出土した住居址は覆土中から無秩序に出土している。また、少量出土の住居址は床面から出土している。問題となるのは大量出土を見た H16・H23・H24・H25・H28 である。時期的には小山編年（長野県考古学会 1999 年シンポジウム）の弥生時代後期 II 期～III 期古の範疇に収まっており、これ以前、以後の時期の住居址からは少量の出土しか認められない。

その大半は鹿であり、H23・H28 からは猪の牙や歯が認められた。また、獸骨ではないが多量の田螺と思われる巻貝と少量の鈍と思われる貝殻が H23・H25 から出土している。田螺と思われる貝殻は白色の粉状に成るまで焼かれており、白色の灰層となって堆積していた。取り上げることが可能であったものはごく僅かであった。このような焼成は食すためのものとは思われず、白色の粉・石灰状の粉を得るために行った行為の結果のようにも思われる。漆喰状の塗料や白色顔料の原材料と考えることは無理であろうか？獸骨も焼成を受けており、炭化したものも認められる。通常ならば残存しにくい骨が良好な状態で出土したのは焼成を受けたことによるものと考えられる。さて、出土獸骨の中には明らかな加工痕を止めるものが存在する。それらは H25・H28 から限定的に出土している。前記したように、住居覆土中から出土しており、竪穴住居址内に食用されたものでない。屋外で集団会食された痕跡と言ふよりは何らかの祭祀行為の痕跡のようにも思われる。加工痕の中には明らかに解体痕もあるが、骨角器や、その未製品も存在する。その対象となる部位は角が最も多く、表層の凹凸を滑らかに研磨したり、切断し、端部を削ったもの等が認められる。また使用部位は不明であるが、針や刺突具のようなものが認められる。最後に今回の調査における最大の成果である、「ト骨」の出土を報告する。H28 号住居址から、鹿の肩胛骨を用いたト骨片が 4 点出土した。千曲市「生仁跡跡」出土例に次ぎ、弥生時代のト骨としては県内で 2 例目となる貴重な発見である。当時、朝鮮半島から西日本を中心に行われた祭祀が、佐久の地でも行われていたことが明らかとなった。



第108図 遺構出土遺物



第109図 全体図

測線名	検出位置	重複関係	長軸方位	規 條		面積	付属施設	ピット	備考	時期
				長軸長	短軸長					
H 1	Ⅲあ10	H5・H15・D8を切る H18を切る	N-11° - W	8.76	5.52	0.30	-	主4+5 周溝	カマド地山削出し 粘土カマド	6C 中葉
H 2	IVく4	H18を切る	N-11° - W	-	4.94	-	-	主4+?	?	?
H 3	IVづ4	H20・H26・H28を切る	N-22° - W	-	8.30	0.75	-	主4?	?	?
H 4	VIあ1	H36を切る	-	-	-	0.70	-	?	?	?
H 5	IIIい1	H1に切られ、H16・H17・D8・M3を切る H14を切り、櫛状に切られる	N-104° - W	5.10	4.70	0.45	16.7	主4+5 周溝	石織粘土カマド・旧住居 石織粘土カマド、旧モヤマ屋 消失家屋	?
H 6	IIIい9	H14を切り、櫛状に切られる	-	-	-	0.65	-	7	-	?
H 7	IIIあ3	M1に切られ、H10を切る	N-5° - W	6.88	-	0.50	-	主4?	石織粘土カマド	?
H 8	IIIこ8	M2に切られ、H10・H11を切る	-	-	7.40	0.55	-	主4+?	石織粘土カマド 廻廊+周辺	?
H 9	IIIえ9	H14・H21・H25を切る H1とH7に切られる	-	-	6.15	0.20	-	8?	周溝	?
H 10	IVあ4	M1・H7に切られる	-	-	-	0.60	-	8?	石囲炉	?
H 11	IIIあ9	H15を切る	-	-	-	0.60	-	6?	張出	?
H 12	IVづ3	M1・D6に切られ、H23を切る	N-2° - W	5.44	5.40	0.45	-	主4+1	北壁中央にカマドの痕跡	?
H 13	IVく3	H18・H27・H38を切る	N-8° - W	-	4.85	0.38	-	主4+?	-	?
H 14	IIIう9	H6・H9・H29に切られる?	-	-	-	0.00	-	17?	-	?
H 15	IIIあ9	H1・H11に切られる?	N-0° - W	-	-	0.05	-	主4?+4	土器埋設炉	?
H 16	IVあ1	M1・H5に切られる	-	-	-	0.60	-	主4+4?	石門炉・旧住居 廻廊+周辺	?
H 17	IIIい10	H5に切られ、H21・H22を切る	-	-	4.88	0.20	-	主4+12?	石織粘土カマド	?
H 18	IVき4	H2・H13に切られる	N-5° - W	5.15	5.55	0.55	-	主4+2	東南隣に貯藏穴 石織粘土カマド?	?
H 19	IIIお10	D1に切られ、D5・H25を切る	N-0° - W	3.45	3.40	0.32	-	1?	周溝	?
H 20	IVう4	H3に切られ、H28を切る	-	-	-	0.38	-	-	-	?
H 21	IIIえ10	H9・H11・H12・D6に切られ、H14を切る	N-5° - W	7.10	5.42	0.22	-	主4+15?	地焼炉	?
H 22	IVえ1	H17・H21に切られる	N-22° - W	-	4.50	0.48	-	主4+11?	廻廊+周辺	?
H 23	IVあ2	H12・D6に切られる	N-23° - W	4.80	3.90	0.60	12.7	主4+3	廻廊+周辺	?
H 24	IIIき10	H31・D9・D10を切る	N-10° - W	8.70	-	0.22	-	主4+34	-	?
H 25	IIIか9	H9・H19・H24・D11に切られ、H31を切る	N-10° - W	-	5.50	0.60	-	3?	周溝	?
H 26	IVづ3	H3に切られ、H28・H30に切られる	-	-	5.39	0.38	-	主4+2	石織粘土カマド 廻廊+周辺	?
H 27	IVけ3	H13に切られ、H33・H34・H38を切る	N-60° - W	-	6.10	0.45	-	主4+13?	地焼炉	?
H 28	IVう4	H3・H12・H20・D6に切られる	-	-	-	-	-	-	-	?
H 29	Vぶ7	?	-	-	-	-	-	-	-	?
H 30	IVづ2	H3・H26に切られる	N-46° - W	8.18	5.6	0.60	31.6	主4+11?	廻廊+周辺	?
H 31	IIIき9	H24・H25に切られる	-	-	-	0.28	-	12?	地焼炉	?
H 32	IIIこ8	H8に切られる	-	-	-	0.10	-	25?	-	?
H 33	IVこ3	H27に切られ、H34を切る	-	-	-	6.65	0.60	10?	-	?
H 34	VIあ3	H33・H34・H20に切られる	-	-	-	0.40	-	16?	-	?
H 35	VIぶ2	H4に切られ、H40を切る	N-34° - W	6.50	5.64	-	0.60	6?	-	?
H 37	IIIく10	OT1に切られ、H39を切る	-	-	-	-	-	4+25	廻廊+周辺	?

第1表 穴穴住居一観察(1)

遺構名	検出位置	重複関係		規 構			ビット		付属施設	備 考	時期
		長軸方位	長軸長	短軸長	堅 積	面積 (深さ)	主 4 + 16	主 4 + 5 ?			
H38	IVけ2	H13・H27・H37に切られる	N - 35° - W	9.70	5.75	0.28	-	-	地焼炉	張後	
H39	Ⅲく9	H37・D9に切られる	-	5.00	0.35	-	主 4 + 5 ?	28 ?	OT-IIIと堅積のシットで連結	張後	
H40	Ⅲこ9	H8・M2に切られ、H41を切る	N - 24° - W	7.10	4.90	0.35	-	-	地焼炉	張後	
H41	Ⅲけ9	H8・H40・M2に切られる	-	-	0.25	-	主 4 + 5 ?	-	地焼炉	張後	
H42	Vあ8	H8・H40に切られる	-	-	-	-	-	-	-	張後	

遺構名	検出位置	重複関係		平面形態			規 構		柱痕径	付属施設	備 考	時期
		長方形	長方形	幅行長	梁軸方位	面積	柱行長	面積				
F 1	Ⅲけ1	M2に切られ、H37・H38・H41・OT1を切る	長方形	-	N - 84° - E	24.51	-	-	-	-	-	-
F 2	Ⅳか4	H3に切られる？調査区外に延びる	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

遺構名	検出位置	重複関係		平面形態			長軸方位			短軸長		壁残高	面積	備 考	時期
		円形	円形	N - 110° - W	1.80	1.65	0.65	1.81	?	?	?				
D 1	Ⅲお10	H19を切る	円形	N - 110° - W	1.80	1.65	0.65	1.81	?	?	?	?	?	?	?
D 2	Ⅲこ8	H8を切る	円形	N - 73° - W	0.81	0.80	0.12	0.17	?	?	?	?	?	?	?
D 3	Ⅲこ8	H8を切り、M2に切られる	円形	N - 90° - W	0.80	0.88	0.14	-	?	?	?	?	?	?	?
D 4	Ⅲこ8	H8を切る	円形	-	0.80	0.74	0.10	0.19	?	?	?	?	?	?	?
D 5	Ⅲえ10	H21を切り、H19に切られる	長方形	-	-	-	0.85	-	底面中央に円形ピット	(2.26)	所蔵「冰室、櫛井地蔵」	?	?	?	?
D 6	Ⅳう3	H12・H23・H28を切る	円形	N - 52° - E	(2.12)	(2.10)	1.50	-	H24と盤面のピットで連結	H24	張後				
D 7	Ⅲき8	OT-1に切られる	長方形	N - 43° - W	4.10	(1.75)	0.50	-	-	-	-	-	-	-	
D 8	Ⅲあ10	H1・H5・H16に切られる	-	-	-	-	0.25	-	-	-	-	-	-	-	
D 9	Ⅲき10	H39を切り、H24に切られる	長方形	N - 7° - E	1.54	-	0.14	-	-	-	-	-	-	-	
D 10	Ⅲか10	H24・H25に切られる	不整形	-	-	-	0.50	-	-	-	-	-	-	-	
D 11	Ⅲか8	H25を切る	椭円形	N - 83° - E	(2.05)	1.70	0.88	(2.18)	-	-	-	-	-	-	-

NO	検出位置	長径	深度	覆土	NO	検出位置	長径	深度	覆土
P 3	IV \setminus 4	-	0.32	10YR5/3	P 4	IV \setminus 4	-	0.55	10YR5/3
P 5	IV \setminus 4	0.25	0.31	10YR3/2	P 6	IV \setminus 4	0.24	0.25	10YR3/2
P 8	IV \setminus 2	0.20	0.22	10YR3/2	P 9	IV \setminus 2	0.29	0.18	10YR3/2
P 11	III \setminus 10	0.22	0.08	10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含	P 12	III \setminus 10	0.32	0.22	10YR3/2, 10YR7/4 ローム少含
P 13	III \setminus 10	0.31	0.48	10YR3/2, 10YR7/4 ローム少含	P 14	VI \setminus 2	0.30	0.35	10YR3/2, 10YR6/4 ローム少含
P 16	IV \setminus 1	0.60	0.14	10YR3/2, 2/2 - 7/4 ローム少含	P 17	IV \setminus 1	0.38	0.42	10YR3/2, 2/2 - 7/4 ローム少含
P 22	IV \setminus 2	0.72	0.30	10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含	P 23	IV \setminus 1	0.60	0.40	10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含
P 24	IV \setminus 1	0.25	0.12	10YR4/2, 10YR7/4 ローム少含	P 25	III \setminus 10	0.30	0.25	-
P 31	IV \setminus 3	0.30	0.41	10YR3/4	P 32	IV \setminus 1	0.31	0.60	10YR6/4
P 33	IV \setminus 1	0.36	0.62	1 - 10YR4/2, 2 - 10YR6/4	P 34	IV \setminus 1	0.23	0.55	1 - 10YR4/2, 2 - 10YR6/4
P 35	IV \setminus 1	0.32	0.58	1 - 10YR4/2, 2 - 10YR6/4	P 36	IV \setminus 2	0.52	0.22	10YR2/3
P 37	IV \setminus 1	0.60	0.58	10YR4/2	P 38	IV \setminus 1	0.35	0.52	10YR3/2
P 39	IV \setminus 1	0.28	0.22	10YR3/2	P 40	IV \setminus 1	0.32	0.40	10YR3/2
P 41	IV \setminus 1	0.24	0.36	-	P 42	IV \setminus 1	0.28	0.20	-
P 43	IV \setminus 1	0.30	0.32	-	P 44	IV \setminus 1	0.25	0.40	-
P 45	III \setminus 10	0.25	0.30	-	P 46	IV \setminus 1	0.28	0.12	-
P 47	IV \setminus 1	0.28	0.14	-	P 49	IV \setminus 1	0.28	0.12	-
P 50	IV \setminus 1	0.30	0.14	-	P 51	IV \setminus 1	0.28	0.22	-
P 52	IV \setminus 1	0.42	0.24	-	P 53	IV \setminus 1	0.40	0.18	-
P 54	III \setminus 10	0.25	0.40	-	P 55	III \setminus 10	0.30	0.35	-
P 56	IV \setminus 1	0.35	0.25	-	P 57	IV \setminus 1	0.16	0.15	-
P 58	IV \setminus 1	0.45	0.20	-	P 59	IV \setminus 3	0.18	0.16	-
P 60	IV \setminus 3	0.30	0.12	-	P 61	IV \setminus 3	0.24	0.20	-
P 62	IV \setminus 3	0.20	0.16	-	P 63	IV \setminus 1	-	0.16	-
P 64	IV \setminus 1	0.30	0.12	-	P 65	III \setminus 10	-	0.20	-
P 66	IV \setminus 1	-	0.45	10YR3/2	P 67	IV \setminus 2	0.34	0.14	-
P 68	IV \setminus 2	0.42	0.12	10YR3/2	P 69	IV \setminus 2	0.70	0.40	10YR3/2
P 70	IV \setminus 2	0.42	0.44	10YR2/2	P 71	IV \setminus 2	0.42	0.40	1 - 10YR3/2, 2 - 10YR6/4
P 72	IV \setminus 2	0.40	0.14	10YR5/3	P 73	IV \setminus 2	0.30	0.45	10YR3/2
P 74	IV \setminus 2	0.38	0.20	10YR4/2	P 75	IV \setminus 2	0.40	0.30	10YR4/3
P 76	IV \setminus 3	0.70	0.25	10YR3/2	P 77	IV \setminus 3	0.28	0.34	10YR3/2
P 78	IV \setminus 3	0.32	0.14	10YR3/2	P 79	IV \setminus 3	0.45	0.18	10YR3/2
P 80	IV \setminus 2	0.35	0.42	10YR3/2	P 81	IV \setminus 3	0.60	0.38	10YR3/2

第3表 ピット一覧表

第三章まとめ

最大の成果としては、獸骨の項でも述べたように「ト骨」の発見が挙げられる。当遺跡が存在する枇杷坂遺跡群ではかつて、上直路遺跡において、屋内墓に埋葬された14~15点もの銅鏡をまとった人物が発見されている。今回の調査でもH3から小破片1点、H25から同一個体の可能性を有する2点、H39から1点の計4点の銅鏡が出土している。大きさは絶じて小型である。当遺跡群内の弥生後期集落は多くの銅鏡を入手出来る状態であった事が推測される。また、H25・H37からは小型ではあるものの翡翠製の勾玉が出土している。以上の副葬品は、装着していた人物が華奢であり、性別的には女性、年齢的には子供を想起させる。「ト骨」の存在も含め、少女の巫女の存在を想像させる。

次ぎに集落の変遷についてふれておきたい。今回の調査では弥生時代後期吉田式期~平安時代にかけての集落が検出された。遺構の密集度、遺物の出土量共に佐久地方では屈指の遺跡であろう。特に、資料的に希薄な吉田式期の資料を追加出来たことはひとつの成果であろう。

最後に弥生時代の獸骨を多量に出土した住居址例として、西一本柳遺跡Ⅲ・ⅣのH41号住居址を再評価する必要がある。時期的にも吉田式期であるし、骨蔵も伴っている。出土状況もよく似ており、獸骨の種類も日本鹿・猪・巻貝であるなど、共通点が多い。



H1号住居址



←H1号住居址カマド

↓H2号住居址

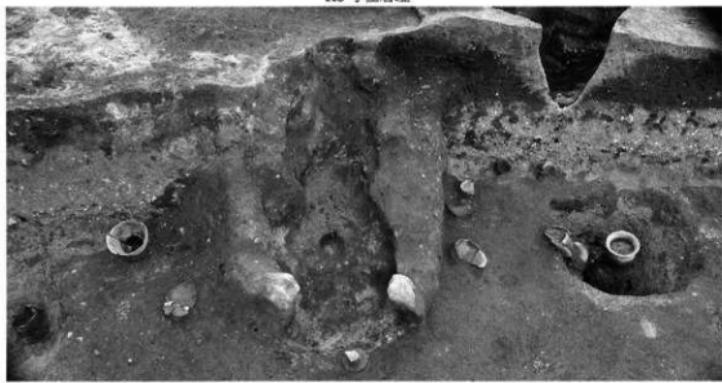


H2号住居址カマド

図版 2



H3号住居址



H3号住居址カマド



图版 4



H9 号住居址



H10 号住居址



H11 号住居址



H10 号住居址炉



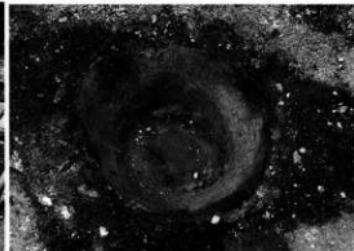
H12 号住居址



H13 号住居址



H15 号住居址



H15 号住居址炉



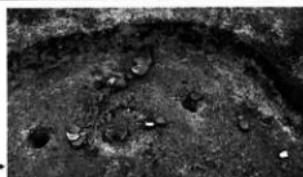
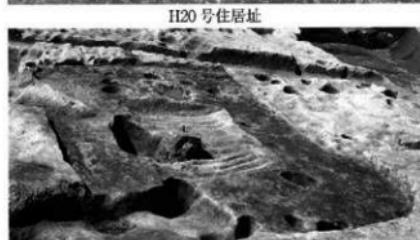
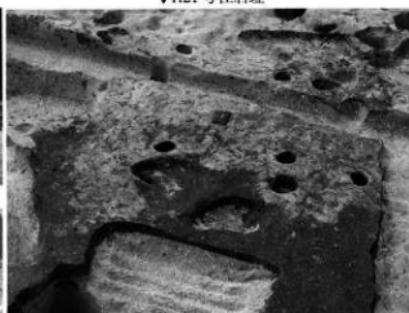
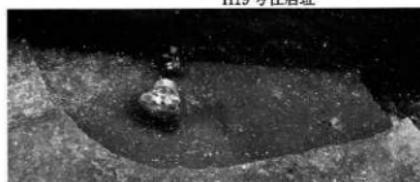
H16 号住居址

図版 6





↓ H21 号住居址

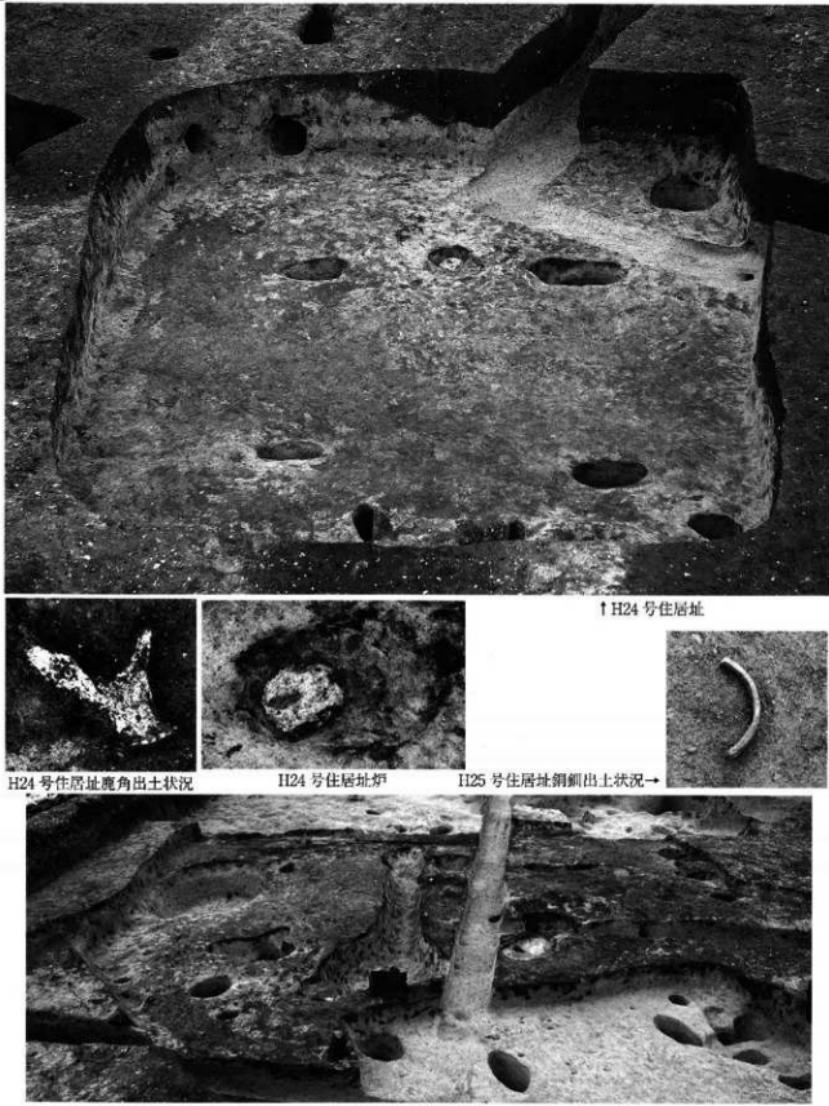


↓ H23 号住居址



H23 号住居址炉

図版 8



↑H24号住居址

H24号住居址鹿角出土状況

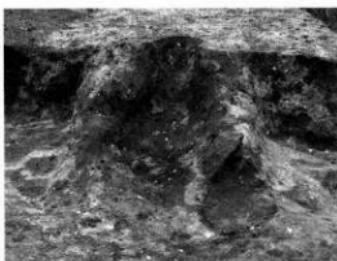
H24号住居址炉

H25号住居址銅鉤出土状況→

H25·H31号住居址



↑ H26 号住居址



H26 号住居址カマド



↓ H27 号住居址



H27 号住居址遺物出土状況

H27 号住居址カマド



图版 10



H28 号住居址炉

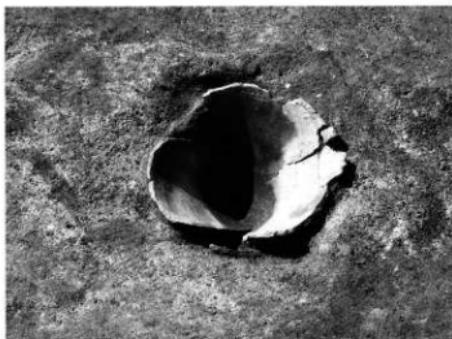


H29 号住居址





H30号住居址炉1



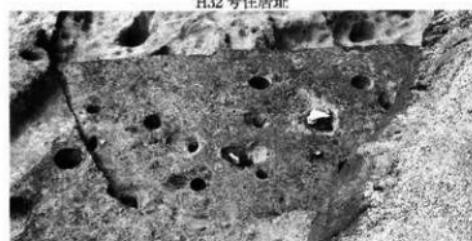
H30号住居址炉2



H32号住居址



H33号住居址



H34号住居址



H33号住居址カマド

图版 12



H36 号住居址



H37 号住居址



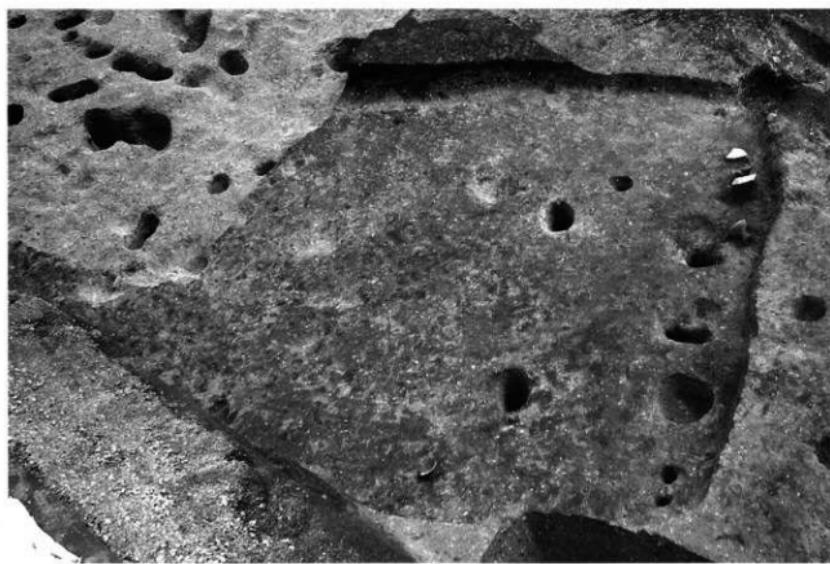
H37 号住居址



H38 号住居址



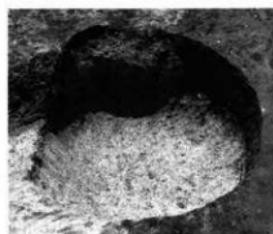
H39 号住居址



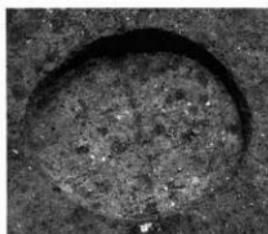
H40 号住居址



H41 号住居址



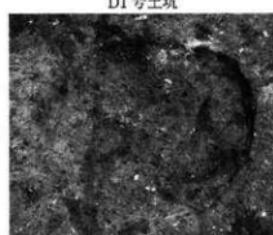
D1 号土坑



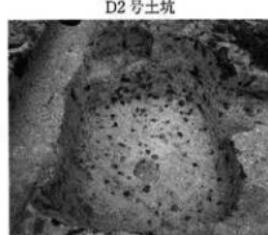
D2 号土坑



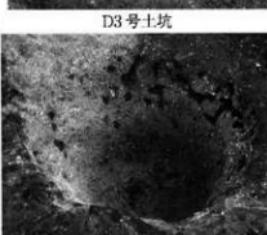
D3 号土坑



D4 号土坑

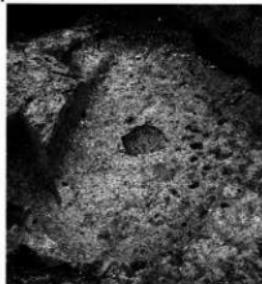


D5 号土坑

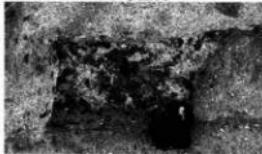


D6 号土坑

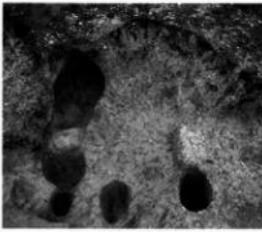
図版 14



D7号土坑



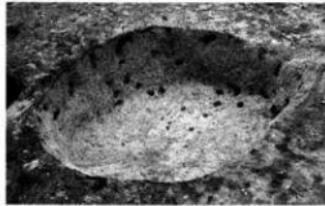
D8号土坑



D10号土坑



D9号土坑



D11号土坑



M1号溝址



M2 号溝址

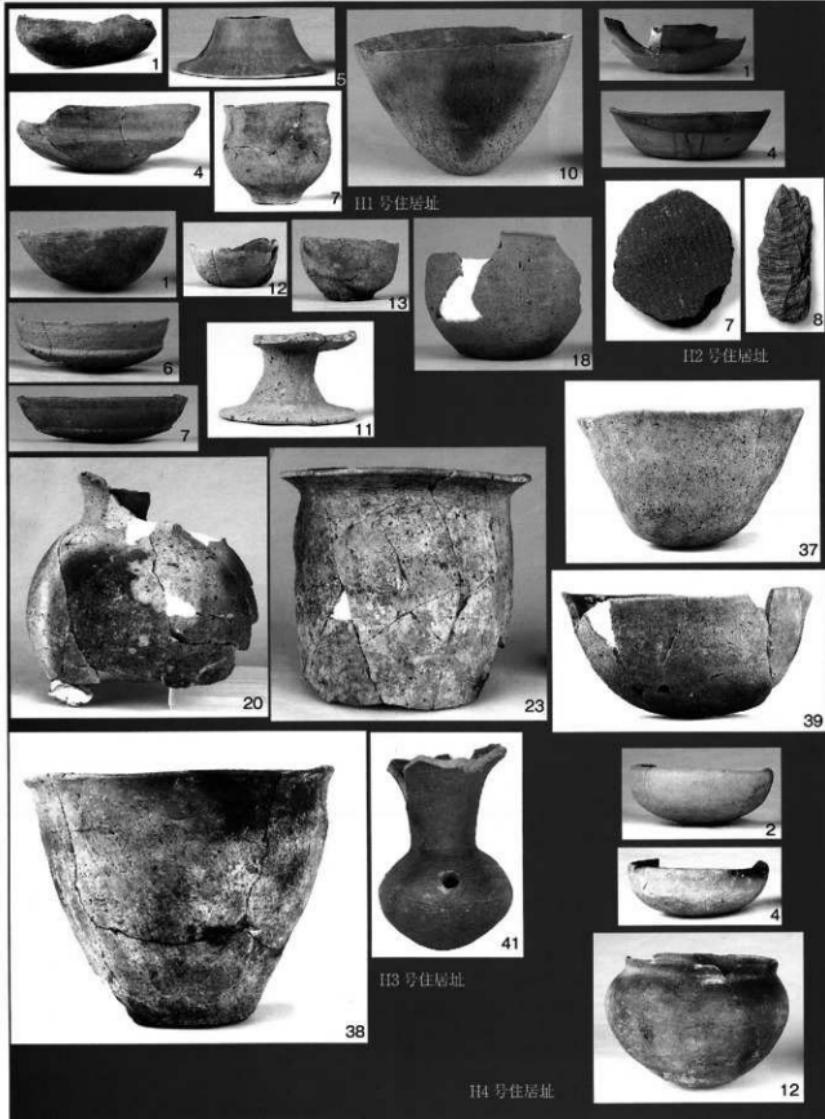


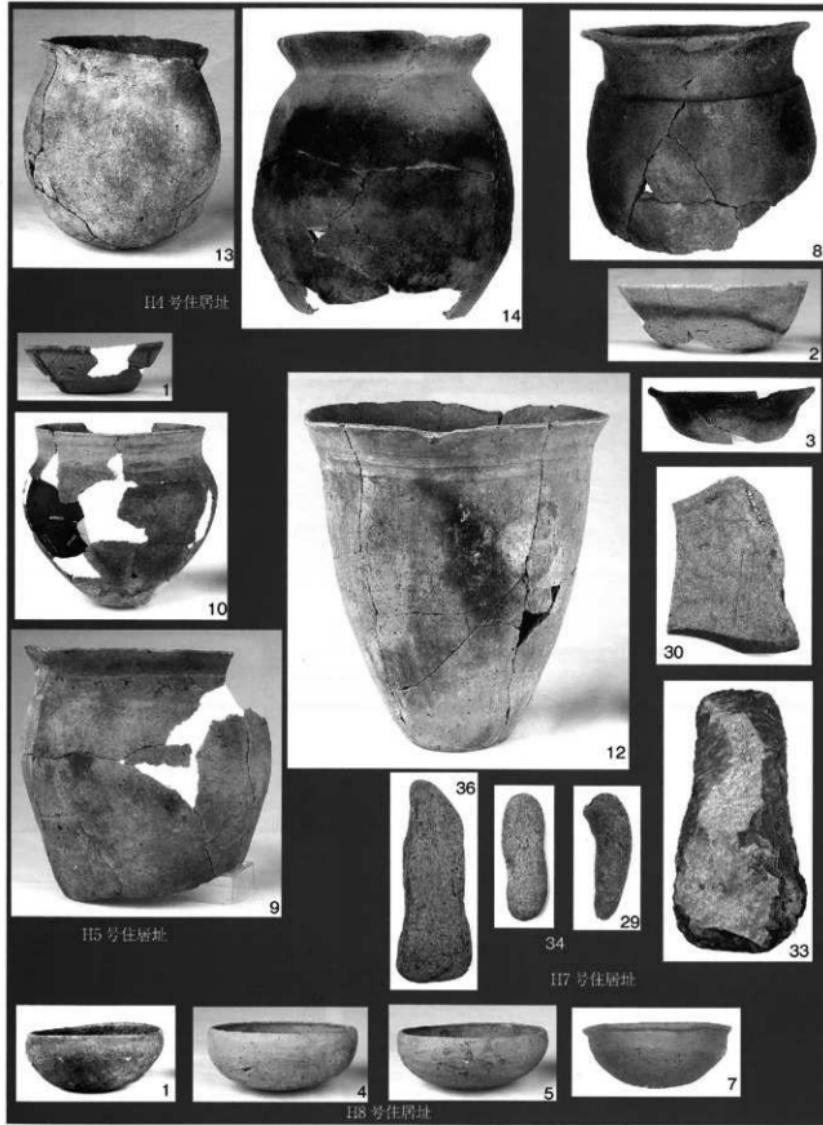
M3 号溝址



OT1

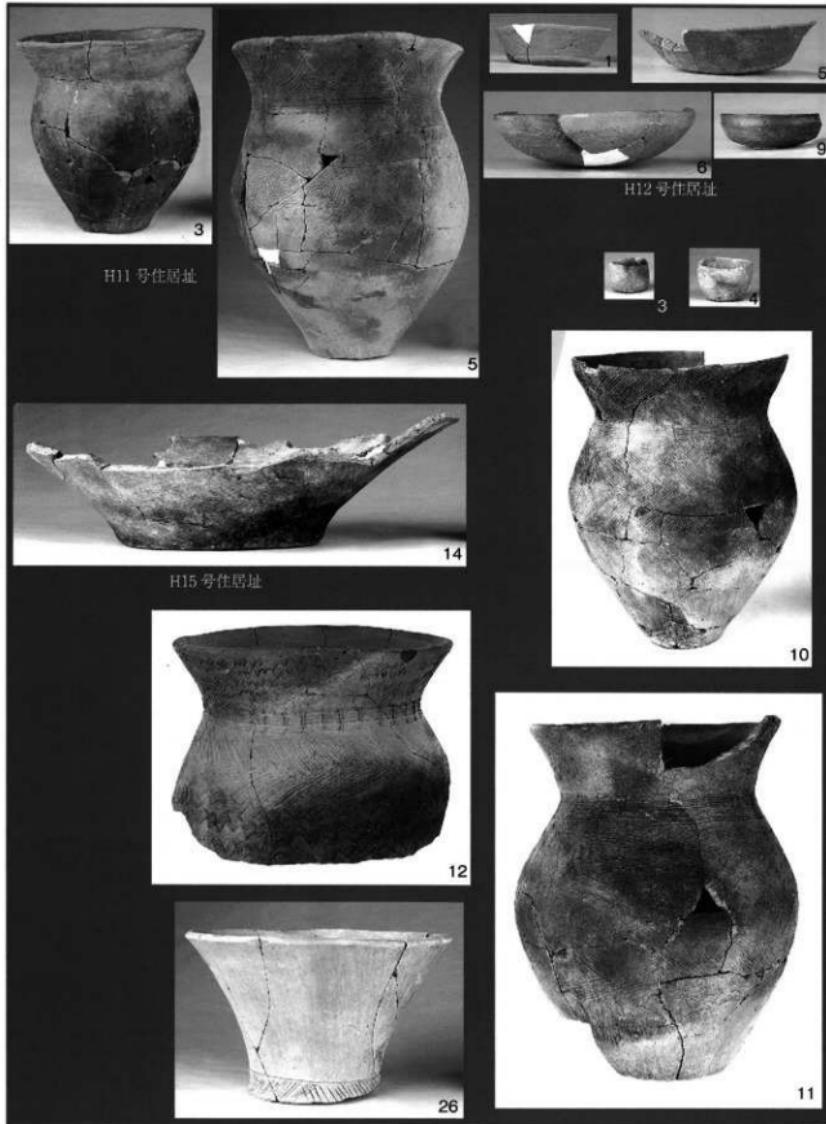
图版 16





图版 18





H16 号住居址

图版 20



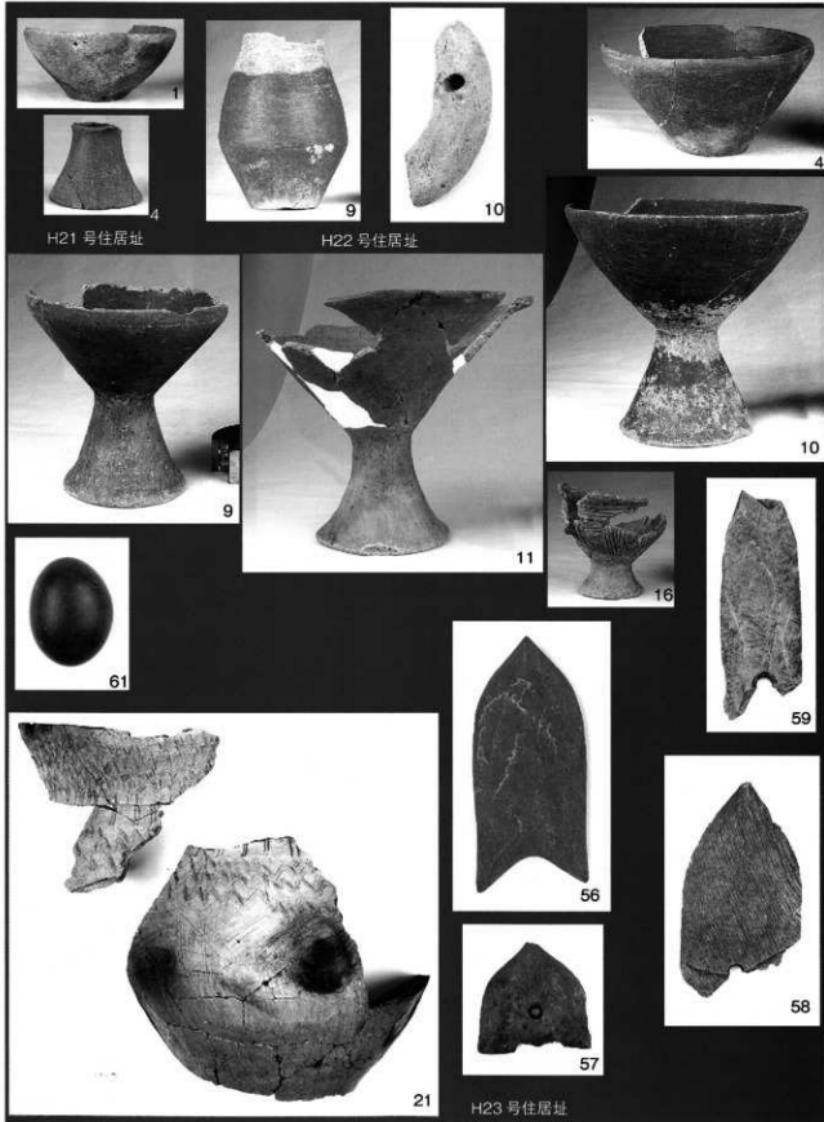
H17 号住居址

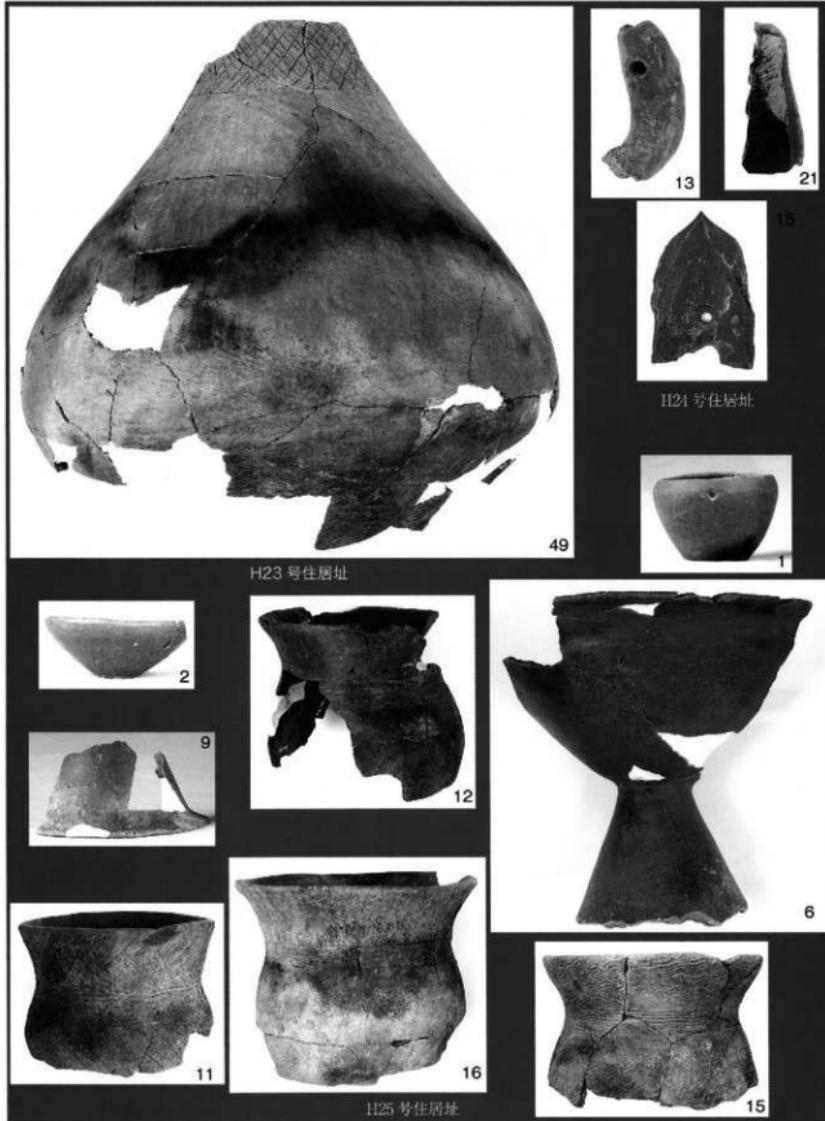


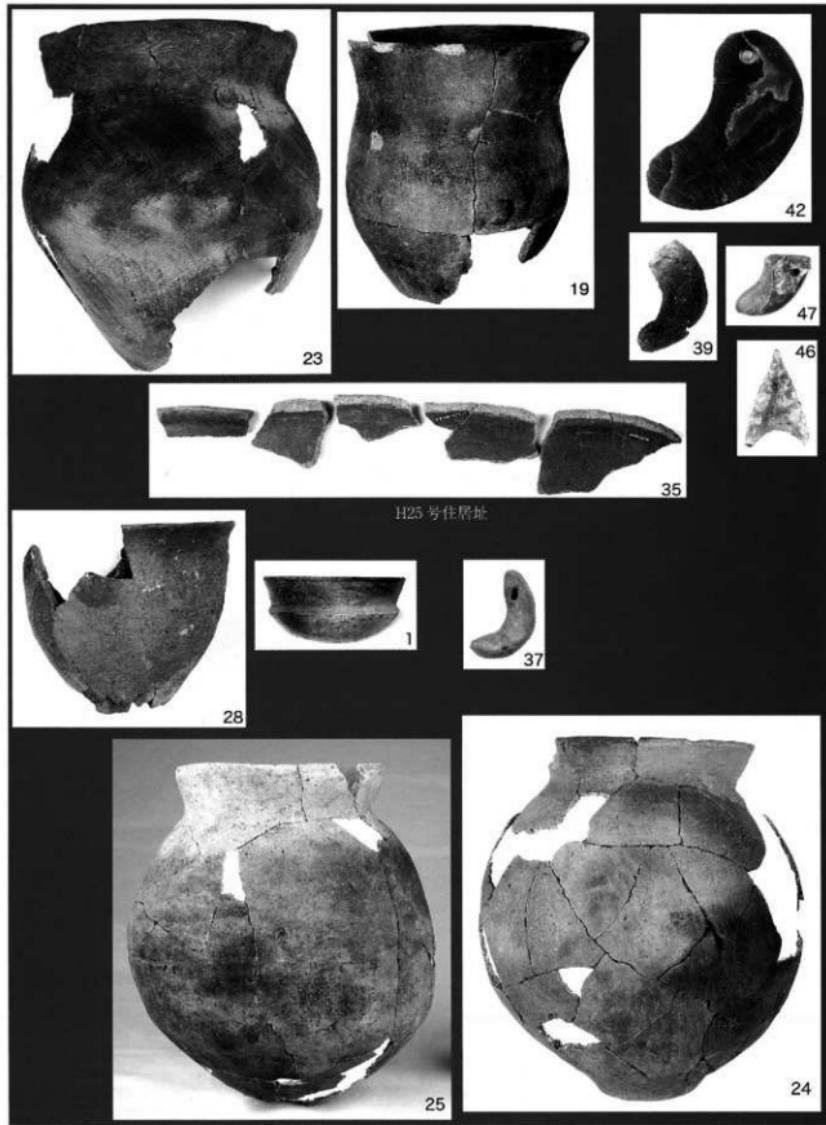
H18 号住居址



H19 号住居址

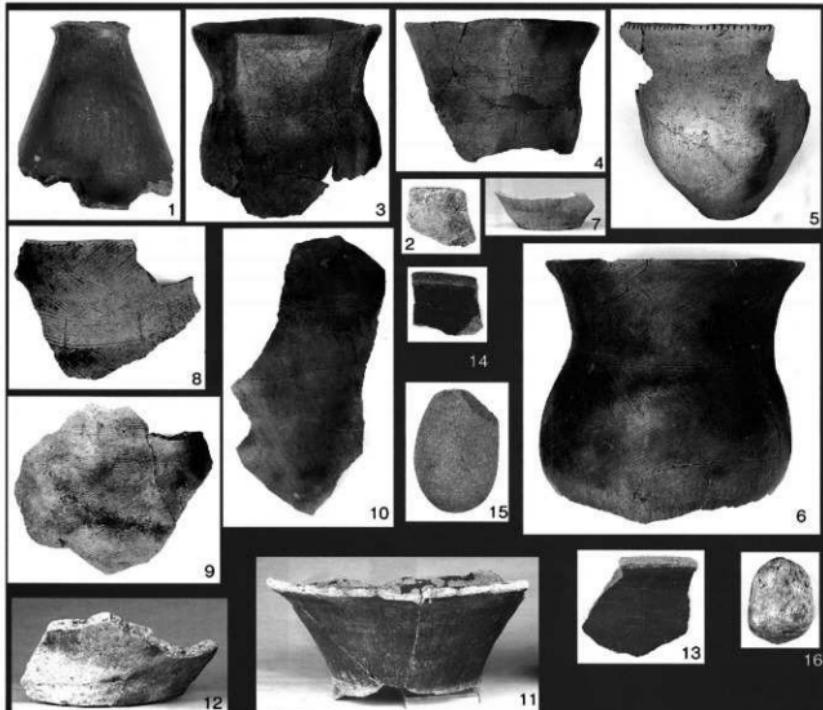




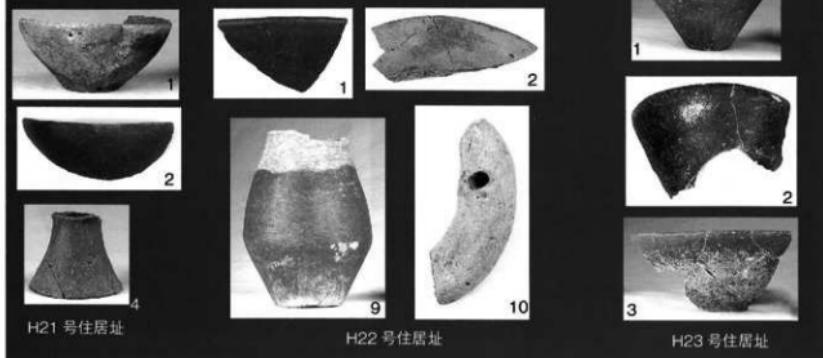


H26号住居址

図版 24



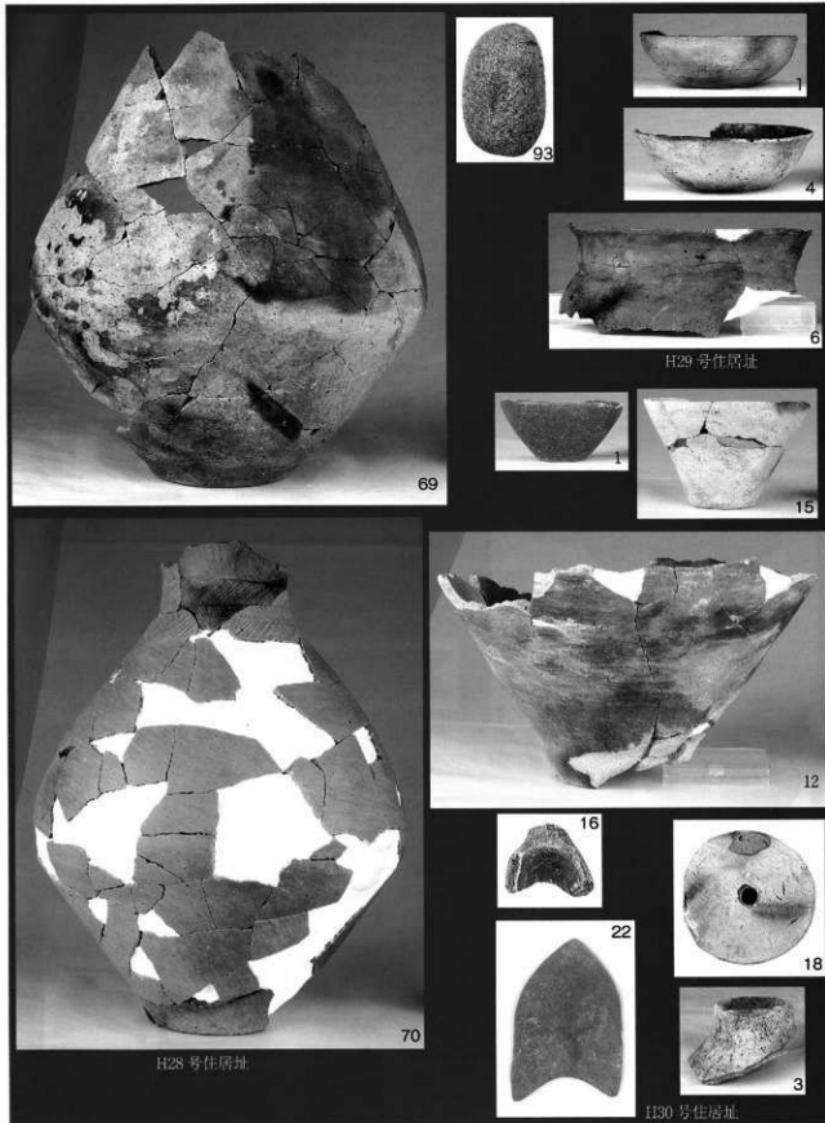
H20号住居址



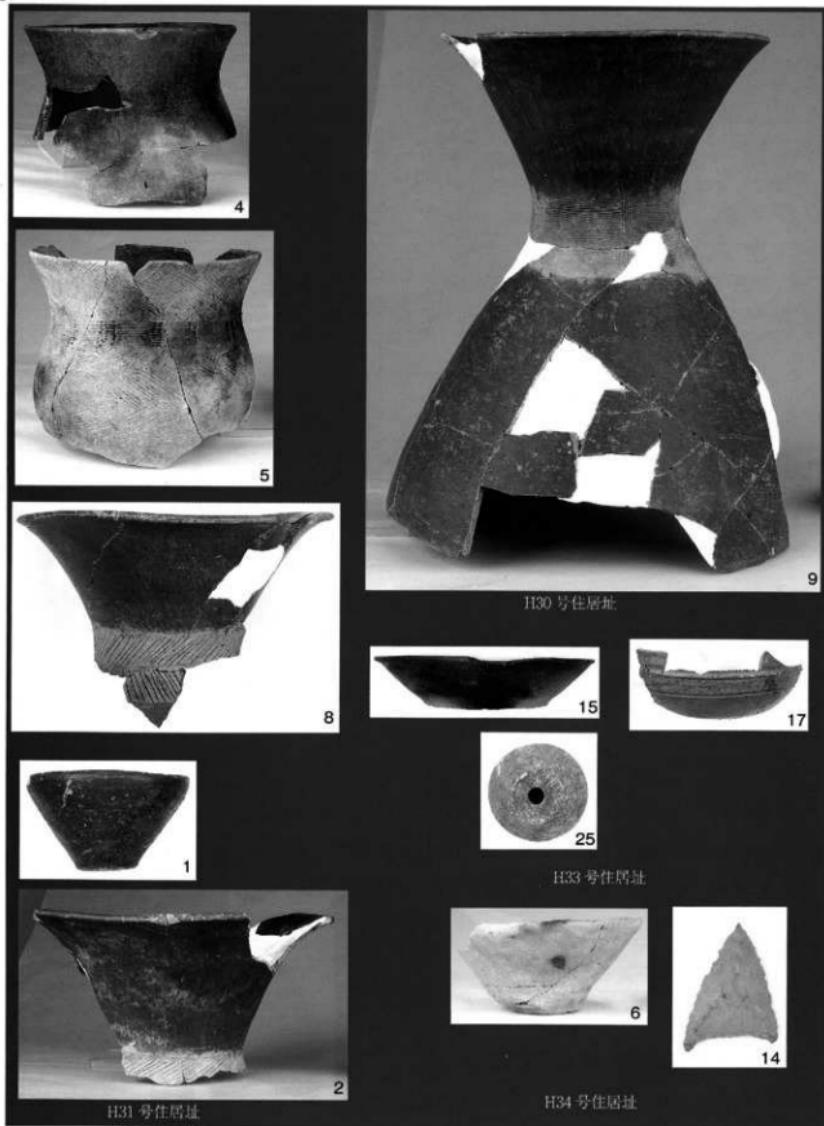
H21号住居址

H22号住居址

H23号住居址



图版 26

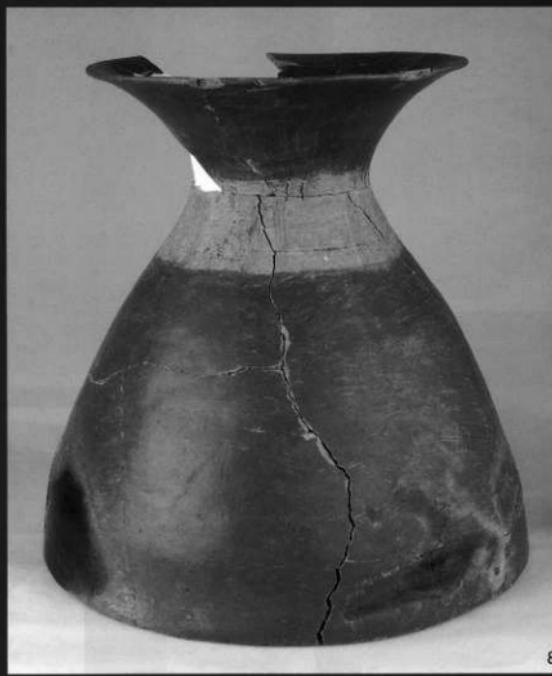




1



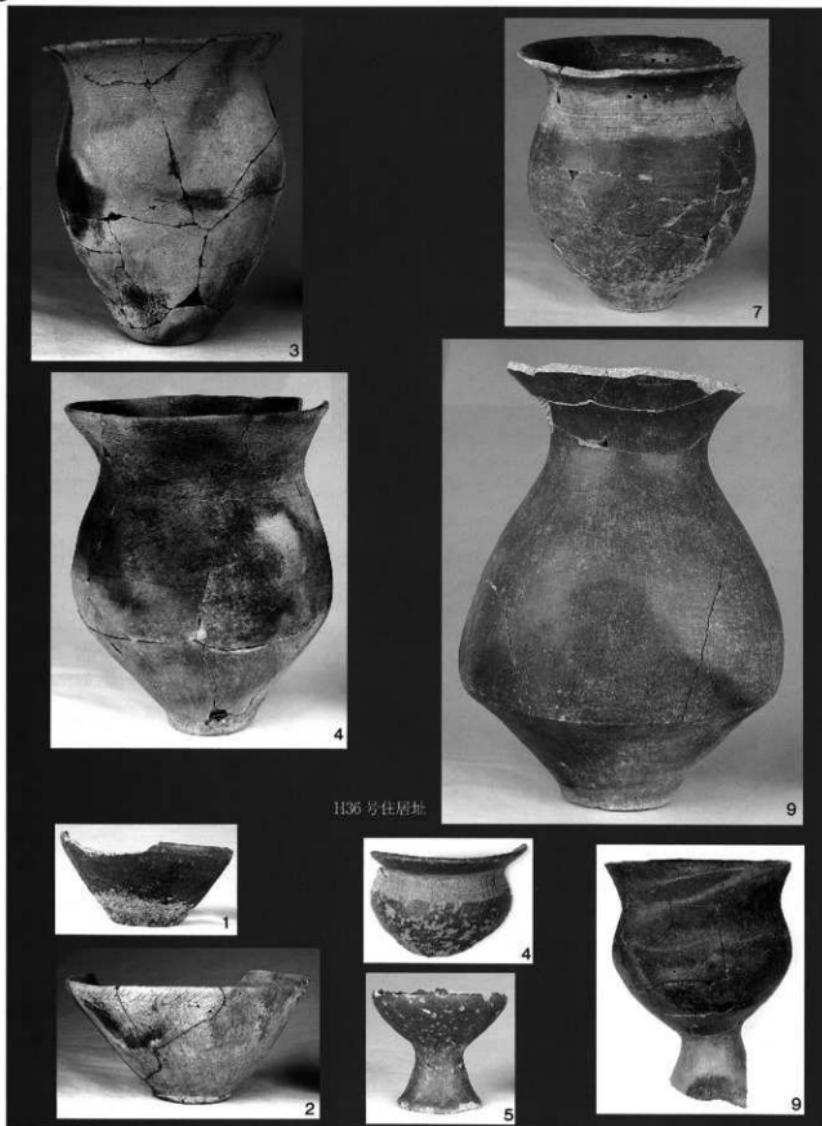
2



3

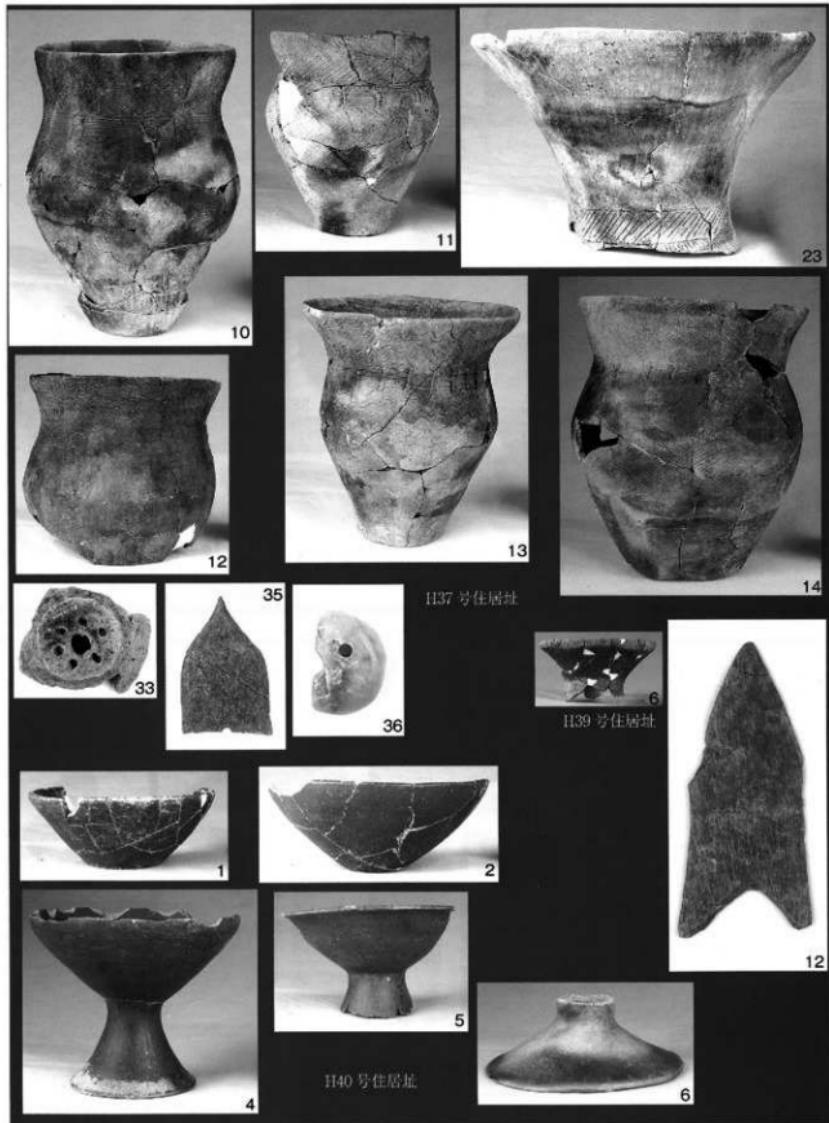
H36 号住居址

図版 28

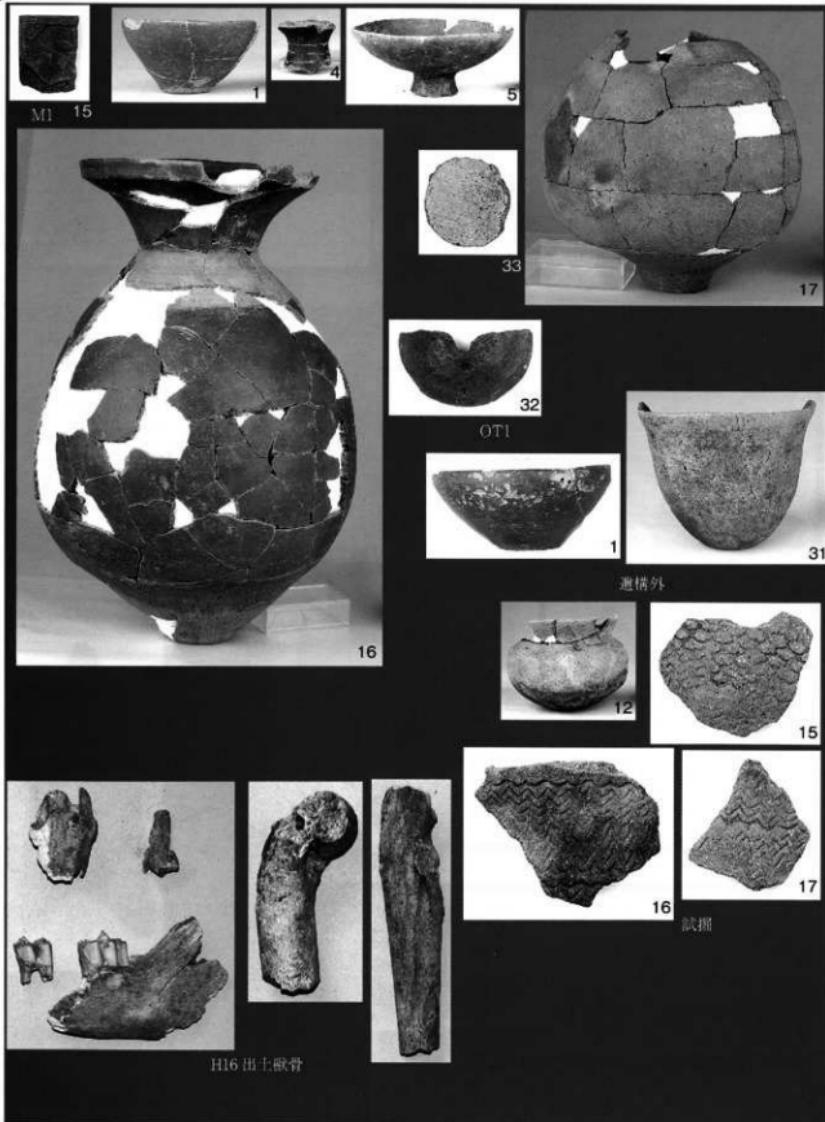


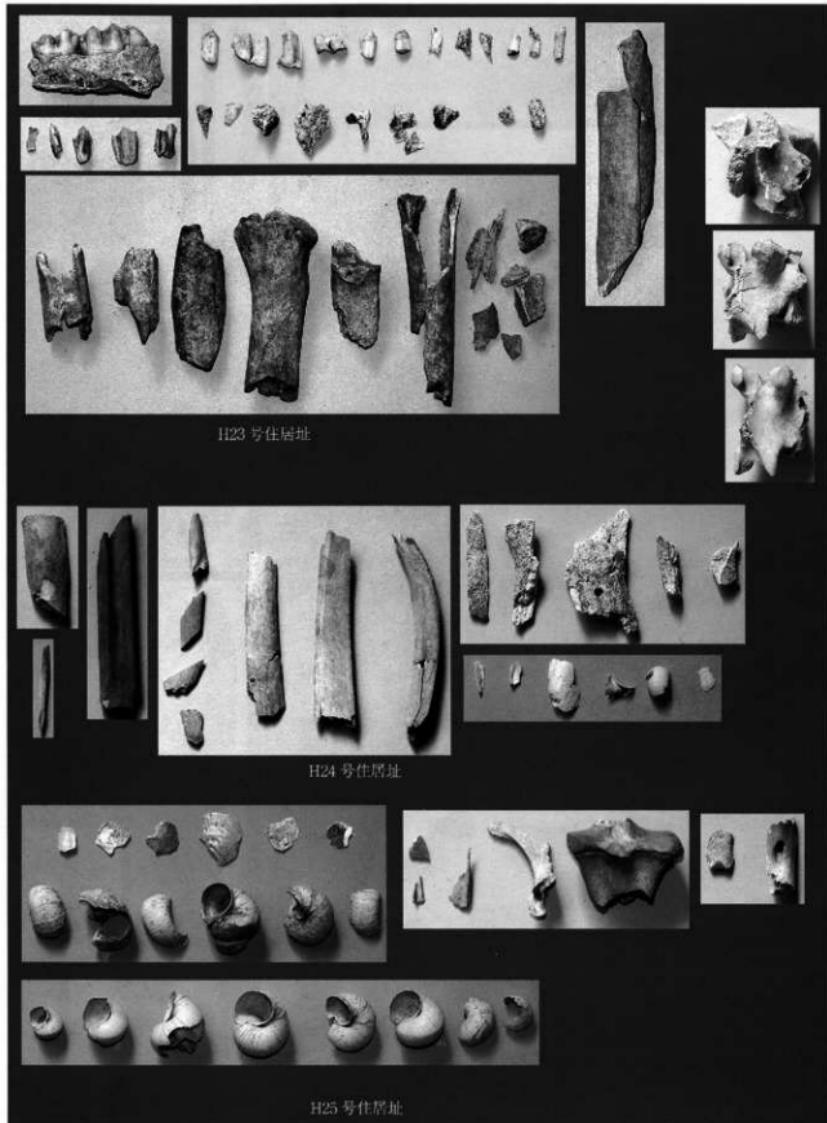
H36 号住居址

H37 号住居址

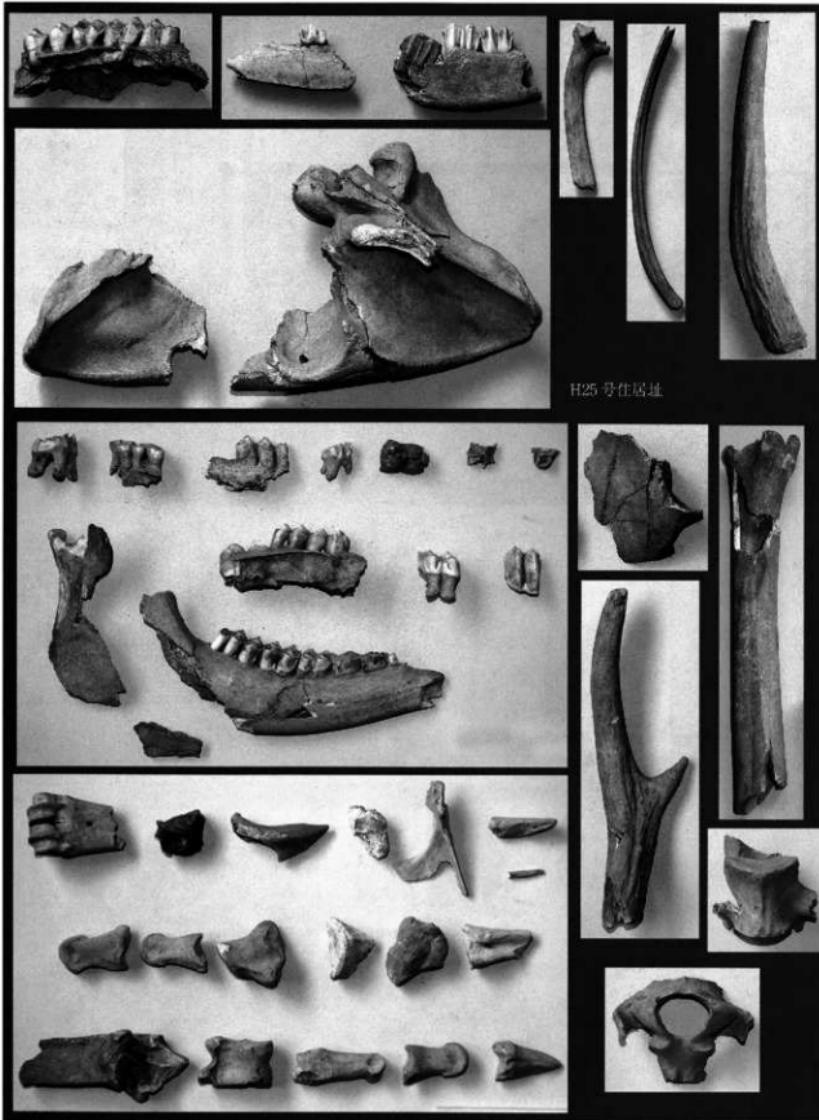


図版 30





图版 32



H25 号住居址

報告書抄録

ふりがな	えんしょうぼういせき
書名	円正坊遺跡Ⅳ 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第185集
編集者名	小林眞寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20110331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
ふりがな	えんしょうぼういせき
遺跡名	円正坊遺跡（IEO）■
ふりがな	ながのけんざくしいわむらだ
遺跡所在地	長野県佐久市岩村田
遺跡番号	41
北緯	36.15.33.1714
東経	138.29.08.7195
調査期間	2009/05/26-2009/07/31
調査面積	1.133 m ²
調査原因	学生寮建設
種別	集落跡
主な時代	縄文時代早期／弥生時代後期／古墳時代後期／平安時代
主な遺構	堅穴住居址41（弥後・古後・平）、土坑11基（弥・古・平） 振立柱建物址2（平）、Pit66（弥・古・平）、溝址3（弥・平） 円形周溝墓1（弥）
主な遺物	縄文土器（早・後）、弥生土器（中・後）、土師器（古・平）、須恵器（古・平） 石器、石製品、銅製品、鉄製品、古錢、獸骨、骨角器、貝殻
特記事項	ト骨・銅鏡が出土。
要約	調査区の西南方向のマンション建設に伴う円正坊遺跡Ⅳで検出された弥生後期・古墳・平安時代の集落が今回の調査区まで、濃密に展開している事が明らかとなった。 出土遺物では弥生時代後期のト骨、多量の鹿骨・猪骨・貝殻、銅鏡4点、鐵器5点、翡翠製勾玉などの希少遺物が検出された。

引用・参考文献

- 1999 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第73集 「西一本柳Ⅲ・IV」 佐久市教育委員会
長野県の弥生土器 長野県考古学会
考古学と自然科学② 考古学と動物学 同成社 西本豊弘・松井章
2001 大阪府立弥生文化博物館図録22 弥生都市は語る 大阪府立弥生博物館
2005 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第126集「聖原」第5分冊 佐久市教育委員会
2006 動物考古学の手引き 獨立行政法人 文化財研究所
奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター
- 2007 佐久市文化財年報15 円正坊遺跡VI調査報告書－その1－ 佐久市教育委員会
2008 動物考古学 京都大学学術出版会 松井章
2008 佐久市文化財年報16 円正坊遺跡VI調査報告書－その2－ 佐久市教育委員会
2009 佐久市文化財年報17 円正坊遺跡VII調査報告書－その1－ 佐久市教育委員会
2010 佐久市文化財年報18 円正坊遺跡VII調査報告書－その2－ 佐久市教育委員会
2010 発掘調査のてびき－整理・報告書編－ 文化庁文化財部記念物課

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第185集

批杷坂遺跡群 円正坊遺跡VIII

2011年3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀5953

Tel 0267-68-7321

印刷所 キクハライズン有限会社

